陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要・Ⅱ

２００６年３月

大阪府教育委員会

はじめに

大阪府の西南部にある泉北丘陵は戦後に発展した新しい町として、鉄道や高速道路が縦貫し、大規模にニュータウンが開発されました。その北側の台地に位置する陶器千塚・陶器遺跡は、府内では数少なくなった田園風景が残り、ため池の保全や活用も試みられています。

現在の状況に対し、今から１５００年以上前の古墳時代、泉北丘陵一帯から北側の台地にかけては半島から渡来した陶工を中心に、窯で焼き物をつくる町として、現在とは違った発展を遂げていたのです。

泉北ニュータウンの開発にともなう昭和４０年代から続けられた発掘調査では、約６００基の窯跡と焼き損じた大量の須恵器や、それを支えた人たちの集落・墳墓などが明らかにされました。北側台地の陶器遺跡・陶器千塚も古墳時代後期から奈良時代にかけて、焼き物の町として須恵器つくりがつづけられていたことがこれまでの発掘調査などによって判明しました。

陶器千塚・陶器遺跡の地域では須恵器つくりが終焉した平安時代以降にも遺構・遺物が発見されることから、発展を遂げていたことが明らかにされつつあります。特に、この地域は中世末期、関が原合戦の恩賞などで岸和田城主の一族が領地として開発し、明治維新まで小出陶器藩の所領となって新田開発が進められました。

今回調査でも古墳時代から平安時代にかけての須恵器つくりの遺構・遺物と、その後の鎌倉時代・室町時代に集落が展開していく様相、さらに戦国時代から江戸時代になって本格的に水田開発が進められていく様相などが明らかにされました。

以上は地域の開発や文化をより鮮明にする成果であるほか、これまであまり知られていなかった歴史的景観を復元する上で大きな貢献を果たすことができると考えます。

最後に、調査・整理にご協力、ご指導いただきました関係各位にお礼申し上げるとともに、今後とも文化財行政に一層ご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成18年３月31日

大阪府教育委員会
文化財保護課長　丹上　務

例　　言

1．本書は府営集落基盤整備事業「陶器北地区」予定地内で実施された陶器千塚・陶器遺跡発掘調査の概要報告書である。調査は大阪府環境農林水産部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。本調査の調査番号は04008である。

2．現地調査は文化財保護課調査第二グループ技師、西川寿勝を担当として、陶器北地区内の八田地区（陶器遺跡）と住区地区（陶器遺跡・陶器千塚）を平成16年6月～17年3月に実施した。遺物整理は現地調査と並行してはじめ、調査管理グループ林日佐子・西川寿勝・藤田道子を担当者として実施し、平成18年3月末に終了した。

3．本書の執筆・編集は西川が行い、一部は渡辺晴香・佐々木健太郎（本府調査員）による。

4．本調査の航空写真測量は（株）かんこうに委託して実施した。なお、撮影フィルムは上記の委託会社において保管している。また、遺物写真は有限会社阿南写真工房に委託して撮影した。

5．本文・挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（T．P．値）を示す。また、座標値は国土座標第Ⅵ系による新座標で、方位は座標北を指す。

6．発掘調査・遺物整理及び本書の作成に要した経費は農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。報告書は300部作成し、一部あたりの単価は1,224円である。

目　　次

はじめに　例言　目次
第Ⅰ章　調査計画　1．位置と環境（西川）……1
2．調査の経緯（西川）……5
a　これまでの調査と地区設定
b　基本層序と遺構の図化

第Ⅱ章　発掘調査　1．現地調査（佐々木・西川）……7
a　1区の調査
b　2区の調査
c　8区の調査
d　3・4区の調査
e　5・6区の調査
f　7区の調査

2．出土遺物（渡辺・西川）……33
a　古墳時代後期以前の遺物（1～8区）
b　古墳時代後期の遺物（1区）
c　古墳時代後期の遺物（2区）
d　古墳時代後期の遺物（3～8区）
e　古代の遺物（1～8区）
f　中世の遺物（1～8区）
g　近世の遺物（1～8区）

第Ⅲ章　まとめ（西川・渡辺・佐々木）……68

発見遺物対照表（渡辺）……69

挿図・図版目次

図１　周辺遺跡分布図 ……2
図２　これまでの調査区位置図 ……3
図３　調査区地区割図 ……4
図４　地区割概念図 ……6
図５　１ａ・１ｂ区遺構図 ……8
図６　１ｃ・１ｅ区遺構図 ……9
図７　１ｄ区遺構図 ……10
図８　建物１－１平面および断面図 ……11
図９　建物１－２平面および断面図 ……12
図10　１区の大土坑平面および断面図 ……13
図11　２区遺構図 ……16
図12　建物２－１平面および断面図 ……17
図13　建物２－２平面および断面図 ……18
図14　２区の土坑平面および断面図 ……19
図15　８区遺構図 ……22
図16　建物８－１平面および断面図 ……23
図17　１区出土陶棺 ……24
図18　３・４区遺構図 ……26
図19　５・６区遺構図 ……28
図20　６区方形区画平面および断面図 ……29
図21　６区出土古墳時代中期須恵器杯身 …30
図22　古代の須恵器 ……31
図23　７区遺構図 ……32
図24　サヌカイト製打製石器 ……33
図25　１区出土砥石 ……34
図26　１・２区出土土師器小壷 ……34
図27　１・２区出土須恵器乾燥台 ……35
図28　１区出土須恵器（１）……37
図29　１区出土須恵器（２）……38
図30　１区出土須恵器（３）……39
図31　１区出土須恵器（４）……40
図32　１区出土須恵器（５）……41
図33　１区出土須恵器（６）……42
図34　１区出土須恵器（７）……43
図35　１区出土須恵器（８）……44
図36　１区出土須恵器（９）……45
図37　１区出土須恵器（10）……46
図38　１区出土須恵器（11）……47
図39　１区出土須恵器（12）……48
図40　１区出土須恵器（13）……49
図41　１区出土須恵器（14）……50
図42　２区出土須恵器（１）……53
図43　２区出土須恵器（２）……54
図44　２区出土須恵器（３）……55
図45　２区出土須恵器（４）……56
図46　２区出土須恵器（５）……57
図47　２区出土須恵器（６）……58
図48　４～７区出土須恵器（１）……60
図49　４～７区出土須恵器（２）……61
図50　８区出土須恵器 ……62
図51　中世の遺物（１）……64
図52　中世の遺物（２）……65
図53　近世の遺物 ……67
報告書抄録 ……73
図版表紙　１・２区出土須恵器集合
図版１　１・２区全景
図版２　３～６区全景
図版３　５～８区全景
図版４　須恵器器種別集合（１）
図版５　須恵器器種別集合（２）
図版６　須恵器器種別集合（３）
図版７　打製石器・砥石・中世陶磁器
図版８　中世・近世の遺物

第Ⅰ章　調査計画

1．位置と環境

陶器千塚・陶器遺跡は大阪府南西部、泉北丘陵の北側に位置する台地上にある（図１）。泉北丘陵から北側の台地にかけては陶器川・前田川・石津川・和田川などが南東から北西に向かって流れ、いくつかに分断される。水系は下流で石津川に合流し、大阪湾に注ぐ。

石津川下流は北側が百舌鳥古墳群、南側が四ツ池遺跡となる。石津は巨大古墳造営の物流拠点とされていたほか、上流で作られた須恵器を発信する交易の拠点ともなっていたと考える。

そして、石津川の中流域は陶器遺跡・陶器南遺跡をはじめ、小阪遺跡・伏尾遺跡・大庭寺遺跡・野ノ井遺跡など、須恵器つくりに関連する集落が水系ごとに営まれた。また、集落の周辺には陶器千塚・田園百塚・小代古墳群・野ノ井古墳群・牛石古墳群・信太千塚などの群集墳が営まれた。これらの古墳群には多彩な須恵器の副葬が認められることはもちろん、須恵器大甕を主体部とする古墳、特殊な須恵質の土管状の棺を主体部にするものなど、独特の埋葬形態が注目できる。

中でも、陶器千塚は「カマド塚」と呼ばれる丸太を骨組みに粘土を張って壁を作り出した木芯粘土室を主体部にもつ古墳や、主体部を焼成した古墳が営まれていたことで、須恵器工人との技術的かかわりがうかがわれる。

石津川の上流域には陶邑窯跡群が展開する。窯は水系ごとに陶器山地区・高倉寺地区・富蔵地区・栂地区・光明池地区・大野池地区などと分けられ、主に水系の南西斜面に窯が築かれている。水系の谷間を通って吹き上げる海風を利用したためと考える。

当初、陶邑窯の操業は高倉寺地区の支群の中心に最古段階の73号窯や85号窯が発見されたことにより、中心から辺縁に拡大していく図式が予想された。ただし、もっとも古い窯が朝鮮半島の技術を直接模倣したものではなく、日本化が進んでいることを理由に、窯の技術導入は多元論、あるいは更なる導入期の窯跡群が想定された。

ところが、泉北丘陵の先端周辺にある大庭寺遺跡・狐池南遺跡・観音寺遺跡などから導入期の須恵器窯が発見されるにいたり、中流域から上流に向かって窯群の拡大する図式が明確になってきた。さらに、これらの須恵器の特徴から、朝鮮半島の技術は直接に陶邑へ導入された実態も明白となりつつある。導入期の須恵器窯は各地にあるとしても、生産を軌道に乗せ、全国的な供給を陶邑窯跡群が担っていたことは否めない状況にある。

さて、これまでに陶邑の陶器山地区では最古段階の須恵器窯が発見されていない。立地的な制約であるという見方もあるが、連綿と操業が続く実態から見て、やはり導入期の窯がどこかにあったのではないかと予測する。

須恵器窯と工人集落は古代になっても継続する。しかし、律令体制に移行した段階の画期や管理していた役所跡などは発見されていない。飛鳥・奈良の都城と地方の公的な施設への大規模供

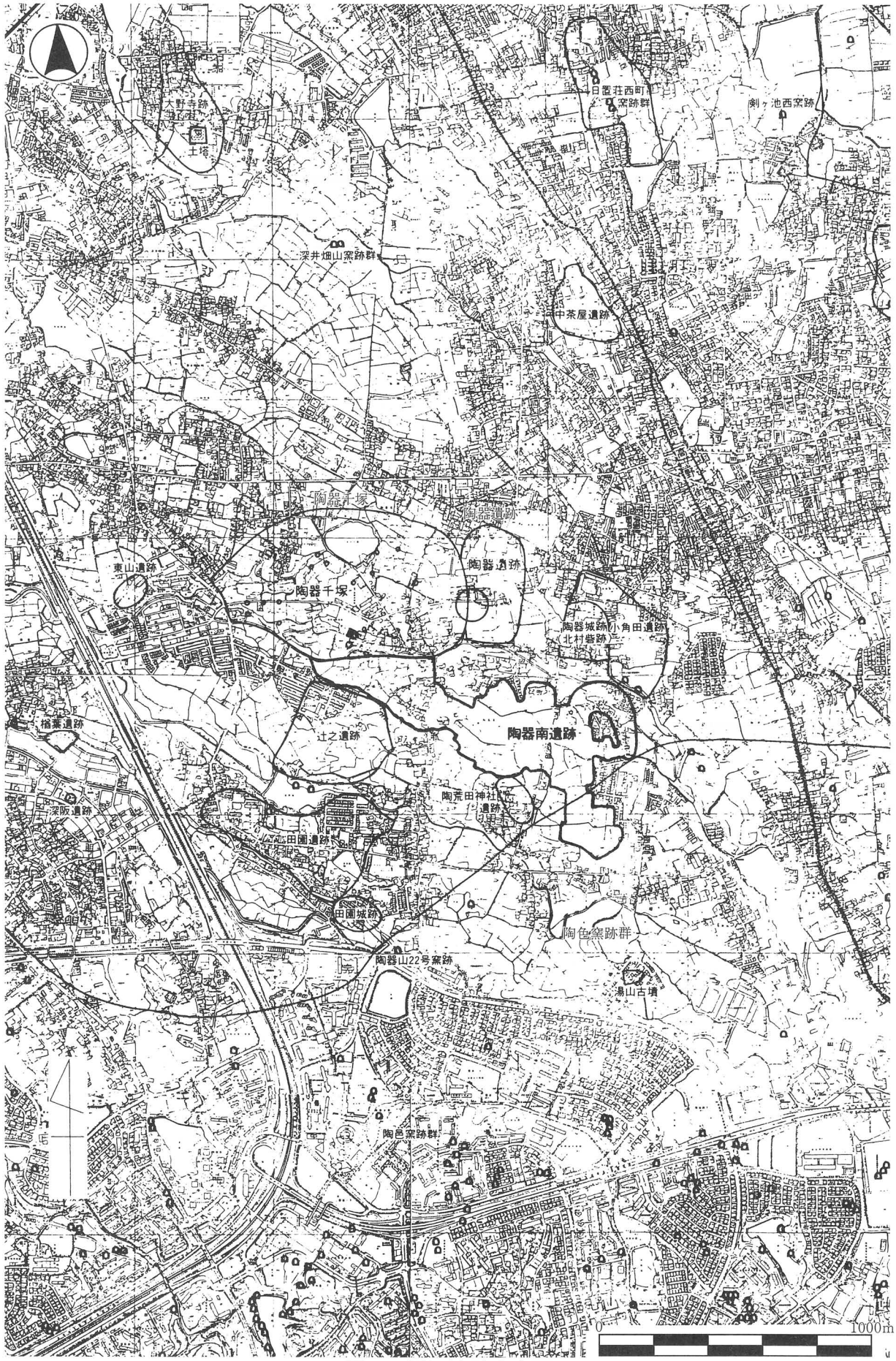

大野寺跡
土塔
日置荘西町窯跡群
剣ヶ池西窯跡
深井畑山窯跡群
中茶屋遺跡
陶器千塚
陶器遺跡
東山遺跡
陶器千塚
陶器城跡
北村砦跡
小角田遺跡
陶器南遺跡
辻之遺跡
檜葉遺跡
陶荒田神社遺跡
深阪遺跡
田園遺跡
田園城跡
陶器山22号窯跡
陶色窯跡群
陶器山古墳
陶色窯跡群
0
1000m

図１　周辺遺跡分布図

図2　これまでの調査位置図

給のみならず、硯や仏具といった律令や仏教の必需品ともいえる器物を管理する体制は解明されていない。和泉は奈良時代後期以降、調として、須恵器を貢納していたことが文献史料よりうかがえる。陶器山地区の工人集落はその頃にはみられず、体制の変化を裏付けるものだろう。

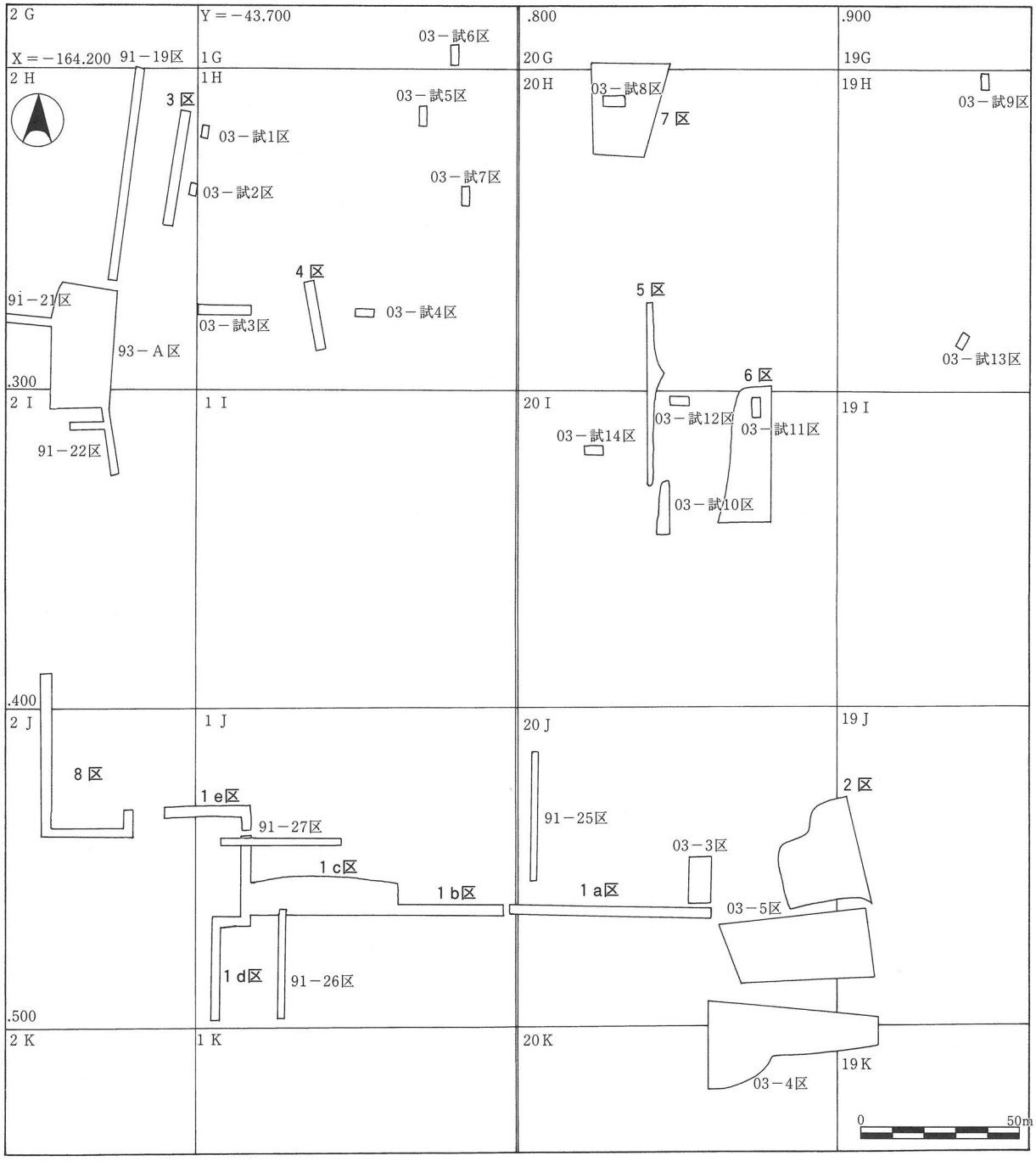


図３　調査区地区割図

2．調査の経緯

a．これまでの調査と地区設定

調査地周辺では継続してほ場整備事業が実施され、それに伴い広範囲に発掘調査が実施されてきた。調査面積は累計すると約45000㎡に及ぶ。

今回の調査は陶器遺跡と陶器千塚が接する地点にあたる。すなわち、陶器遺跡は集落遺跡として、陶器千塚は埋没した墳墓群がある地域として範囲設定されており、集落域と墓域が重複する、という意味である。調査地はほ場整備事業に伴うきり土部分を調査、盛り土部分を埋没保存としたため、開発地域のうち、調査地は不定形で複雑な形となり、１～８区に別れる。なかでも、１区は水路による開発部分が長く取り付く広範囲である。調査面積は合計2300㎡を測る（図２・３）。

さて、大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行１／10000地形図を基準として４段階の区分を実施している（図３・４）。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８に区画する。陶器千塚・陶器遺跡はＥ５区内にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500ｍ、横2000ｍの範囲である。陶器遺跡は10・11区内にある。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を１～20、横軸をＡ～Ｏに区分したものである。

今回調査地は１区が１Ｊに２区が20Ｊに、３区が2Ｈに５・６区が20Ｉなどにあたる。第Ⅳ区画は第Ⅳ区画を10ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をａ～ｊ、横軸を１～10に区分したものである。例えば、今回調査区の一つはＥ５－10－１Ｊ－１ａなどと表記される。

特筆すべきこととして、2003年度から座標値が国際基準に基づく新座標に変更されたことである。これまでの調査で示されている座標値は南に約730ｍ、東に約550ｍずれる。これにともなって座標値から導かれた地区割の表記も変更となっている。

b．基本層序と遺構の図化

これまでの調査では表土（水田耕作土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山上に遺構が切り込まれた形で発見されている。したがって、調査は表土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めることとした。ただし、部分的に表土下に整地土層が確認される場合があり、この部分については遺物の有無を確かめながら機械掘削した。

水田耕土は黒褐土で現在も耕作に使われているものである。水田床土は灰褐土・淡褐土などで砂利を含み、粘質は高い。水田床土としての灰褐土・淡褐土中には多くの遺物が包含される。層厚は0.5mをこえず、おしなべて0.2m程度である。

これを除去すると、地山直上に茶褐色のマンガン沈着層が薄く見られ、その下に地山がある。地山は黄褐粘土で砂利をよく含むところと、ほとんど含まないところがある。地山は締りがよく、乾燥すると非常に堅い。遺構は地山に刻まれたもののみ検出された。したがって、古い遺構の上面は地山とともに削平を受け、深い遺構のみ、明瞭に残されていると考える。

遺構の埋め土は茶褐土や暗褐土が多く、地山の色合い・質感と比較して、明快に区別できる。ただし、新旧の遺構の埋め土はほとんど色合い・質感に差がなく、人為的に埋められたもの、流水を伴う堆積のみ明瞭にできた。

また、場所によって遺物包含層は、須恵器の包含密度が非常に高い。現在の水路を含め、中世・近世の遺構埋め土にも数多くの須恵器が含まれている。したがって、須恵器の出土をもって遺構の年代を明確にすることに躊躇させられる。古墳時代の集落で選別されたり、蓄積されたり、捨てられた須恵器は地上に山積みにされていた可能性が高く、後の時代になっても埋没することなく、露呈したのではないだろうか。これらは後世の耕作などで除去されたり、土坑などに埋め捨てられたものが多いと考える。

検出された遺構は航空測量によって１／20で迅速に図化を行った。これまでの調査標定点と合わせ３級基準点を設置し、そこから調査区周縁に４級基準点を設けて地区割をすることとした。遺構・遺物が多数検出された場合は基準点から遺物とりあげ、グリッドを細かく設定した。遺構の密度が低く、遺物も遊離・散在していた３・４区の調査については今回地区を設定しなかった。

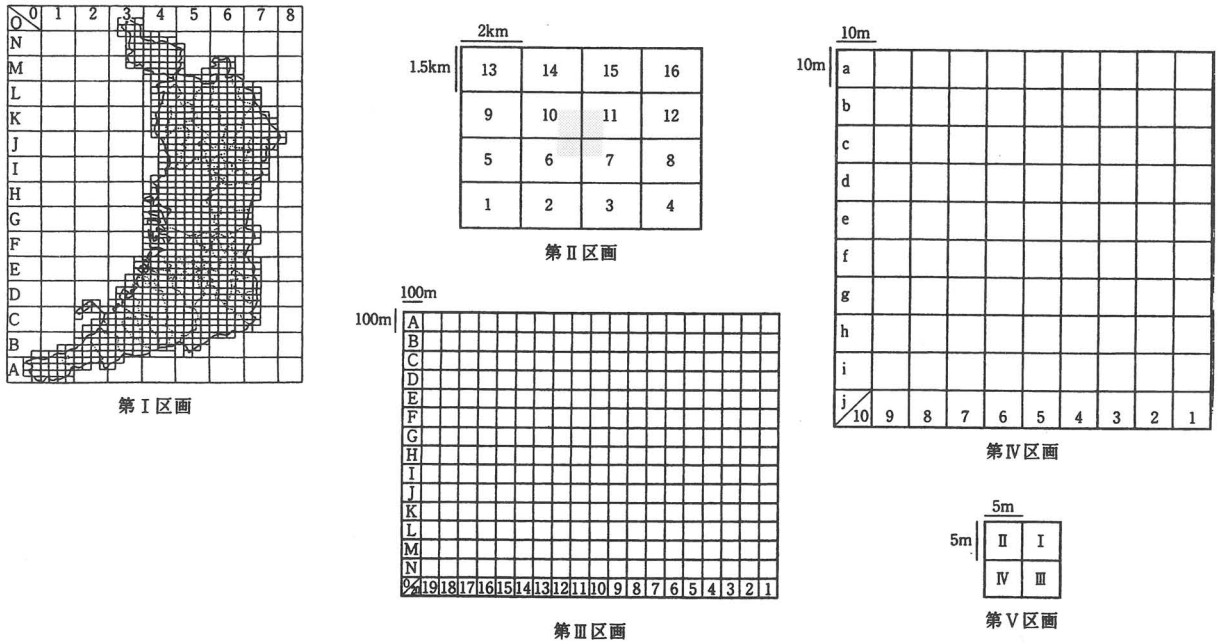


図４　地区割概念図

第Ⅱ章　発掘調査

1．現地調査

a．1区の調査（図版1）

1区は今回調査範囲の南に位置する。水路工事に先立って調査する部分を含み、東西に約170m と細長い。調査はさらに1 a区～1 d区と五区分した（図3）。1 a区と1 d区でそれぞれ六世紀後半代の掘立柱建物が確認され、他でも溝や土坑などが確認された。以下に、調査区ごとに詳細を示す。

1 a区は1区の東端に位置する東西約60ｍの調査区である（図5）。03年度の調査区と東端で接する。しかし、連続する遺構は確認されなかった。発見された遺構は掘立柱建物・溝・土坑などである。

掘立柱建物1―1は1 a区西端に位置し、建物の北側2×1間のみを検出した。主軸は地形にそってややふれる南北棟である（図8）。桁行は約2ｍ間隔、梁間は約2ｍを測る。柱穴は一辺0.4～0.5ｍ程度の隅丸方形で深さは約0.2～0.28ｍしか残されていない。掘り方は暗褐土に覆われ、灰褐粘土の柱痕跡を四つ残す。柱の抜き取りが明瞭なものはなかった。

溝1―50は調査区東端から西に約8ｍ離れた所で確認された長さ1.6m 以上、幅約0.6ｍの南北溝である。南側は調査区外へと続く（図5）。

溝1―51は溝1―50から西に約1.6ｍ離れた所で確認された長さ2.8ｍ以上、幅約0.4ｍの南北溝である。両端は調査区外へと続く（図5）。

溝1―52は溝1―51から西に約2ｍ離れた所で確認された長さ1.4ｍ以上、幅約0.4ｍの東西溝である。北側は調査区外へと続く（図5）。

溝1―65は溝1―51から西に約1.2ｍ離れた所で確認された長さ1.8ｍ以上、幅約0.4ｍの東西溝である。北側は調査区外へと続く（図5）。

溝1―50～52・1－65は溝幅が約0.4～0.6ｍとほぼ共通し暗褐粘土で覆われ、ほぼ等間隔に平行して掘削されていることから耕作に伴う素掘り溝であると考える。

溝1―53は1 a区のほぼ中央で確認された長さ2.8ｍ以上、最長幅約9.8ｍ、最短幅約4.4m、深さ約0.5ｍの不定形の溝である。溝の両岸にテラスがあり、流水堆積を示す大溝である。西側のテラスには土坑が二つ確認され、六世紀後半の須恵器が大量に発見された（図5）。

溝1―66は溝1―53の西側に確認された長さ3.0ｍ以上、幅約0.3ｍの南北溝である。溝1―54と調査区北端で接しており、溝1―54に対して平行ではなく、軸をやや西にむける（図5）。

溝1―54は溝1―66に接して確認された長さ2.8ｍ以上、幅約0.6ｍ、深さ0.1ｍの南北溝である。埋め土は炭混じりの暗褐土で中国製青磁碗が発見された。溝は南北が調査区外へと続く（図5）。

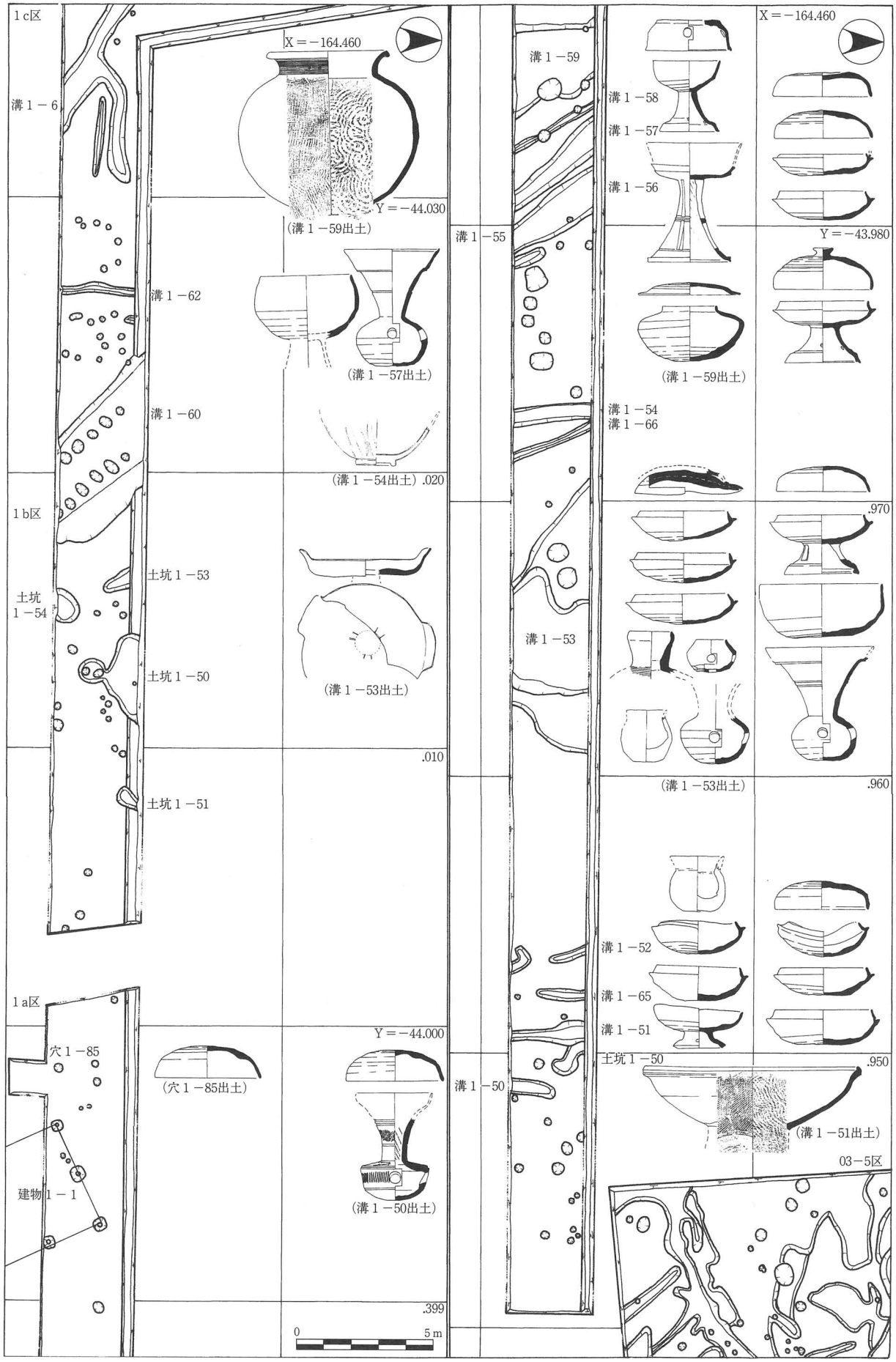

1c区
溝1－6
X＝－164.460
Y＝－44.030
（溝1－59出土）
溝1－62
（溝1－57出土）
溝1－60
（溝1－54出土）
.020
1b区
土坑1－54
土坑1－53
土坑1－50
（溝1－53出土）
.010
土坑1－51
1a区
穴1－85
（穴1－85出土）
Y＝－44.000
（溝1－50出土）
建物1－1
.399
0
5m
溝1－59
溝1－55
溝1－53
溝1－50
溝1－58
溝1－57
溝1－56
X＝－164.460
Y＝－43.980
（溝1－59出土）
溝1－54
溝1－66
.970
（溝1－53出土）
.960
溝1－52
溝1－65
溝1－51
土坑1－50
.950
（溝1－51出土）
03－5区

図5　1a・1b区遺構図

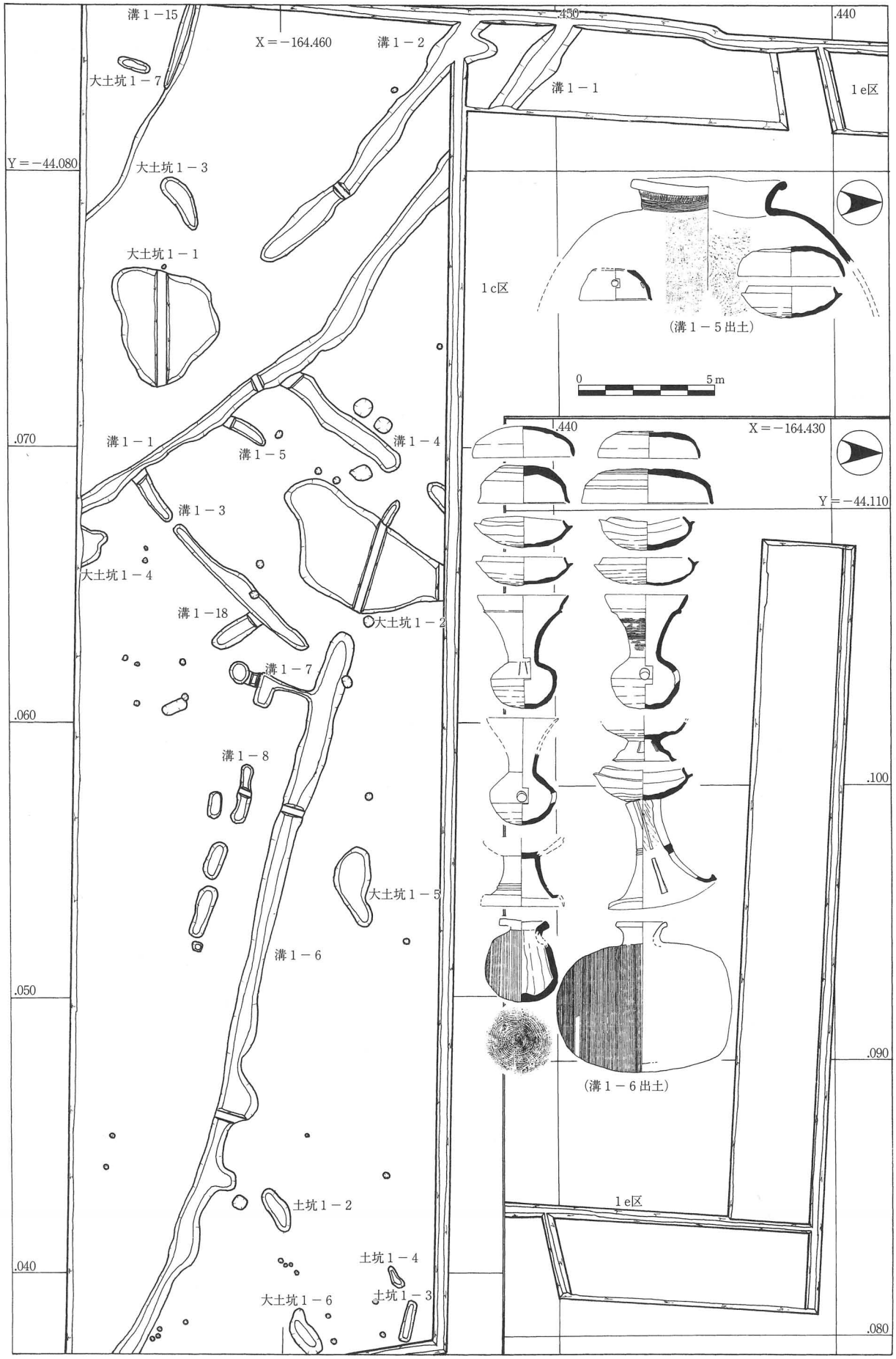

溝１－15
X＝－164.460
溝１－２
.450
.440
大土坑１－７
溝１－１
１e区
Y＝－44.080
大土坑１－３
大土坑１－１
１c区
（溝１－５出土）
0
5m
.070
溝１－１
溝１－５
溝１－４
.440
X＝－164.430
溝１－３
Y＝－44.110
大土坑１－４
溝１－18
大土坑１－２
溝１－７
.060
溝１－８
.100
大土坑１－５
溝１－６
.050
.090
（溝１－６出土）
１e区
土坑１－２
土坑１－４
.040
大土坑１－６
土坑１－３
.080

図６　１ｃ・１ｅ区遺構図

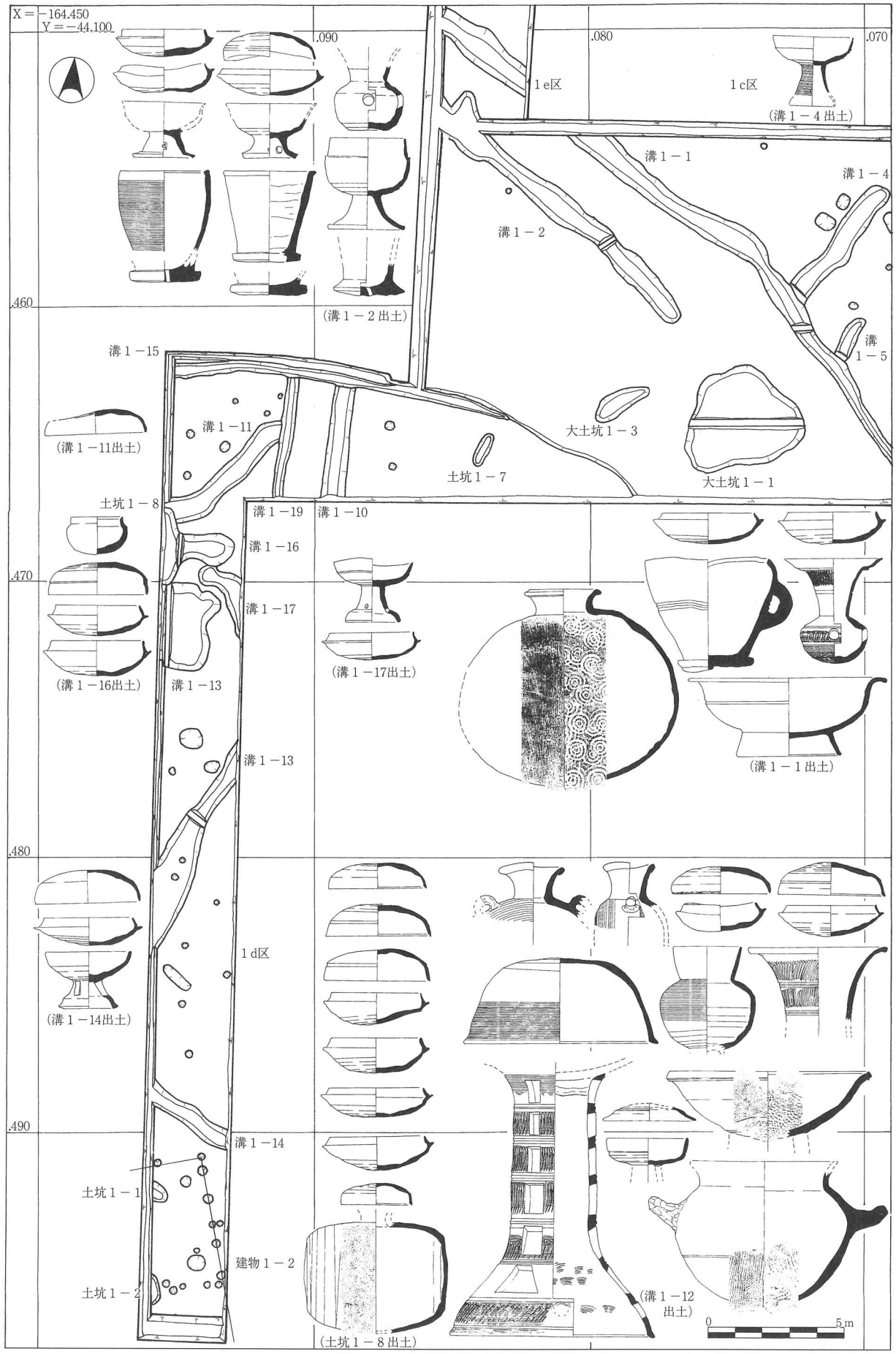

X＝－164.450
Y＝－44.100
.090
.080
.070
.460
.470
.480
.490
1e区
1c区
1d区
（溝１－４出土）
溝１－１
溝１－４
溝１－２
（溝１－２出土）
溝１－15
溝１－５
溝１－11
（溝１－11出土）
大土坑１－３
土坑１－７
大土坑１－１
土坑１－８
溝１－19
溝１－10
溝１－16
溝１－17
（溝１－17出土）
（溝１－16出土）
溝１－13
（溝１－１出土）
溝１－13
（溝１－14出土）
溝１－14
土坑１－１
建物１－２
土坑１－２
（溝１－12出土）
（土坑１－８出土）
0
5m

図７　１ｄ区遺構図

溝１―55は１ａ区西半で確認された長さ1.2ｍ以上、幅約0.5ｍの南北溝である。軸をやや西にむける。南側が調査区外へと続く（図５）。

溝１―56は溝１―55に隣接して確認された長さ3.6ｍ以上、幅約1.5ｍの南北溝である。軸をやや西にむける。両端が調査区外へと続く（図５）。

溝１―57は溝１―56に隣接して確認された長さ3.6ｍ以上、幅約0.8ｍの南北溝である。軸をやや西にむける。溝１―56に併行して確認された（図５）。

溝１―58は溝１―57に隣接して確認された長さ3.2ｍ以上、幅約0.3ｍの南北溝である。軸をやや西にむける。二つのピットに切られる（図５）。

溝１―59は溝１―58に隣接して確認された長さ3.2ｍ以上、幅約2.8ｍ、深さ約0.5ｍの南北大溝である。軸をやや西にむける。東側を土坑や小穴により削平をうける。西側は地形に沿って一段低くなり、溝の西肩は判然としない。暗褐粘土で覆われ、上面を削平した地山粘土もみられた。六世紀後半の須恵器が大量に含まれていた（図５）。

土坑１―50は溝１―51に接して確認された。長辺約１ｍ、深さ0.1ｍの不定形土坑である。六世紀後半の須恵器蓋杯・甕などが発見された（図５）。

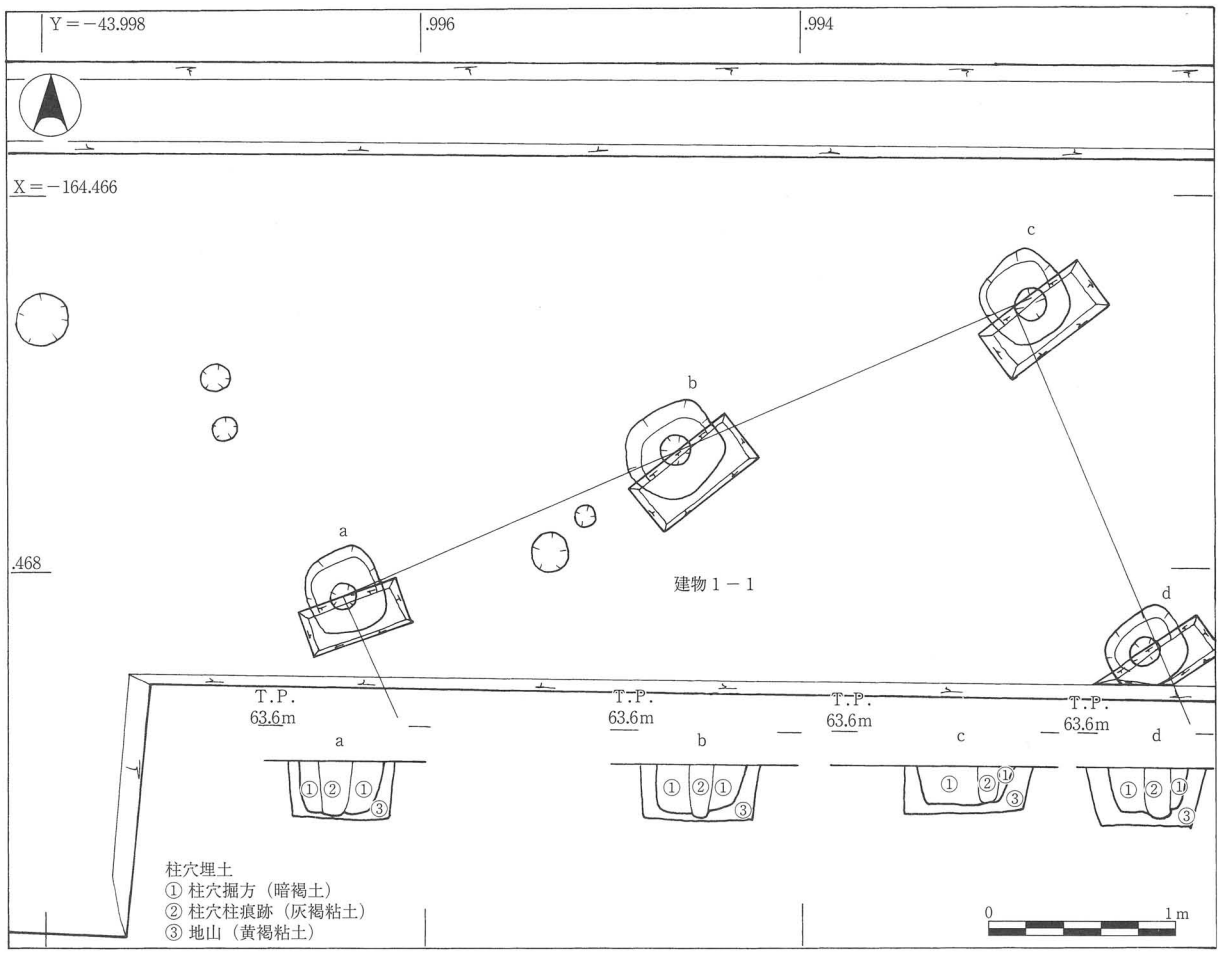


図８　建物１－１平面および断面図

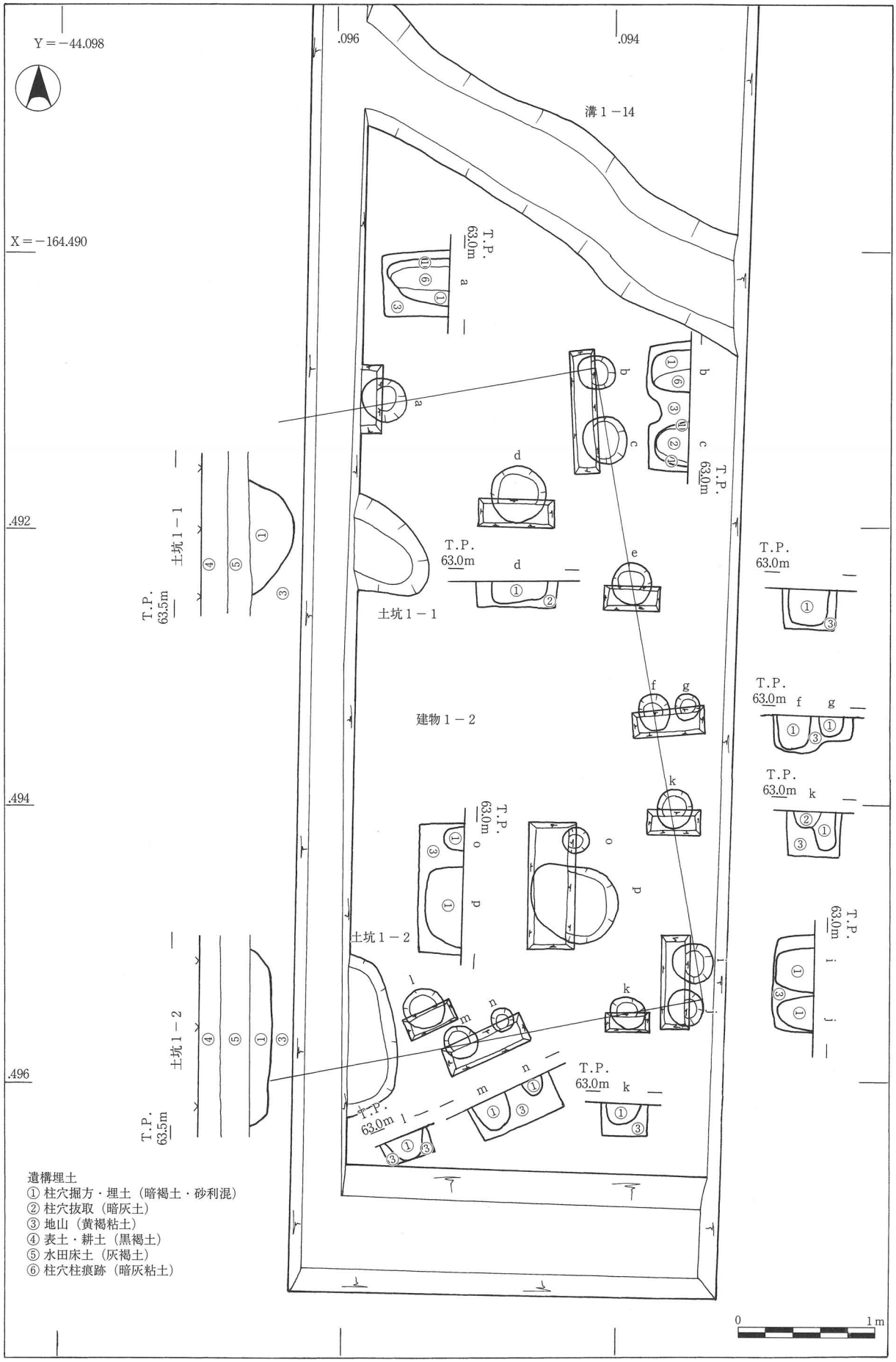


図９　建物１－２平面および断面図

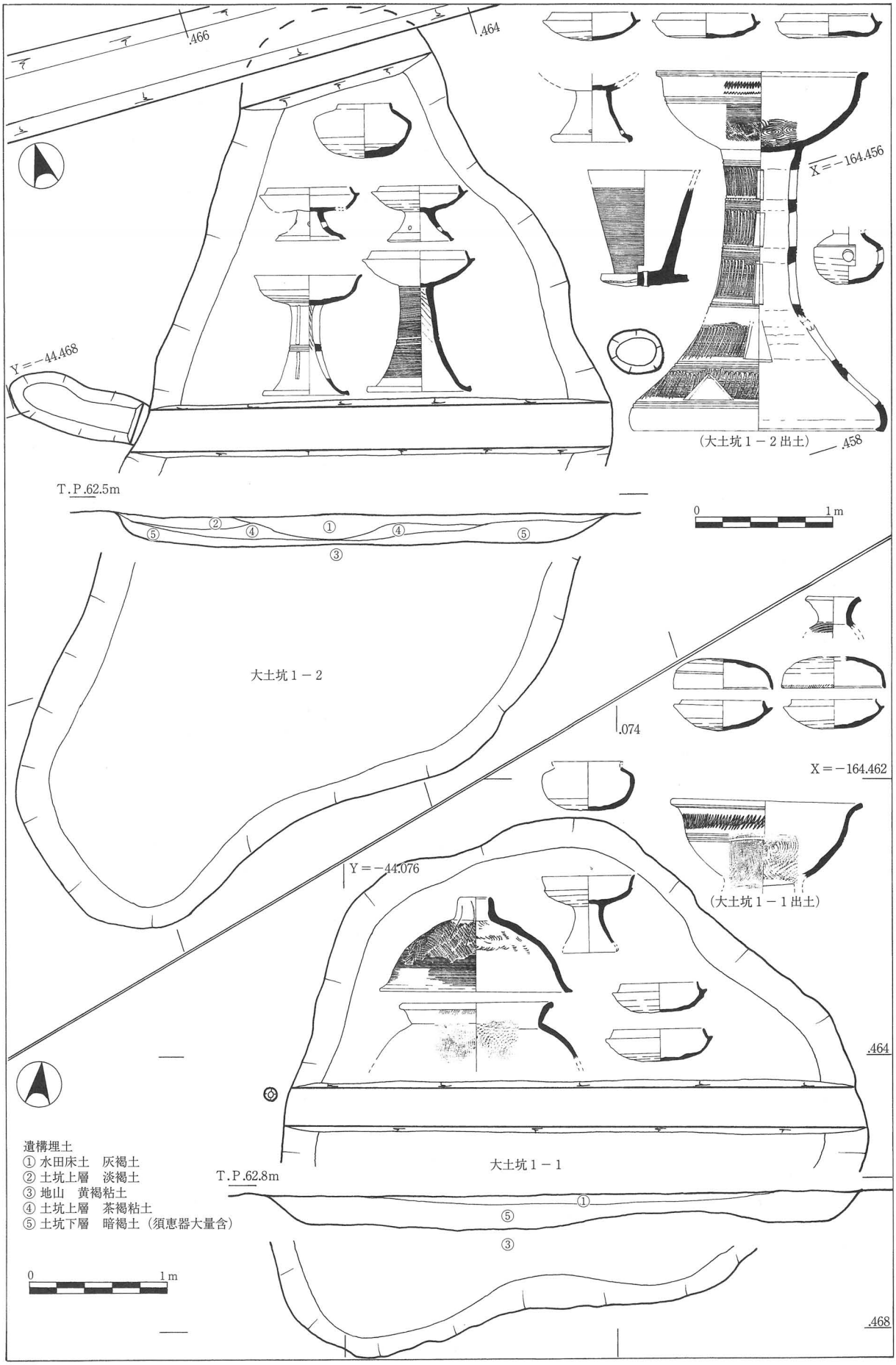


図10　１区の大土坑平面および断面図

１ｂ区は１ａ区の西に位置する。１ｃ区に続く溝１―６や土坑などを確認された（図３）。

溝１―60は１ｂ区のほぼ中央に位置し、長さ4.2ｍ以上、幅約4.2ｍ、深さ約0.5ｍを測る大溝である。両端は調査区外へと続く。軸を西にむける。溝底には溝に沿って穴が確認され、溝の側面を整える杭が打たれたと考える。溝底は暗褐強粘土で、上面まで流水堆積が見られた（図５）。

溝１―62は溝１―60の西約３ｍに位置し、長さ2.7ｍ以上、幅約0.3ｍを測る南北溝である。両端は調査区外へと続く（図５）。

土坑１―51は１ｂ区北東に位置し長軸0.7ｍ以上、短軸約0.5ｍの不定形土坑である。暗褐土で覆われ、六世紀後半の須恵器が含まれていた（図５）。

土坑１―50は土坑１―51の西に3.5ｍに位置する長軸約３ｍ、短軸約2.2ｍの不定形な土坑である。南端は別の穴と連結するものの、埋め土は共通する。六世紀後半の須恵器がいくつかみられた（図５）。

土坑１―53は１ｂ区のほぼ中央に位置する長径約1.1ｍ、短径約0.8ｍの楕円形土坑である。六世紀後半の須恵器が大量に発見された（図５）。

土坑１―54は１ｂ区のほぼ中央に位置する長径約1.2ｍ、短径約0.8ｍの楕円形土坑である。六世紀後半の須恵器がいくつかみられた（図５）。

１ｃ区は東に１ｂ区、北西に１ｅ区、南西に１ｄ区と接する東西に長い調査区である（図３）。遺構上面の水田耕土や床土から六世紀後半の須恵器が数多く出土している。しかし、この地層からは中世の瓦器や瓦質土器、近世の陶磁器なども含まれており、現在の雛檀状の開発は近世前期頃と考える。遺構は南東から北西に長い地形に沿った溝群と不定形の土坑群である。いずれも六世紀後半の須恵器を大量に含む。

大土坑１―２は１ｃ区中央に位置する南北約6.6ｍ、東西約3.6ｍ、深さ0.2ｍの不定形土坑である（図10）。掘り底は平たく、地山ブロック土を含み、いっきに埋没した様相である。

大土坑１―１は１ｃ区南西に位置する南北約3.6ｍ、東西約４ｍ、深さ0.2ｍの不定形土坑である（図10）。掘り底は平たく、下層の暗褐土からは須恵器が多く出土した。

溝１―６は１ｂ区から伸びる溝で大土坑１―２の手前で途切れる。長さ32.6ｍ以上、幅約0.7～1.0ｍを測る。地形に沿って軸をやや北にむける。断面はU字形で、流水堆積は見られない（図６）。

溝１―７・溝１―８は溝１―６の南側に沿って発見された溝で、上面を削られ、掘り底が痕跡的に連続する。もともと、二条の溝が併行してあったようだ（図６）。

溝１―８は長さ約6.6ｍ、幅約0.6ｍ、三つに分かれる。溝１―７は長さ約1.4ｍ、幅約0.3ｍである。いずれも暗褐粘土で埋まる（図６）。

溝１―１は１ｅ区に延びる長さ25ｍ以上、幅約0.3～1.2ｍの溝で、両端は調査区外へと続く。軸を北西にむける。断面はU字形で、流水堆積は見られない（図６）。

溝１―２は溝１―１と平行して延びる長さ約12.0ｍ、幅約0.9ｍの南北溝である。軸を北西にむける。断面はU字形で、流水堆積は見られない（図６）。

溝１―３～５は溝１―１に直行する溝で軸は北東方向、南端は溝１―１にとりつく（図６）。

溝１―15は１ｃ区南西隅で確認され、１ｄ区に延びる長さ約12.2ｍ、幅約0.4ｍの東西溝である。この溝の南側は一段高くなることから、土地を区画する溝と考える（図６）。

１ｄ区は１ｃ区の南西でL字に続く調査区である。掘立柱建物・溝・土坑が確認された。

掘立柱建物１―２は１ｄ区南隅で確認された３×１間の東西棟である（図９）。主軸はやや真北からふれる。桁行は約1.6ｍ、梁間は約1.8ｍを測る。柱穴は径0.2～0.4ｍ程度の円形で、深さは約0.25～0.4ｍしか残されない。掘り方は暗褐土（砂利混じり）に覆われる。暗灰粘土の柱痕跡を残すものは２つのみで、抜き取り穴が明瞭なものが一つ確認された。この建物に伴うと考える同規模の柱穴がいくつかみられ、柱は何度か補強されたらしい。

土坑１―２は建物１―２の南妻で確認された。長径約1.2ｍ、短径約0.36ｍ、深さ約0.18ｍを測り、六世紀後半の須恵器が含まれる（図７）。

土坑１―１は建物１―２内で確認された長軸約0.72ｍ、短軸約0.6ｍ、深さ約0.32ｍである。両土坑の西側は調査区外へと続く（図７）。

溝１―10は１ｄ区の北東で発見された南北溝で、両端は調査区外へと続く。長さ４ｍ以上、幅約0.9ｍ、深さ0.1ｍを測る。掘り底は船底形である（図７）。

溝１―19は溝１―10に併行する長さ4.3ｍ以上、幅約0.6ｍの南北溝である。両端は調査区外へと続く。溝１―11は北側が溝１―19に取り付き、南側が土坑１―８にとりつく長さ約5.2ｍ、幅約１ｍの斜行溝である（図７）。

溝１―12は上面の長さ約５ｍ、幅約1.8ｍで下層は土坑状の溝である。埋め土は上層が灰褐粘土、下層が暗褐強粘土で須恵器甕・杯などが発見された（図７）。

溝１―16は溝１―12と土坑１―８を切る土坑状の溝で、長さ約2.5ｍ、幅約１～2.7ｍを測る。西側は調査区外へと続く（図７）。溝１―16と土坑１―８の境界は明瞭にできなかった。

溝１―17は長さ1.8ｍ以上、幅約0.9ｍの斜行溝で、上層は溝１―16にとりつく。東側は調査区外へとのびる（図７）。

溝１―13は長さ約5.9ｍ、幅約0.7～1.4ｍの斜行溝である。上層は灰褐粘土、下層は暗褐粘土で、須恵器を小量含む（図７）。

溝１―14は掘立柱建物１―２の北側で確認された長さ２ｍ以上、幅約0.7ｍの東西溝である。軸を北西にむける。掘り底はU字形で、暗褐土で覆われる（図７）。

１ｅ区は１ｃ区西端から南北に伸び西側にL字に折れる調査区である。１ｃ区から続く溝１―１と溝１―２を確認した。しかし、二条の溝以外に遺構は検出されなかった。また、上面の遺物も閑散としており、この部分で遺構が途切れると予想できる（図６）。

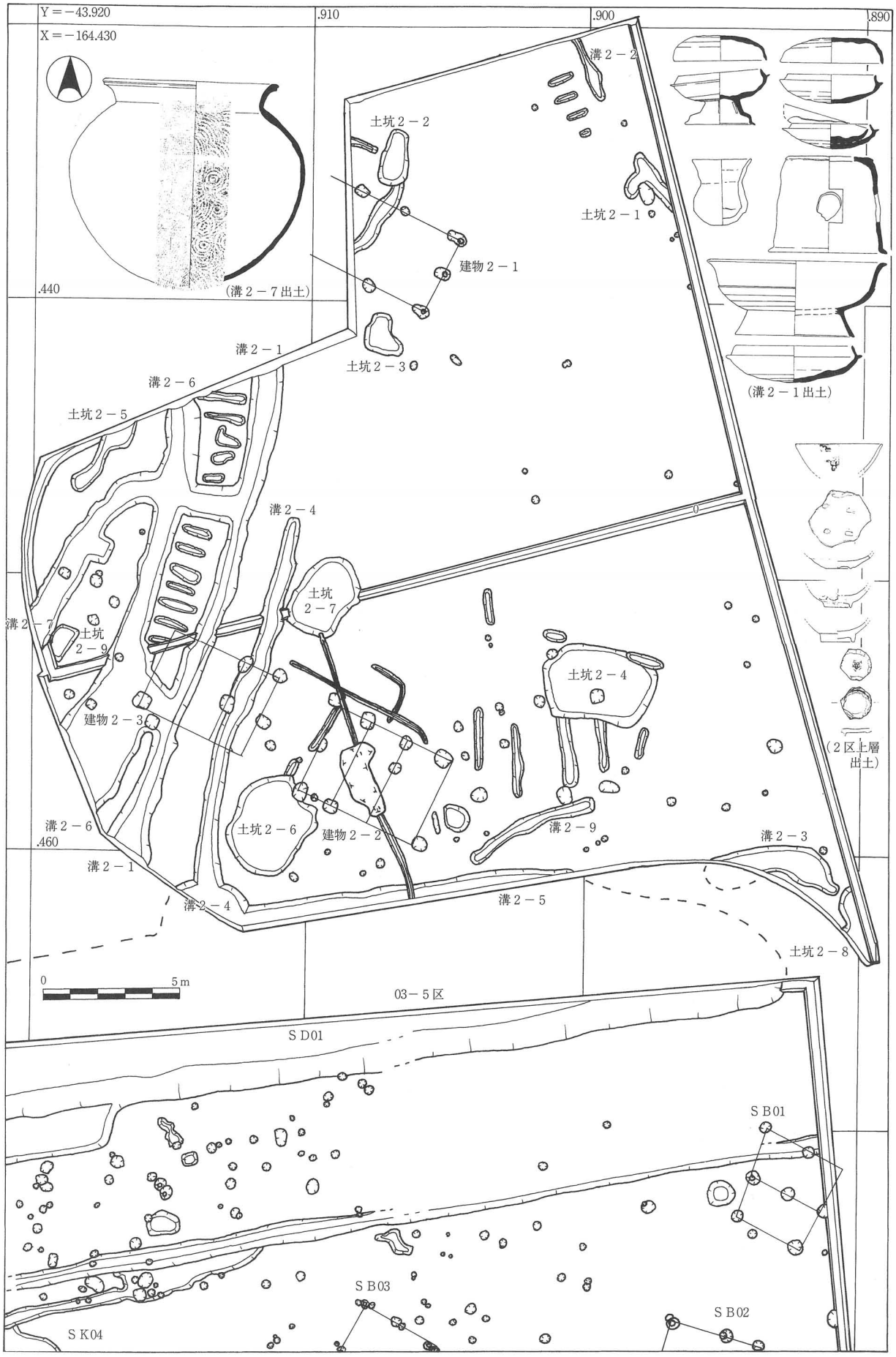

Y＝－43.920
X＝－164.430
.910
.900
.890
.440
.460
溝２－２
土坑２－２
土坑２－１
建物２－１
（溝２－７出土）
溝２－１
土坑２－３
溝２－６
土坑２－５
（溝２－１出土）
溝２－４
土坑
２－７
溝２－７
土坑
２－９
土坑２－４
建物２－３
（２区上層
出土）
溝２－６
土坑２－６
建物２－２
溝２－９
溝２－３
溝２－１
溝２－４
溝２－５
土坑２－８
0
5m
03－５区
ＳＤ01
ＳＢ01
ＳＢ03
ＳＢ02
ＳＫ04

図11　２区遺構図

b．２区の調査（図版２）

２区は今回調査範囲の南東に位置する（図３）。調査区南側は０３年度調査区の５区と隣接する。０３年度調査区では中世の屋敷地方形区画が発見された。屋敷地を画する北側区画溝ＳＤ―01北岸を今回確認することができた。その他、掘立柱建物が三棟と溝・土坑などが確認された。出土遺物は六世紀後半代の須恵器が主で、少量の中世から近世初頭の土器が含まれる。以下に遺構詳細を示す。

掘立柱建物２―１は調査区北東で確認された２×２間以上の東西棟である（図12）。軸を北西にむける。桁行は約1.4ｍ間隔、梁間は約2.2ｍを測る。柱穴は隅丸方形のものが一辺約0.4ｍ程度、円形のものが径0.3～0.4ｍである。深さは約0.2～0.6ｍである。柱穴掘方は暗褐土で、柱痕跡を明

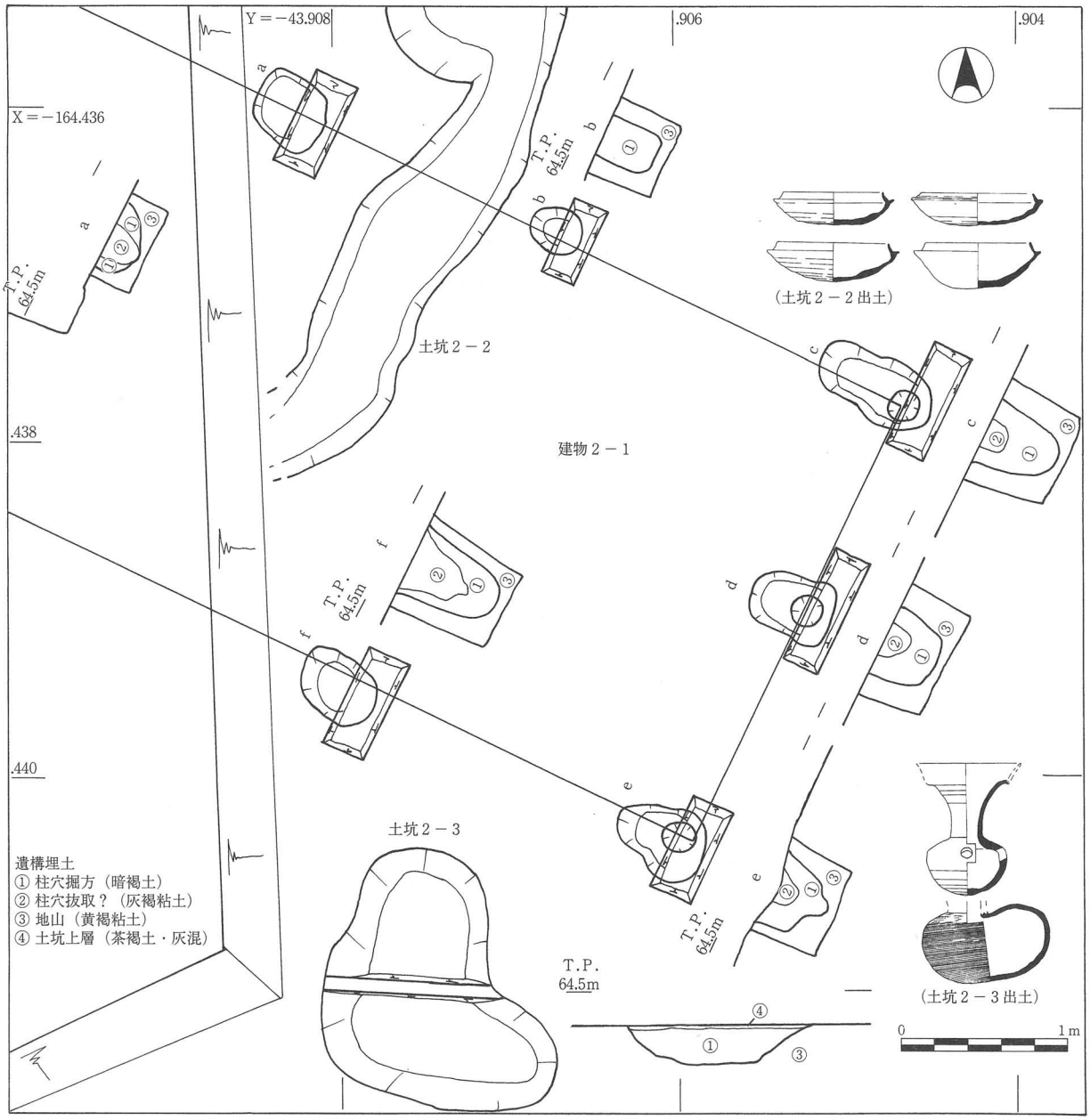


図12　建物２－１平面および断面図

瞭に残すものはない。東側柱は灰褐粘土の柱抜取りが確認された。

掘立柱建物２―２は調査区南端に位置し、溝２―５から北に約1.4ｍ離れた場所で確認された２×３間の東西棟である（図13）。主軸は地形に沿って北西にふる。桁行は約1.7ｍ間隔、梁間は約1.6ｍを測る。柱穴は一辺約0.3～0.5ｍ程度の隅丸方形で、深さが約0.16～0.4ｍである。掘り方は暗褐土で覆われており、灰褐粘土の柱抜き取り穴を残すものは八つ確認された。柱痕跡を明瞭に残すものはなかった。柱穴b・柱穴cの底面から河原石が出土した。根固め石と考える。一部の柱穴からは須恵器細片が確認できた。混入と考える。

掘立柱建物２－３は掘立柱建物２－２の北西約2.4ｍに並んで建てられた２×４間の東西棟である。軸はほぼ共通し、北西にむける。桁行・梁間共に約1.4ｍ間隔を測り、規模もほぼ共通する。溝２―１・溝２―６に柱穴の一部が切られており、全容はよくわからない。

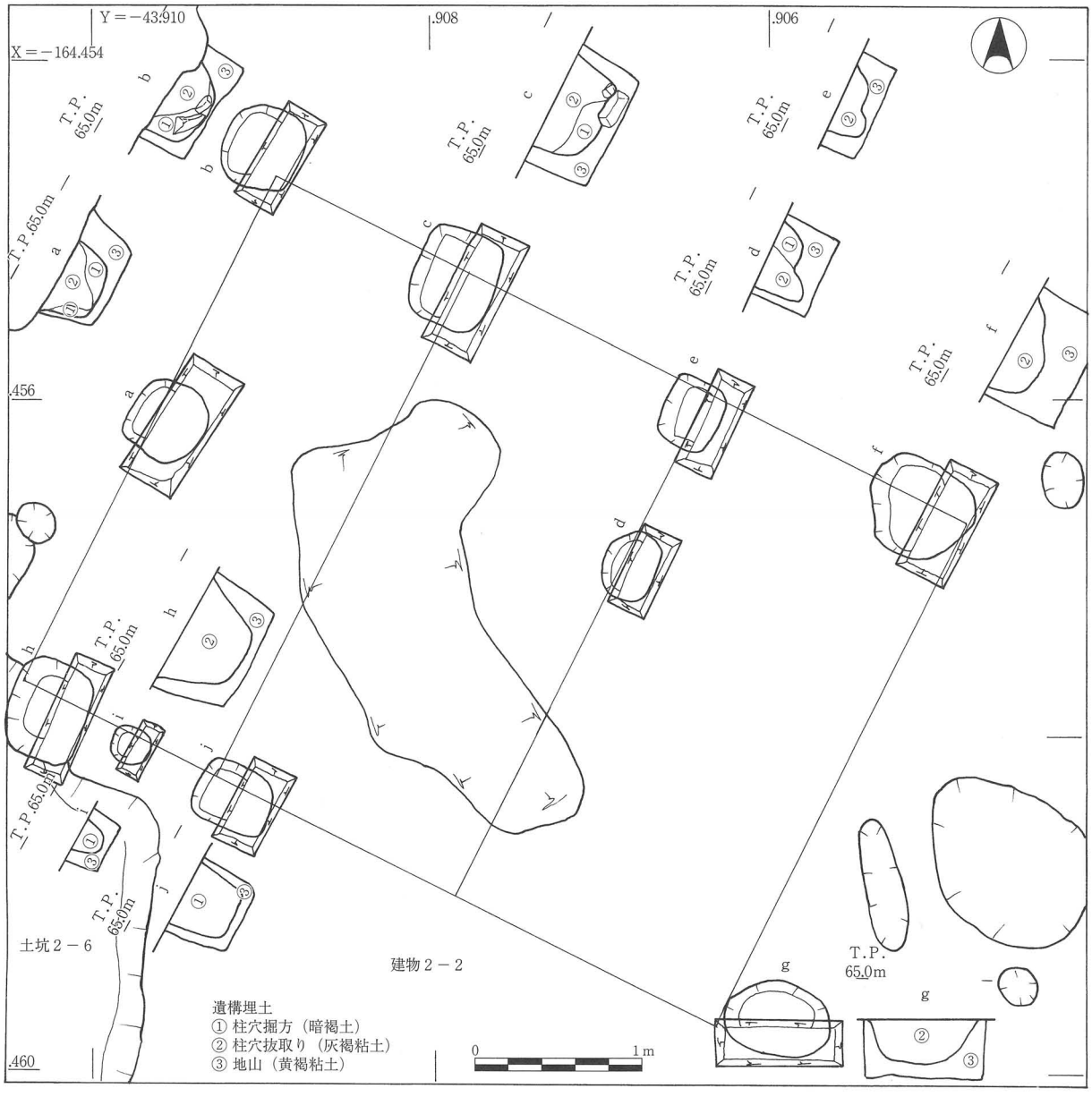


図13　建物２－２平面および断面図

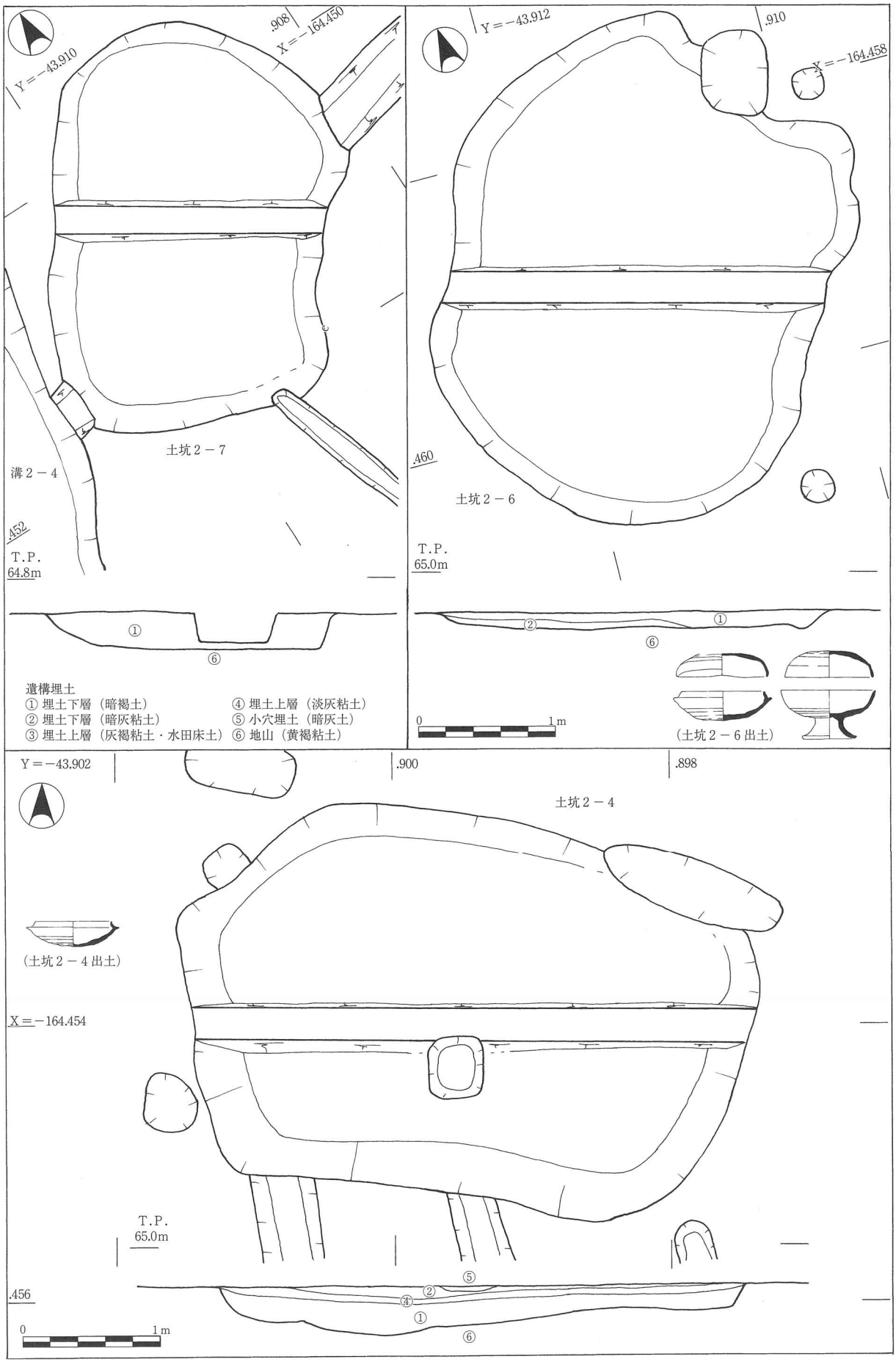


図14　２区の土坑平面および断面図

２区で発見された掘立柱建物は規模や主軸方向が共通することから同時期と考える。六世紀後半の須恵器工人集落にかかわる倉庫の一部だろう。調査区の東と北は削平が激しく、本来この部分にも遺構が広がっていた可能性がある。

は調査区西半に位置する長さ17.8ｍ以上、幅約0.8～1.2ｍの南北溝である（図11）。軸をやや西東にむける。この溝に平行して、溝２―４・２―６が確認されている。いずれも溝の両端は調査区外へと続く。溝２―６は溝２―１から北西に約2.0ｍ離れた場所で確認された長さ約14.4ｍ、最長幅約2.8ｍ、最短幅約1.0ｍの南北溝である。この溝と溝2－１とは二本の東西溝により繋がっており、また、調査区南西隅から延びる長さ7.6ｍ以上、幅約1.0ｍの南北溝である溝２―７とは溝２―６に調査区の北西隅で合流する。溝２―４は調査区南西隅、溝２―１から東に約1.8ｍ離れた場所で確認された、溝２―１に並行して延びる長さ14.2ｍ以上、幅約0.6～2.7ｍの南北溝である。

溝に挟まれた空間はさらに直行する浅い鋤溝群が並ぶ。いずれの溝も流水堆積がなく、暗褐粘土が覆う。これらの溝は耕作の畝溝と考える。溝の中からは六世紀後半の須恵器が大量に発見された。ただし、上面から少量の中世土器が見つかっていること、南側の０３年度調査区から中世の屋敷地が発見されていることから、耕作痕跡はその頃まで降る可能性もある。溝２―４は屋敷地の北を区画する溝２－５に連結しており、その同時性を示唆する。

溝２―２は調査区北東隅に位置し、長さ2.5ｍ以上、幅約0.3～0.6ｍの南北溝である（図11）。この溝は土坑２―１と接し、本来、一連の溝だったようだ。また、溝の西側には直行する鋤溝痕跡があり、耕作はこの地域にも及んでいたと考える。

溝２―３は調査区南東隅にある長さ4.7ｍ以上、幅約1.0ｍの東西溝である。不定形な土坑状で、砂礫に覆われる。近世の陶磁器をいくつか含み、水路や井戸しゅんせつ時のゴミ溜めのようだ（図11）。

溝２―５は調査区南壁に沿って確認された長さ12.0ｍ以上、最長幅約0.8ｍ、最短幅約0.2ｍの東西溝である（図11）。この溝は０３年度調査で確認された中世の溝であるSD―０１の北側の対岸である。したがって、この屋敷地の北側区画溝は溝幅が約6.4ｍの大溝であることがわかった。ただし、溝は東端で途切れることが判明し、その東側は1ｍ程ひな壇状に高くなるので、区画溝は屋敷地を囲みこむ機能はなく、むしろ排水や区画が目的だったようだ。

溝２―９は調査区南端、溝２―５の北側にある長さ約5ｍ、幅約0.4ｍの東西溝である（図11）。

土坑２―１は調査区北東隅で確認された長径0.8ｍ、短径0.5ｍの不定形土坑である。

土坑２―２は建物２―１の北東側に約0.8ｍ離れた場所で確認された長径約2.1ｍ、短径約1ｍの楕円形土坑である。二つの土坑は耕作に伴う溝の痕跡かもしれない（図11）。

土坑２―３は建物２―２の南側に約0.6m離れた場所で確認された、長軸約1.6ｍ、短軸約1ｍ、深さ約0.2ｍの不定形な土坑である。土坑上層には茶褐土で炭が混じっており、土坑下層には柱穴掘り方と同様である暗褐土で覆われている。掘り底は船底形である（図12）。

土坑２―４は調査区南東部にある長軸約4ｍ、短軸約2.1ｍ、深さ約0.4ｍ楕円形土坑で、土坑上

層は暗灰土で覆われる一辺約0.4ｍの小穴があり、土坑周辺からも小穴が四つ発見された。掘り底は皿状で、暗褐土に覆われ、六世紀後半の須恵器が多く出土した（図14）。

土坑２―５は調査区北西隅、溝２―６から約1.2ｍ離れた場所で確認された長さ2.5ｍ以上、幅約0.4～1.3ｍの不定形土坑で、六世紀後半の須恵器が大量に発見された（図11）。

土坑２―６は調査区南西隅に位置する長軸約3.8ｍ、短軸約２ｍ、深さ約0.1ｍの不定形土坑である。掘り底は浅く皿状である。上層の暗褐土中より、須恵器が大量に発見された（図14）。

土坑２―７は調査区のほぼ中央、溝２―４のすぐ東側で確認された長軸約3ｍ、短軸約1.9ｍ、深さ約0.3ｍの方形土坑である。底面は平らで暗褐土で覆われる（図14）。

以上の土坑は上層を後世にかなり削られており、本来の土坑の形はわからないが、もともと落ち込み状の地形に須恵器を投棄する目的で作られたゴミ穴と考える。その投棄が六世紀後半か、中世以降かは判然としない。

土坑２―８は調査区南東隅で確認された幅約0.8ｍの浅い溝状土坑である。この土坑には近世の陶磁器や瓦がいくつか認められ、溝２―３と共通する性格と考える（図11）。

ｃ．８区の調査（図版３）

８区は１区の西、今回調査範囲の南西に位置する。水路構築に先立つ調査でＬ字形の細長い調査区である（図15）。８区では掘立柱建物一棟と溝・土坑などが確認された。遺構は西側に偏より、東側は削平が強かった。以下に、遺構詳細を示す。

掘立柱建物８―１は調査区南端で確認された２×１間以上の総柱建物である（図16）。建物の西側は調査区外へと続く。軸をやや西に傾け、桁行は2.1ｍ間隔、梁間は1.7ｍを測る。柱穴は隅丸方形のものが一辺0.4～0.6ｍ程度、円形のものが径0.4～0.5ｍである。深さは約0.3～0.5ｍである。掘り方は暗褐土である。灰白粘土の柱痕跡を残す柱穴が一つ確認された。灰褐粘土の柱抜き取りは五つが確認された。壁際の柱穴ｂから須恵器高杯が据えられて発見された。東両隅柱の外側に補助の柱穴と思われる小穴を確認した。隅柱の外側、約0.5ｍに確認された。

溝８―１は８区北隅で確認された長さ1.5ｍ以上、幅約0.3ｍの東西溝である。西側は調査区外へと続く。軸をやや北にむける（図15）。

溝８―２は溝８―１から南に約5.5ｍ離れて確認された長さ8.0ｍ以上、幅約0.7ｍの斜行溝である。軸を北西にむける。溝の中央付近で土坑を切る（図15）。

溝８―３は溝８―２から南に約0.5ｍ離れ、溝８―２に直行するように確認された長さ３ｍ以上、幅約９ｍ、深さ約１ｍで南北に一段のテラスを設ける斜行溝である。主軸をやや北側にむける。南北のテラス上の幅は北側が約1.5ｍ、南側は約5ｍと南側が広い。南側のテラスには小穴が一つと土坑８―１が確認されている。下層の溝は長さ３ｍ以上、幅約2.3ｍで、六世紀後半の須恵器と流水堆積が認められた（図15）。

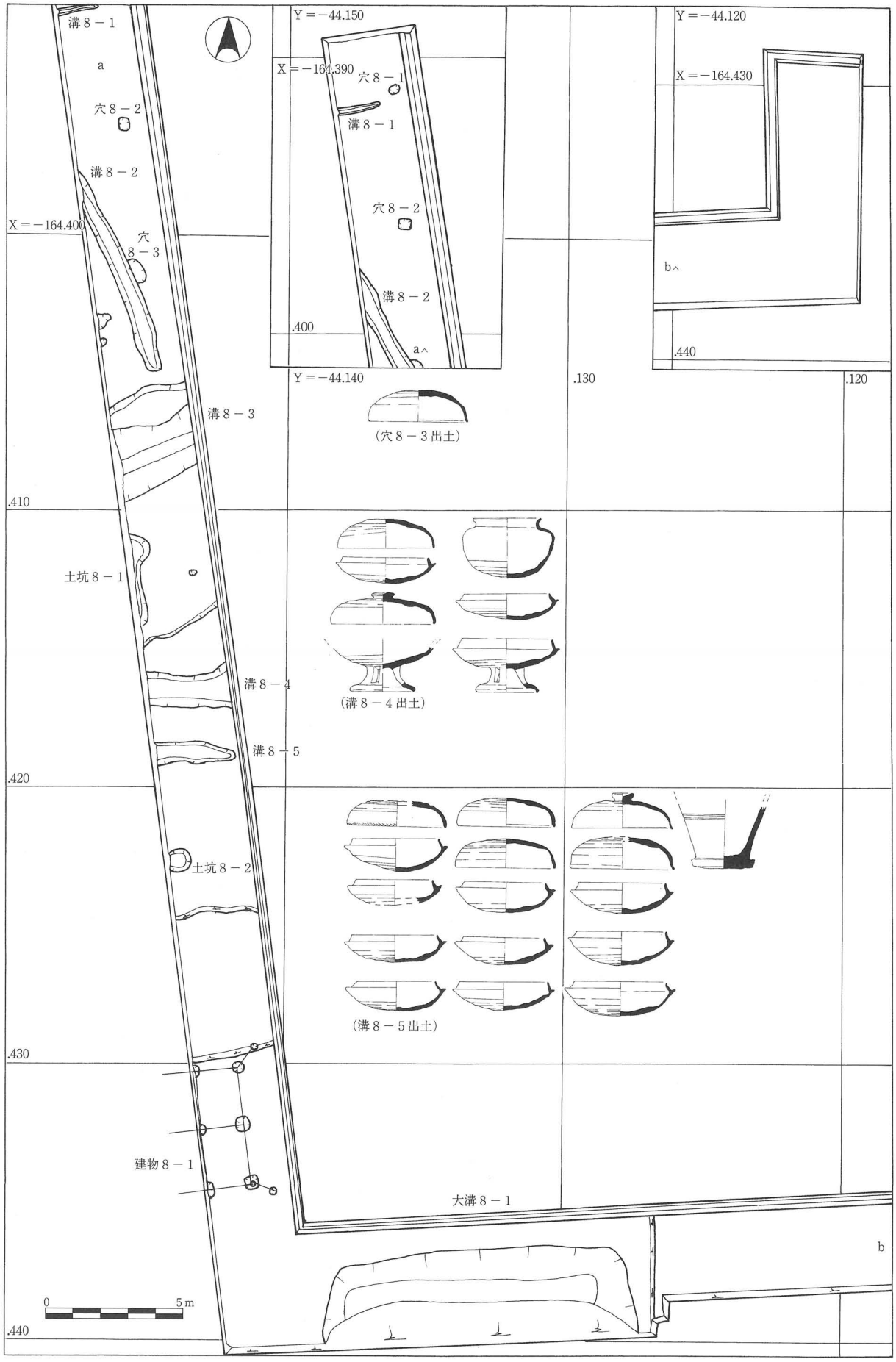

溝８－１
a
穴８－２
溝８－２
穴
８－３
X＝－164.400
溝８－３
.410
土坑８－１
溝８－４
溝８－５
.420
土坑８－２
.430
建物８－１
.440
0
5m
Y＝－44.150
X＝－164.390
穴８－１
溝８－１
穴８－２
溝８－２
.400
aへ
Y＝－44.140
（穴８－３出土）
（溝８－４出土）
（溝８－５出土）
大溝８－１
Y＝－44.120
X＝－164.430
bへ
.440
.130
.120
b

図15　８区遺構図

溝８－４は溝８－３の南に約２ｍ離れた位置で溝８－３に併行する形で確認された長さ３ｍ以上、幅約1.3ｍの東西溝である（図15）。

溝８－５は溝８－４の南約１ｍ離れて確認された長さ2.8ｍ以上、幅約0.9mの東西溝である（図15）。

土坑８－１は溝８－３の南側テラスで確認された長軸約3.3ｍ、最長幅約0.6ｍ、最短幅約0.3ｍの不定形土坑である。西側は調査区外へと続く（図15）。

土坑８－２は掘立柱建物８－１の北側、約６ｍ離れて確認された直径が約0.9ｍの円形土坑である。西側は調査区外へと続く（図15）。

大溝８－１は８区南端で確認された長さ6.4ｍ、幅3.6ｍ以上、深さ約1.2ｍ以上の溝状遺構である（図15）。大溝の底は暗灰粘土で覆われており、水が滞水していたことがわかる。溝の下層からは幕末～大正時代頃の陶磁器が発見され、上層からはレンガ・木屑・ガラス瓶など、戦前までのゴミが堆積していた。この溝の南側は宅地となっており、溝について尋ねたところ、戦前までの

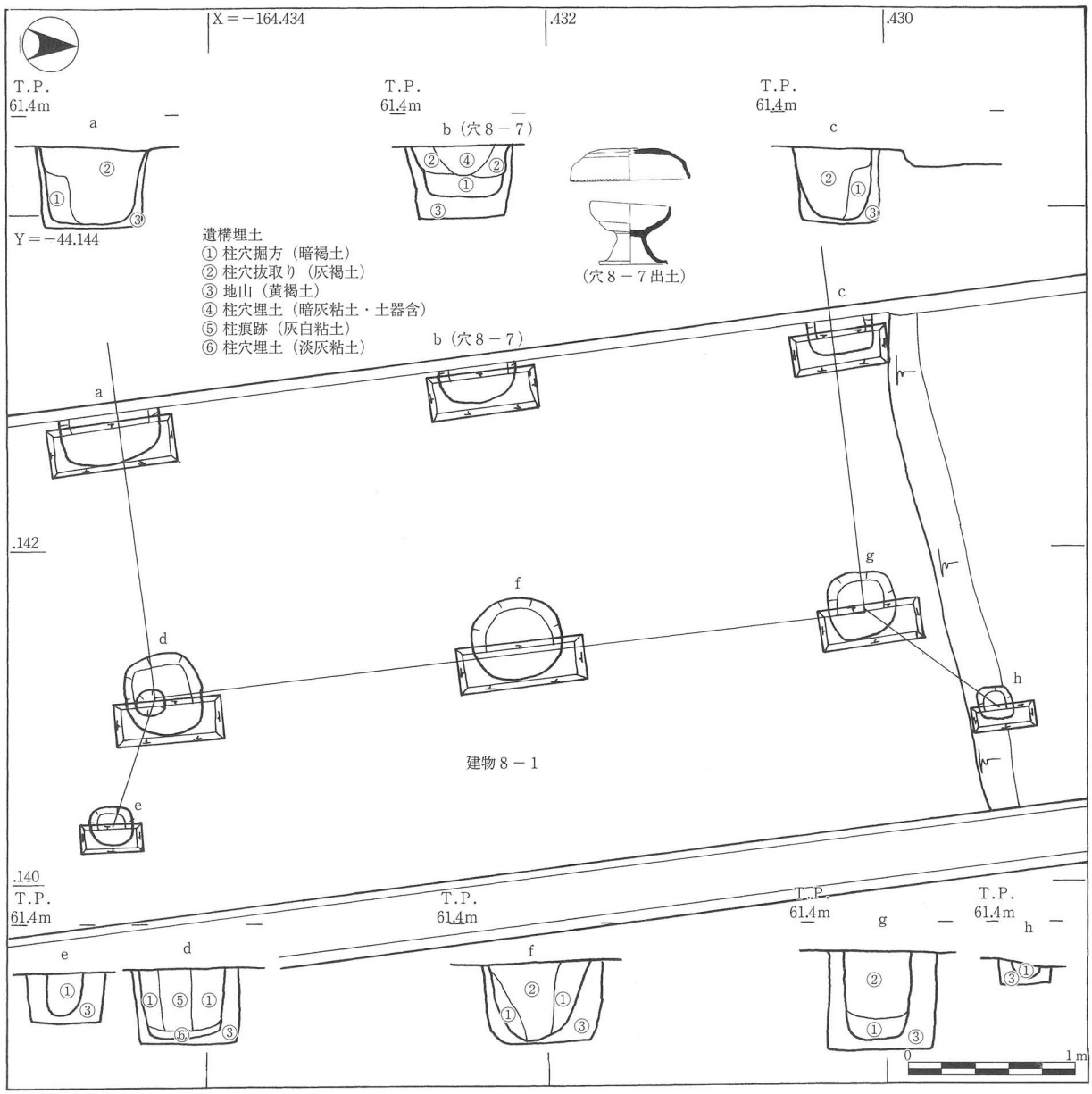


図16　建物８－１平面および断面図

屋敷に伴う壁土を採掘したあとと聞いた。確証は得られないが、この地域の屋敷地の四周には一段低くなった空閑地があり、その内側に土塀がある。空閑地は土塀の土を取ったあとで、屋敷の排水の機能もあるという。

大溝８―１は屋敷の立て替えに際し、廃材などが捨てられたようだ。そして、現在は土塀がなくなり、ブロック塀へ替わったため、掘削もなくなり、ゴミの回収が制度化したため、ゴミ穴の必要もなくなったという。

この事例が近世末から近代のみに対応する現象か、これまで発見されている中世の屋敷地の区画溝にも当てはまるのか判然としないが、屋敷地の区画溝の機能を考える上で重要な示唆を与えてくれる。

溝８－３・８―４・８―５は南から北に緩やかにくだる地形に併行して東西に刻まれており、流水堆積が認められることから、１ｃ区の溝に連続する水路の性格がうかがえる。溝の中には六世紀後半の須恵器が廃棄されていたが、これらの廃棄は同時期のものかわからない。１・２区同様、古墳時代集落廃絶後の耕地化に伴って捨てられたものかもしれない。

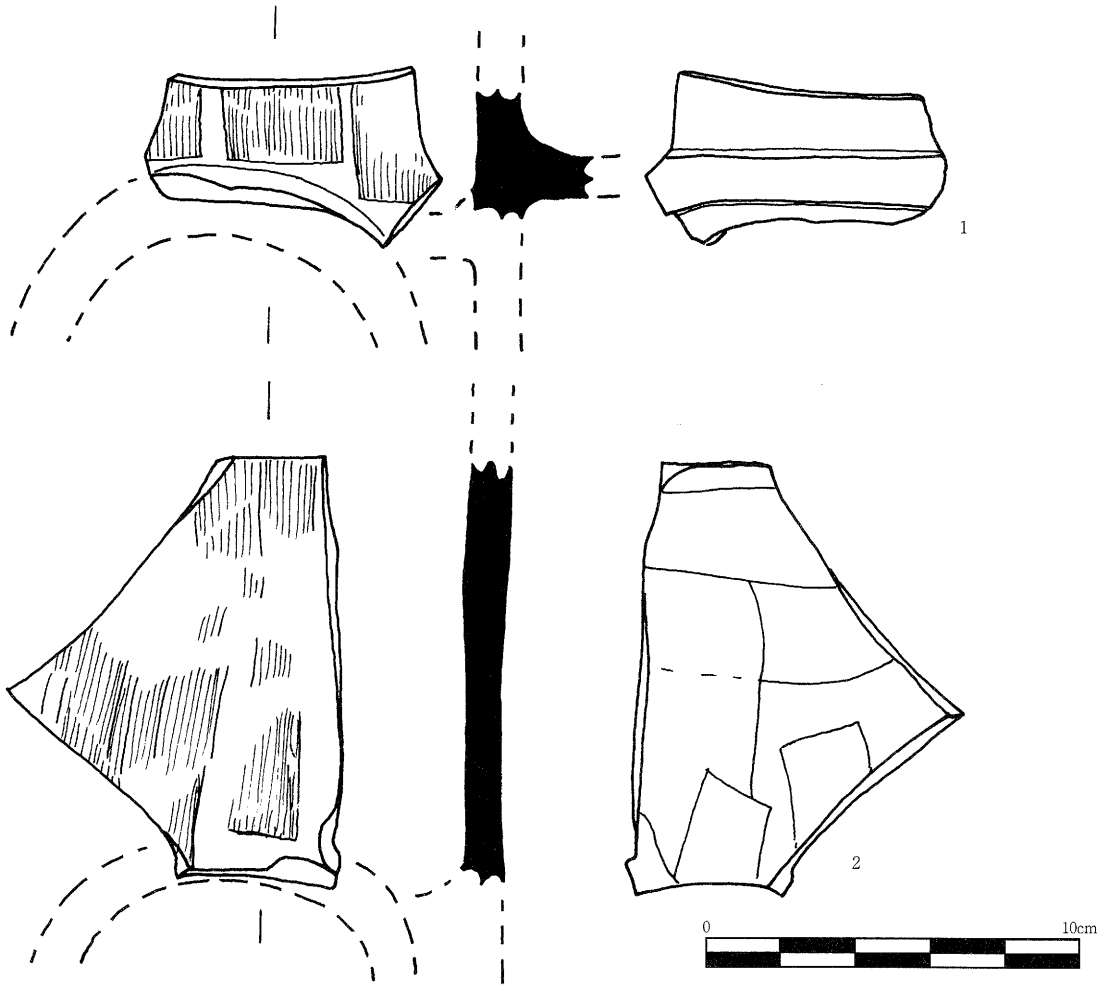


図17　１区出土陶棺

d．３・４区の調査（図版２）

３・４区は今回調査区の北西に位置する（図３）。３区は南北に細長く約38m、幅約4mのトレンチである（図18）。溝二条、土坑・小穴をそれぞれ一つずつ確認した。４区は３区の南東、約50ｍに設定された細長い調査区である（図18）。４区からは溝一条、土坑四などを確認した。以下に、遺構詳細を示す。

溝３―１は調査区北部で確認された長さ７ｍ以上、幅1.5ｍ以上の南北溝である（図18）。軸をやや東にむける。溝の西側は調査区外へと続く。溝の上面には砂利混じりの整地層があり、そこから江戸時代後期の磁器碗や灯明台などが発見された。この溝の西、調査区外には嘉永年間に建てられた地蔵がある。ただし、道路拡張により現在の場所へ動かされたようで、今回発見された整地層は地蔵堂に伴うものかもしれない。

また、この付近に土檀状の高まりが航空写真などで確認されており、陶器千塚の一つと考えられていた。今回発見された溝について、当初は古墳周溝の可能性を考えたが、古墳時代の遺物がまったく見つからなかったこと、調査区の西側部分を堺市教育委員会が道路の下水管埋設に伴って試掘調査したところ、墳丘状の高まりは認められず、水田耕土と床土が見つかったことから、溝の西側に古墳がある可能性はないと結論付けた。

溝３―２は溝３―１に沿って南側に発見された長さ10ｍ以上、幅約1.2ｍの南北溝である（図18）。軸を北東にむける。溝３―１と溝３―２のそれぞれの主軸方向から考えると、溝３―１と溝３―２は調査区外の南西で合流するようだ。

土坑３―１は溝３―１と溝３―２の間で確認された長径約2.5ｍ、短径約1.8ｍの楕円形の土坑である。溝３―１上面の整地層と共通する砂利層が確認された。整地に伴うものか（図18）。

穴３―１は溝３―１の溝底から確認され、直径0.3ｍ、深さ0.1mを測る（図18）。

溝４―１は４区南半で確認された長さ３ｍ以上、幅約0.7ｍの東西溝である（図18）。

土坑４―１は調査区の北東隅で確認された長軸0.6ｍ以上、短軸約0.5ｍの不定形土坑である。土坑の東側は調査区外に続く（図18）。

土坑４―２は土坑４―１から南西に約4.5ｍ離れて確認された長軸0.8ｍ以上、短軸0.68ｍの不定形土坑である。土坑埋土は暗褐土で覆われており、底は船底形である（図18）。

土坑４―３は土坑４―２から東に約１ｍ離れて確認された長径約0.6ｍ、短径約0.5ｍの楕円形土坑である（図18）。土坑埋土は暗褐土で覆われており、底は皿状である。

土坑４―４は土坑４―３から南に約５ｍ離れて確認された一辺約0.5～0.6ｍの方形土坑である。土坑埋土は上層が黒灰粘土の炭混じりで下層は暗褐土、掘底は皿状である（図18）。

４区からは遺物がほとんどみつからず、遺構の時期や性格はわからない。４区西側の試掘調査では江戸時代初頭の遺物を大量に含む土坑などが発見され、屋敷の発見が予想されていた。

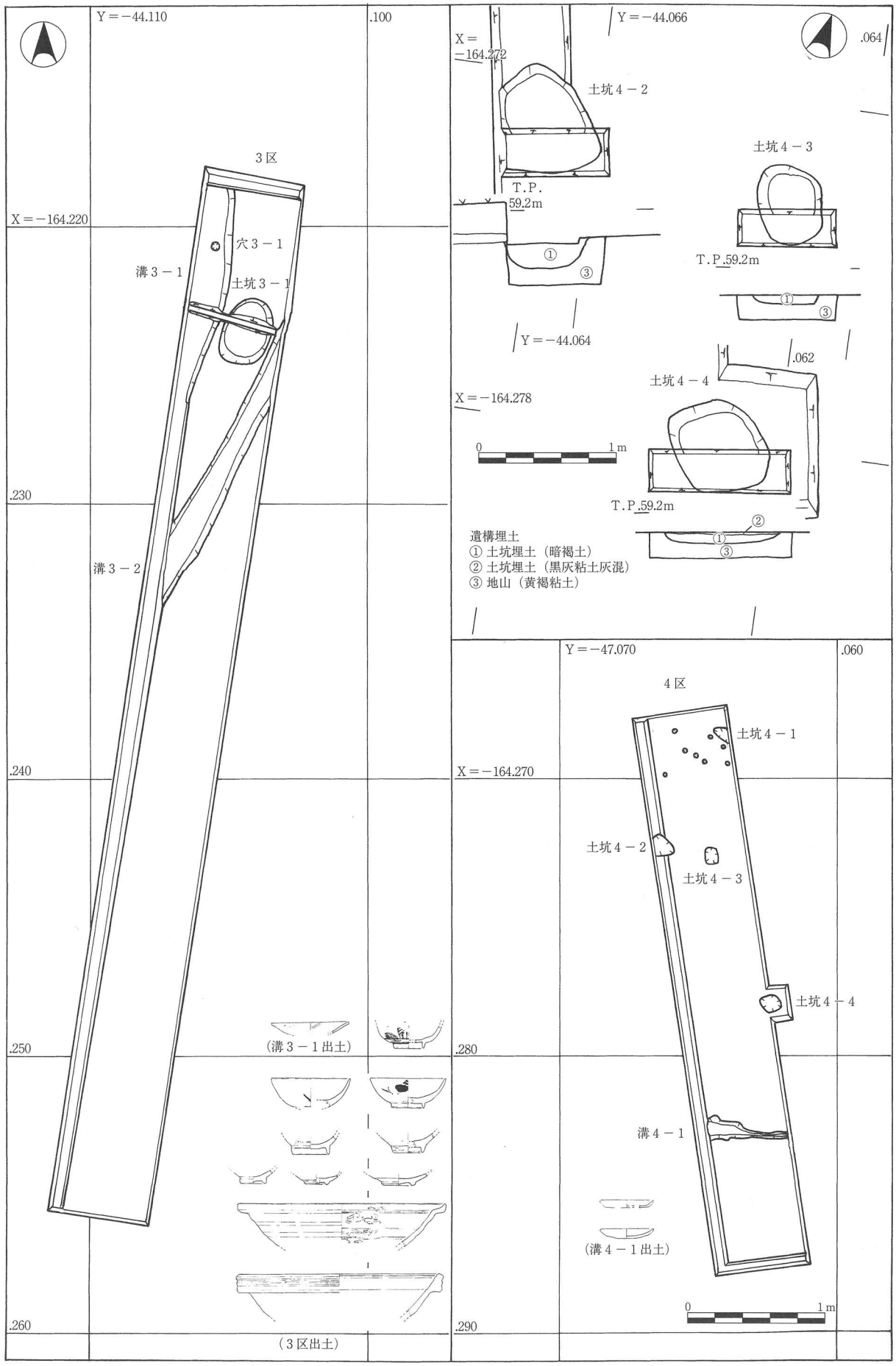

Y＝－44.110
.100
X＝－164.220
3区
穴3－1
溝3－1
土坑3－1
溝3－2
.230
.240
.250
.260
（溝3－1出土）
（3区出土）
X＝
－164.272
Y＝－44.066
.064
土坑4－2
土坑4－3
T.P.
59.2m
①
③
T.P.59.2m
Y＝－44.064
.062
土坑4－4
X＝－164.278
0
1m
T.P.59.2m
②
遺構埋土
① 土坑埋土（暗褐土）
② 土坑埋土（黒灰粘土灰混）
③ 地山（黄褐粘土）
Y＝－47.070
.060
4区
X＝－164.270
土坑4－1
土坑4－2
土坑4－3
土坑4－4
溝4－1
（溝4－1出土）
.280
.290
0
1m

図18　3・4区遺構図

e．５・６区の調査（図版２）

５区は今回調査区の北東に位置する南北58ｍの細長い調査区である（図３）。さらに５区から東に約20ｍの所に６区が位置する。５区からは溝が三条、土坑が三つ確認された（図19）。６区からは中世から近世初頭の土器・瓦を含む区画溝とその内側から柱穴群が確認された（図19）。以下に、遺構詳細を示す。

溝５―１は調査区北半に位置する長さ５ｍ以上、幅約１ｍの東西溝である。軸をやや南にむけ、両端は調査区外へと続く（図19）。

溝５―２は調査区のほぼ中央付近で確認された長さ2.2ｍ以上、幅約0.4ｍの南北溝である。軸をやや東にむける（図19）。

溝５―４は調査区南半で確認された長さ4.4ｍ以上、幅約0.8ｍの東西溝である。軸を南東にむけ、西側は現水路に取り付き、東端は調査区外へとのびる（図19）。埋め土は砂利混じりの暗褐土で須恵器の砕片が大量に含まれていた。中・近世の暗きょと考える。

土坑５―２は調査区北端で確認された直径２ｍ程度の土坑である。暗褐土で覆われ、掘り底はすり鉢状で、調査区外へおよぶため全容は確認できなかった。江戸時代後期の磁器が発見されており、近世の素掘り井戸と考える（図19）。

土坑５―３は調査区南半に位置し、溝５―４から西に1.6ｍで確認された長軸3.6ｍ以上、短軸1.2ｍ以上、深さ約0.2ｍの方形土坑である。暗褐土で覆われ、西と南側は調査区外へと続き、形状や性格は不明である（図19）。

土坑５―４は調査区北半に位置し、溝５―１から北に1.6ｍ離れた所で確認された直径約1.2ｍの土坑である。暗褐土で覆われ、出土遺物はない（図19）。

溝６―１は６区の南で発見された幅広で浅いＬ字形の大溝である（図20）。その東南は一段高くなり、柱穴群がある。したがって、この溝は屋敷地の区画溝で、調査区が屋敷地の北西隅を検出したととらえる。溝は地形的に低くなる北西部が開き、溝６－４に連結して排水の機能をもつ。溝６－１の南北部分は東西の幅は約5m、最も幅が狭い部分で約２ｍである。

溝６―２は溝６―１の南、溝６―１に沿って確認されたＬ字状の溝である（図20）。削平によって東西溝の一部は確認されなかったが、本来東端で確認された東西溝に接続すると考える。欠損部分を復元して測れば、東西約５ｍ、南北約3.4ｍ、溝の幅は約0.2ｍ～0.4ｍ、深さ0.1ｍである。建物に伴う雨落ち溝の可能性がある。

溝６―３は溝６－１の下層で確認されたコ字形の溝である（図20）。調査区南端から北にくだり、コ字形に折れ曲がり、溝６―６に接続する。南北長9.6ｍ以上、折れ曲がって南北に約3.4ｍ、東西に約2.1ｍを測る。最長幅約３ｍ、最短幅約0.4ｍで、暗褐粘土に覆われていた。溝６－１のたまり水を排水する性格と考える。

溝６―４は溝６－１の外側を取り巻くＬ字形の溝で、東西長6.8ｍ以上、南北長約13.6ｍ以上、

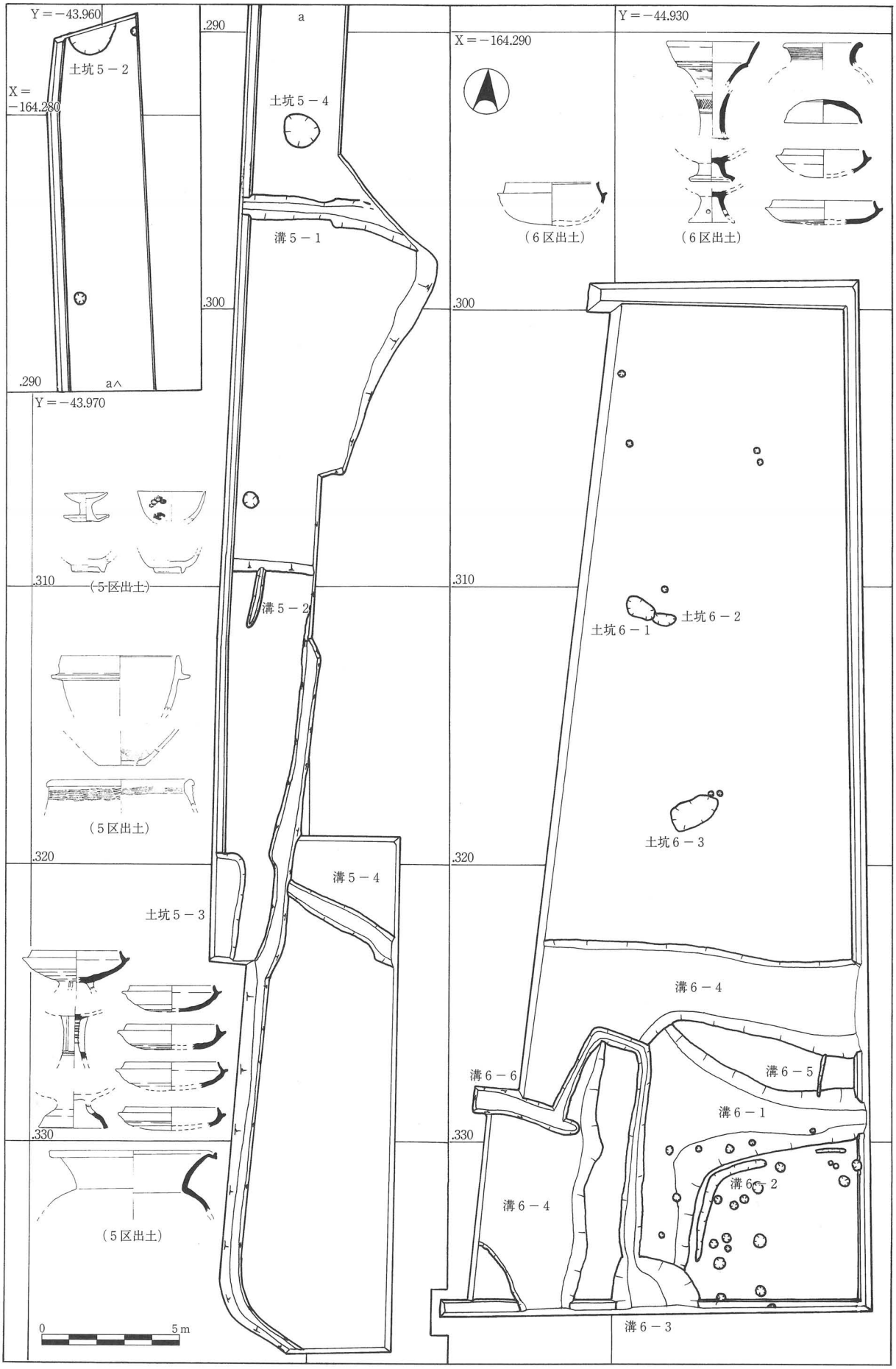

Y＝－43.960
X＝
－164.280
土坑５－２
.290
a
土坑５－４
溝５－１
.300
.290
aへ
Y＝－43.970
.310
（５区出土）
溝５－２
（５区出土）
.320
溝５－４
土坑５－３
（５区出土）
.330
0
5m
X＝－164.290
Y＝－44.930
（６区出土）
（６区出土）
.300
.310
土坑６－１
土坑６－２
土坑６－３
.320
溝６－４
溝６－６
溝６－５
溝６－１
.330
溝６－２
溝６－４
溝６－３

図19　５・６区遺構図

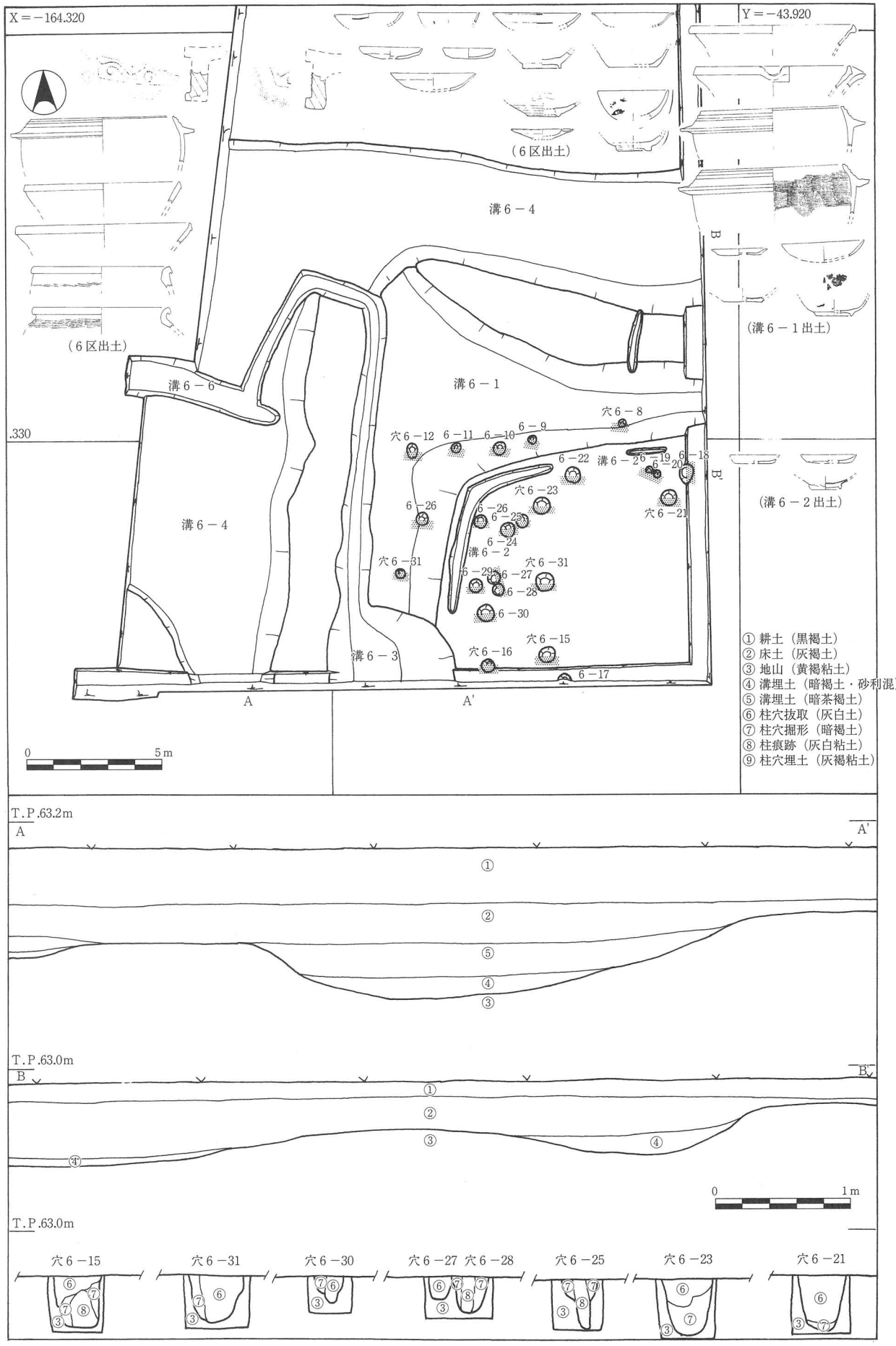


図20　6区方形区画平面および断面図

東西幅約2.8ｍ、南北幅４ｍを測る（図20）。

溝６―５は溝６―１と溝６―４の間に位置する長さ約1.6ｍ、幅約0.2ｍの南北溝である（図20）。

溝６―６は調査区の南西に位置する長さ3.8ｍ以上、幅約0.8ｍの東西溝で、西側は調査区外へと続く（図20）。溝６－４のたまり水を西に排水すると考える。

溝に区画された土段内と溝６－１の肩には多数の柱穴が見られる。しかし、建物のまとまりはとらえられなかった。柱穴は灰白粘土の柱痕跡や灰褐土の柱抜き取り痕など、柱穴であることが判断できるものがいくつかあるものの、暗褐土で覆われる浅いものもある。溝の肩から発見されたものも等間隔に一列になく、杭列とは考えにくい。

穴６―15は調査区南端で確認された径0.36ｍ、深さ0.4ｍの柱穴で、灰白粘土の柱痕跡を残す（図20）。

穴６―31は穴６―15から北に約1.4m離れた所で確認された径0.44ｍ、深さ0.36ｍの柱穴である。灰白土の柱抜取り痕跡を明瞭に残す（図20）。

穴６―21は調査区南東隅で確認された径0.36ｍ、深さ0.4ｍの柱穴である。灰白土の抜取り痕跡を明瞭に残す（図20）。

穴６―23は穴６―15から北に約3.4ｍ離れた所で確認された径0.36ｍ、深さ0.4ｍの柱穴である。灰白土の柱抜取り痕跡を明瞭に残す（図20）。

穴６―25は穴６―23から南西に0.4ｍ離れた所で確認された径0.3ｍ、深さ0.36ｍの柱穴である。灰白粘土の柱痕跡を残す（図20）。

穴６―27は穴６―31から西に約0.8m離れた所で確認された径0.16ｍ、深さ0.2ｍの柱穴である。灰白土の柱抜取り痕跡を残す（図20）。

穴６―28は穴６―31の南東側に接して確認された直径0.3ｍ、深さ0.3ｍの柱穴である。灰白粘土の柱痕跡を残す（図20）。

穴６―30は穴６―28から南に約0.4m離れた所で確認された径0.24ｍ、深さ0.2ｍの柱穴である。暗褐土の掘り方痕跡を残す（図20）。

土坑６―１は調査区中央に位置し、土坑６―２と接する長径約1.2ｍ、短径約0.6ｍ、深さ0.1ｍの楕円形の土坑である（図19）。灰白粘土で覆われ、遺物は発見されていない。

土坑６―２は長径約0.8ｍ、短径約0.3ｍ、深さ0.2ｍの楕円形土坑である（図19）。灰白粘土で覆われ、遺物の発見はない。

土坑６―３は調査区中央で確認された長径約1.8ｍ、短径約1ｍ、深さ0.1ｍの楕円形の土坑である（図19）。灰白粘土で覆われ、遺物の発見はない。以上の土坑は埋め土が共通するが性格は不明である。

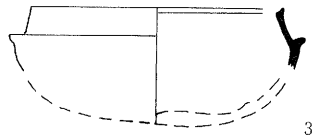


図21　６区出土古墳時代中期須恵器杯身（１／４）

f．７区の調査（図版３）

７区は３区の東、５・６区の北に位置する（図３）。調査区の大部分は後世に削平を受けているため、遺構は少ない。調査区の北側と西側は一段低くなっており、南側と東側を削った土をもって、水田区画を拡張した痕跡と考える。調査区中央にさらに小区画水田の痕跡があり、高いところを削って整地したようだ。以上の整地土である水田床土には六世紀後半の須恵器片が粉砕された形で多数含んでおり、意図的に砕かれたようだ。溝の痕跡を二条、土坑を二つ確認した。以下に、遺構詳細を示す。

溝７－１は調査区北半で確認された長さ17.4ｍ以上、最長幅4.2ｍ、最短幅2.0ｍの東西溝である（図23）。主軸をやや北にむける。調査区中央付近で溝７－２に切られる。溝埋土は暗褐粘土で、溝底は皿状である。溝の両端は本来、調査区外に続いていたと考えるが、両端部は削られる。六世紀後半の須恵器を大量に含むが、小片に破砕されており、後世の耕作で壊されたと考える。流水による堆積は認められなかった。

溝７－２は調査区中央を南北に縦断する長さ21ｍ以上、幅約0.1ｍの南北溝である（図23）。耕土と共通する黒褐土に覆われ、近・現代の耕作に伴う暗きょと考える。上面に瓦がいくつか見られた。南端は調査区外へと続く。

土坑７－１は調査区東半に位置する長軸約1.4ｍ、短軸約１ｍの不定形土坑である（図23）。土坑埋土は暗褐土で掘り底は皿状である。遺物は含まれない。

土坑７－２は調査区東隅に位置し、土坑７－１から東に約1.5ｍ離れた所で確認された長径約0.5ｍ、短径約0.4ｍの楕円形土坑である（図23）。土坑埋土は灰褐土で覆われ、底は皿状をなす。遺物はなく、両土坑の時期や性格はわからない。

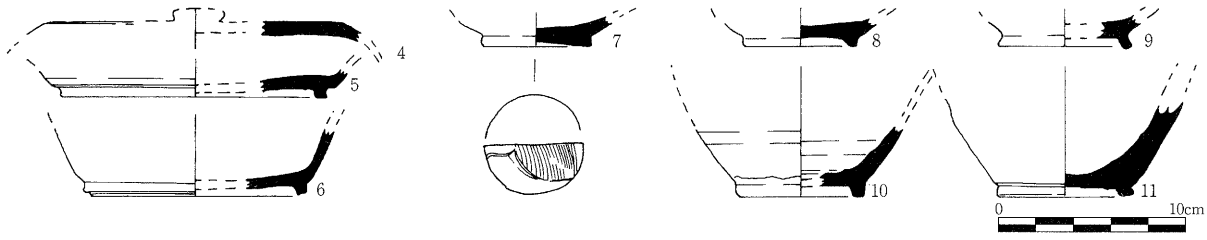


図22　古代の須恵器

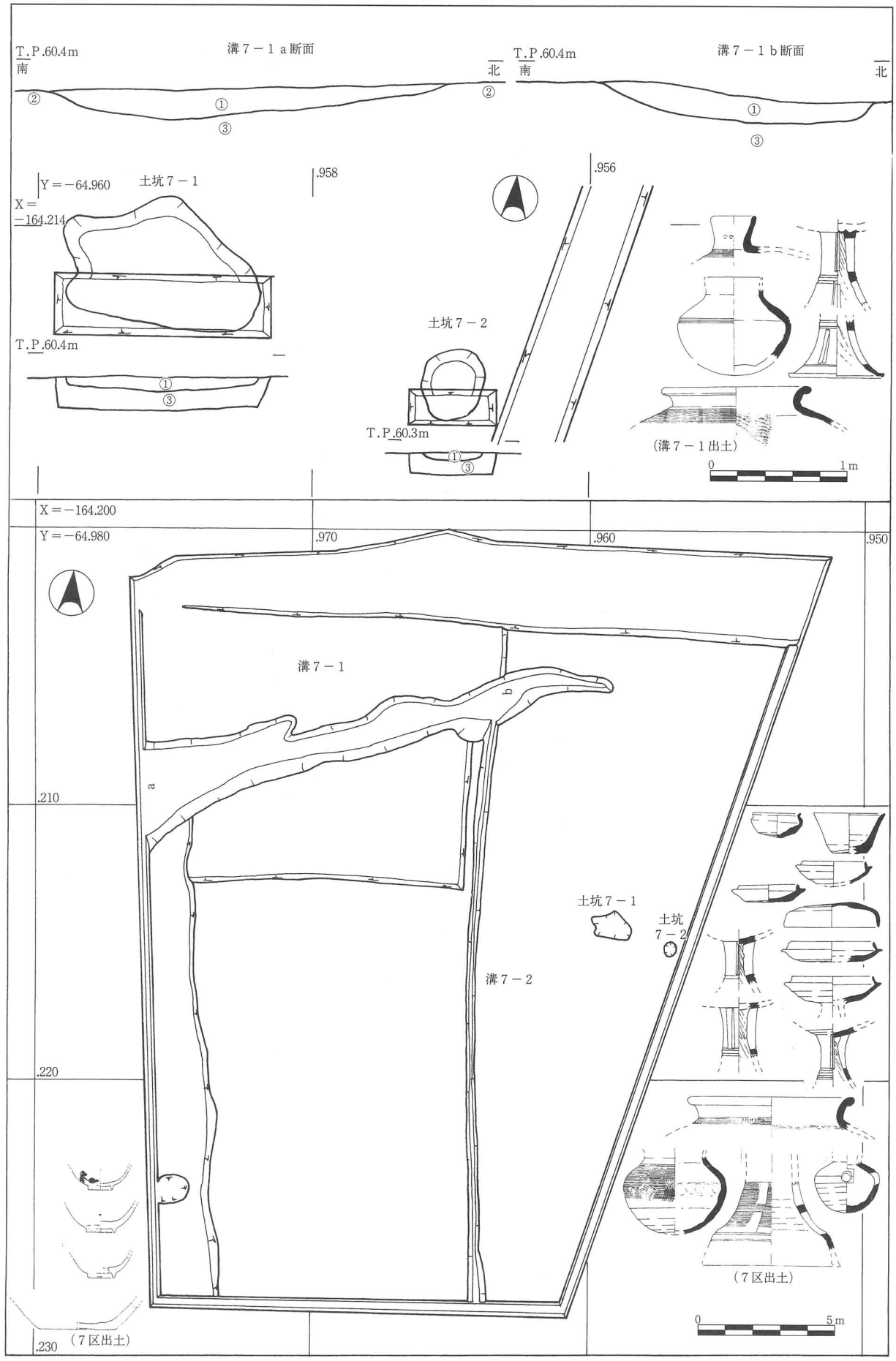

T.P.60.4m
南
溝７－１ａ断面
北
T.P.60.4m
南
溝７－１ｂ断面
北
Y＝－64.960
土坑７－１
X＝
－164.214
.958
.956
土坑７－２
T.P.60.4m
T.P.60.3m
（溝７－１出土）
0
1m
X＝－164.200
Y＝－64.980
.970
.960
.950
溝７－１
a
b
.210
.220
土坑７－１
土坑
７－２
溝７－２
（７区出土）
.230
（７区出土）
0
5m

図23　７区遺構図

2．出土遺物

今回調査ではコンテナ約200箱の遺物が出土した。内訳は六世紀後半の須恵器が大半で、その他、旧石器時代と縄紋・弥生時代中期にかけてのサヌカイト石器、五世紀後半の須恵器、奈良時代の須恵器、平安時代の須恵器、中世の瓦器・土師器・陶器・瓦、近世・近代の陶磁器類などである。その他、時期不明の鉄器、柱根がある。

これまでの調査でも、五世紀～六世紀前半の須恵器は少なく、多くの窯が発見されている実態に対応しない。また、飛鳥時代の遺構も陶器南遺跡の南端に限られ、窯とは遠い。奈良時代後期から平安時代の窯もいくつか見つかっているが、まとまった遺物は発見されていない。以下に時期ごとに概要を示す。

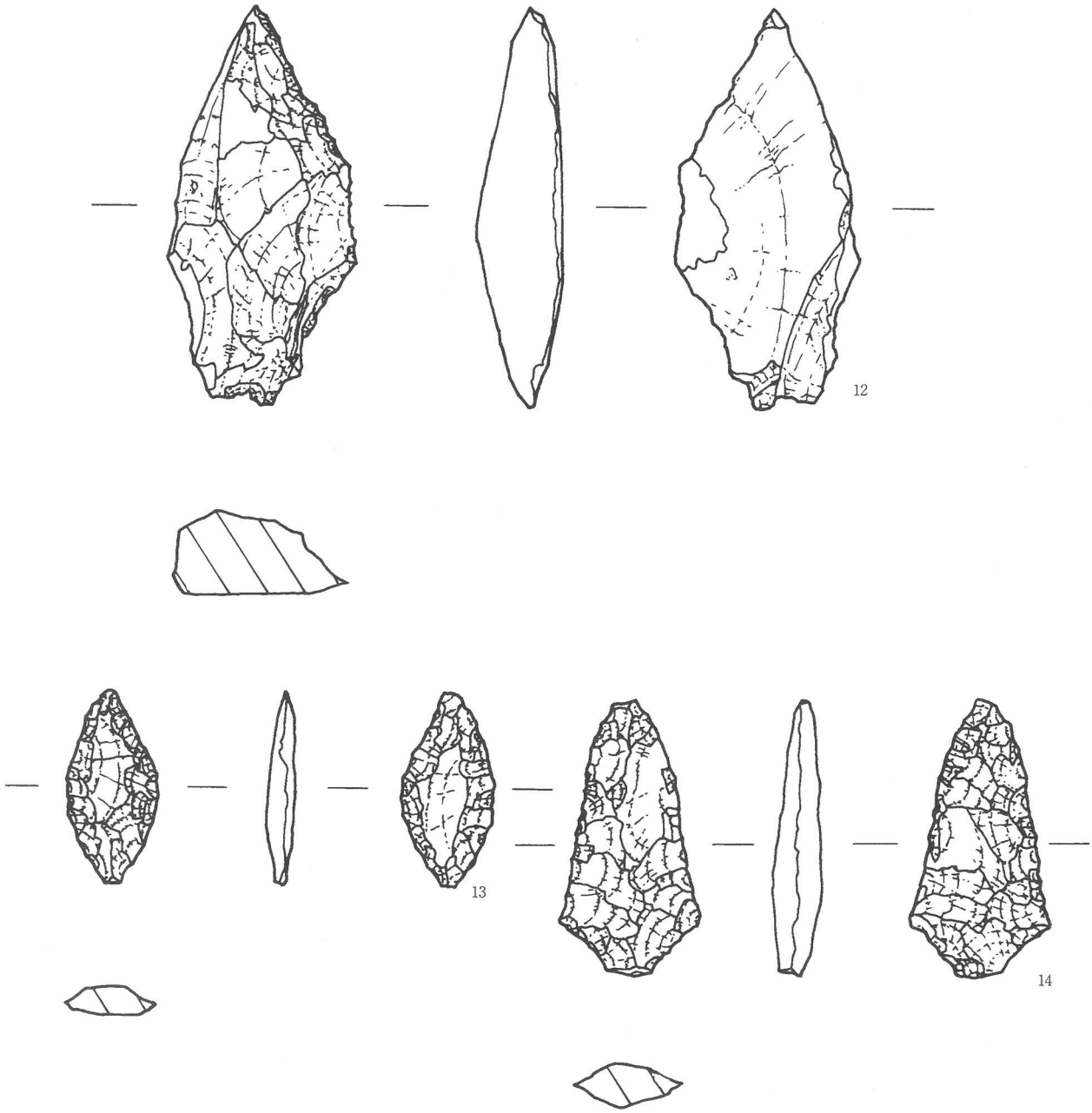


図24　サヌカイト製打製石器（１／１）

a．古墳時代後期以前の遺物（１～８区）

六世紀以前の遺物には、サヌカイト製の打製石器がある。いずれも後世の遺物包含層から発見され、遺構に伴うものではない（図24　図版７）。

ナイフ形石器(12)は最大長6.2cm、最大幅2.8cmを測る。以前に陶器南遺跡の調査で一点採集されており、二例目の発見である。打製石鏃は凸基式のものが二点発見された。縄紋時代のものか弥生時代のものか明快でない。小は最大長3.1cm、最大幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る(13)。大（14）は最大長4.4cm、最大幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。その他、サヌカイト剥片がいくつかみつかっている。

縄紋土器、弥生土器、古墳時代前・中期の遺物は発見されていない。古墳時代中期の遺物として、６区から五世紀後半の須恵器杯身片が発見されている（図21）。この時期の窯が１区の南斜面で発見されている。

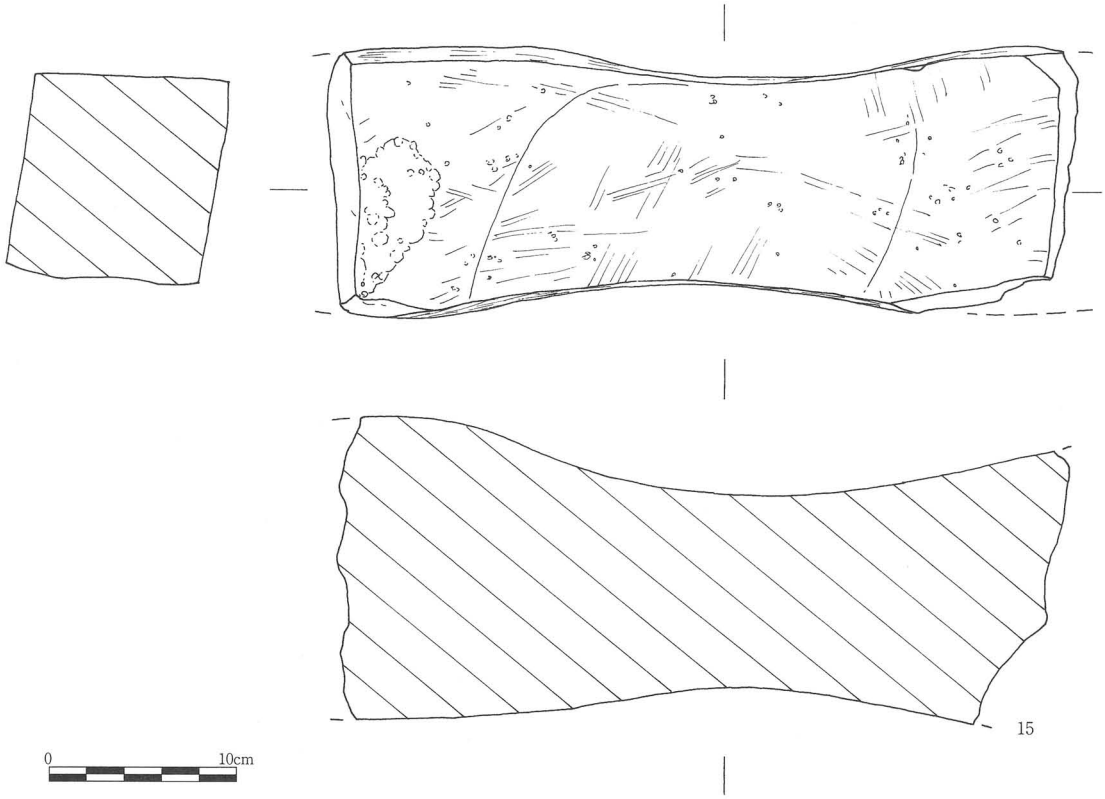


図25　１区出土砥石

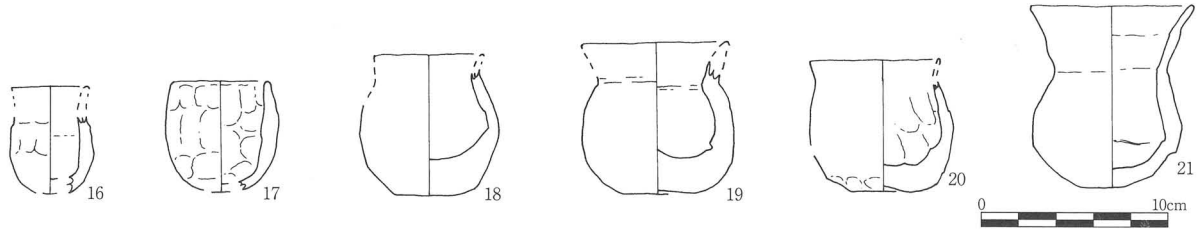


図26　１・２区出土土師器小壷

b．古墳時代後期の遺物（１区）

１区出土遺物は六世紀後半の須恵器が大半で、その他に同時期の土師器の小壷（16）～(21)と甕・カマド小片、凝灰岩製の砥石（15）がある。須恵器は杯・高杯・鉢・壷・器台・コシキ・甕などがある。特殊なものとして、須恵器製作か焼成の道具と思われる乾燥台と陶棺二片、タコ壷がある（図28～41　図版４～６）。

砥石は最大長19.1cm、最大幅7.6cmの方柱形で長辺の四面を刷り面に使う。鉄製品の荒研用で、農耕具の調整に使ったものだろうか。溝１－53最下層から発見され、この溝からは須恵器が大量に出土しており、同時期の可能性が高い（図25　図版７）。

土師器小壷はいずれも手づくねで、ロクロを使用しない（図26）。高さ6～10cm、口径4.4～8.1cmである。頸部を明確に作り出すものと曖昧なものがあり、底部は２cm以上の厚みのものがある（18）・（19）。

土師器甕は外面をハケメ仕上げし、鍔がめぐるもの、めぐらないものがある。いずれも小片で摩滅が激しい。これに伴うカマドも小片で出土した。

須恵器杯蓋（33）～（48）・(88)～(107)・(128)～(135)は、口径10.1～16.4cm、高さ3.2～4.4cmである（図28～30）。焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁端部は丸く仕上げるもの、段にするもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面は屈曲が明快で沈線を施すもの、なだらかに丸く仕上げるものがある。天上部はどれも丁寧に回転ヘラ削りを施す。口縁端部外面に乾燥時にムシロの跡がつくものがいくつかある。

杯身（49）～（87）・(108)～(127)・(136)～(151)は、口径10.1～16.4cm、高さ3.2～4.4cmである（図28～30）。これらも焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁部は内傾するものが大半で、湾曲して端部のみ直立するもの、短く直立気味のものもある。口縁端部は、丸く仕上げるもの、段にするもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面はな

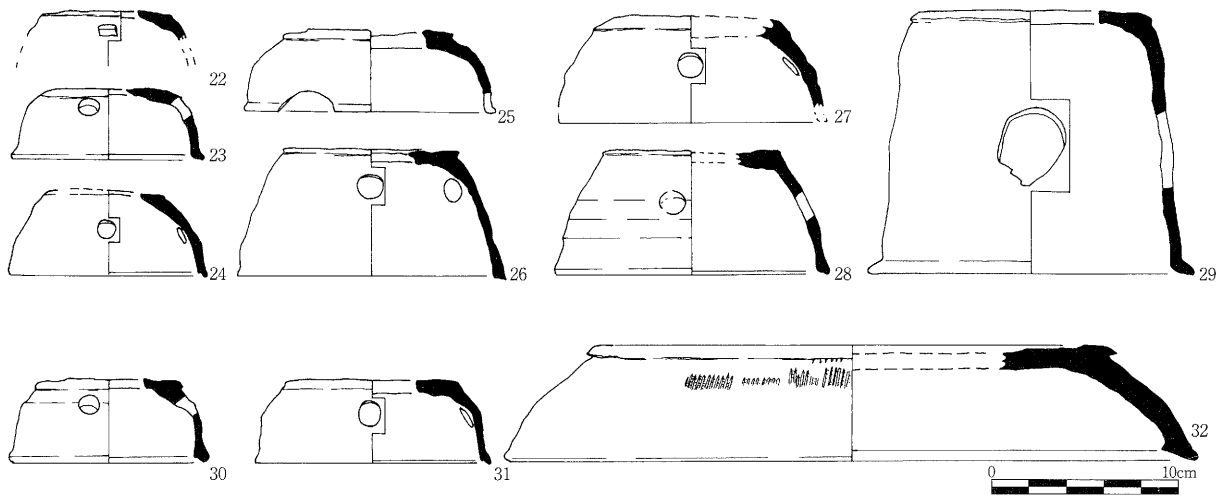


図27　１・２区出土須恵器乾燥台

だらかに丸く仕上げ、天上部は丁寧に回転ヘラ削りを施すが、ヘラ削りのないものもある(54)。

高杯は長脚二段透かしのものと低脚で一段透かし、あるいは透かし穴をもたないものがある(157)～(192)。長脚の高杯は有蓋と無蓋がある。有蓋高杯は、二段の透かし穴があり、ほぼ同じ長さのものと下の段が上の段の半分程度のものがある。その蓋は頂部につまみのつくものと無いものがあり、外面にカキ目調整を施すものとないものがある。無蓋高杯は杯部がラッパ状に開き、刺突文や屈曲部にいくつかの段を施すものと杯蓋を転用しただけのものがある。皿状の杯部に耳があるものは（163)、類例が兵庫県八幡山六号墳出土土師器に知られる。

低脚の高杯にも有蓋と無蓋があり、両者とも蓋杯を転用したつくりである(171)～(192)。透かし穴は長方形で三方向か四方向、穴を開けずカキ目調整で仕上げるものなどがある。脚端部は平たく仕上げるものと尖らせて接地させるものがある（図28～30)。

こね鉢は(193)・(194)・(196)～(202)、口縁部を平たく仕上げ、底部を円盤形に仕上げ、中心に穿孔が有るものと無いものがある。体部外面はカキ目調整するものとナデ仕上げのみのもの、環状の把手を付けるものがある（図32)。

鉢は口縁端部を丸く丁寧に仕上げ、口径17.6cm高さ7.9cmを測る（198）（図32)。台付の鉢は口縁端部が直立するもの(232)と内傾するものがある(234)（図34)。

イイダコ壷は小壷の側面と底に穿孔、口径4.6cm高さ4.9cmを測る（195）（図32)。

ハソウは頸部に段を設け、ラッパ状に開く。体部は小さくほぼ球形にし、底部を丸く削りだすものと平たくするものがある(203)～(217)。頸部外面をカキ目仕上げするもの、波状紋や刺突紋の加飾を伴うものがある。ハソウのうち、体部に穿孔の無いものも見られる（215）（図33)。

壷は長頸と短頸、台付のものもある。長頸壷はラッパ状の頸部に波状紋の加飾を施すもの(218)、直立気味のものがある。後者には蓋が伴うと考える(229)・(230)。短頸壷は扁平の体部で底部を丸く仕上げる小型品である(225)～(228)。体部にカキ目調整するものがある(225)。

短頸壷の蓋は扁平な皿状で口径13～20cm、高さ2～3cmとなる(221)～(224)（図33・34)。

短頸壷の蓋と形状が似るものとして漏斗状製品がある(219)。器台杯部と整形は共通し、頂部が筒状となる。口縁端部は平たく接地し、丁寧になでられる。外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキの痕跡が明瞭で、内面は粗くナデ消す。用途不明で、六世紀後半～八世紀の遺跡に出土例が知られる（図33)。

器台は長い脚に口径30cm程度のカップ状にひらく杯部をもつ大型品である(235)・(236)・(238)～(244)。杯部が小型のものや壷などを付ける器台はない。杯部は屈曲部外面に段や沈線をつくり、波状紋や刺突紋の加飾をもつものと屈曲部が明瞭でなく、加飾しないものがある。杯部外面と内面にはタタキの痕跡が残る。口縁端部は厚く平らにするものと直立気味に尖らせるものがある。長脚の脚部外面は緻密な波状紋が見られ、三方向・四方向の方形透かしをあける。脚端部は平らに仕上げ、直立気味に折り曲げる（図34・35)。

器台の仲間として、発達した高台をもち、口縁端部を屈曲させる金属器模倣の鉢がある(237)。

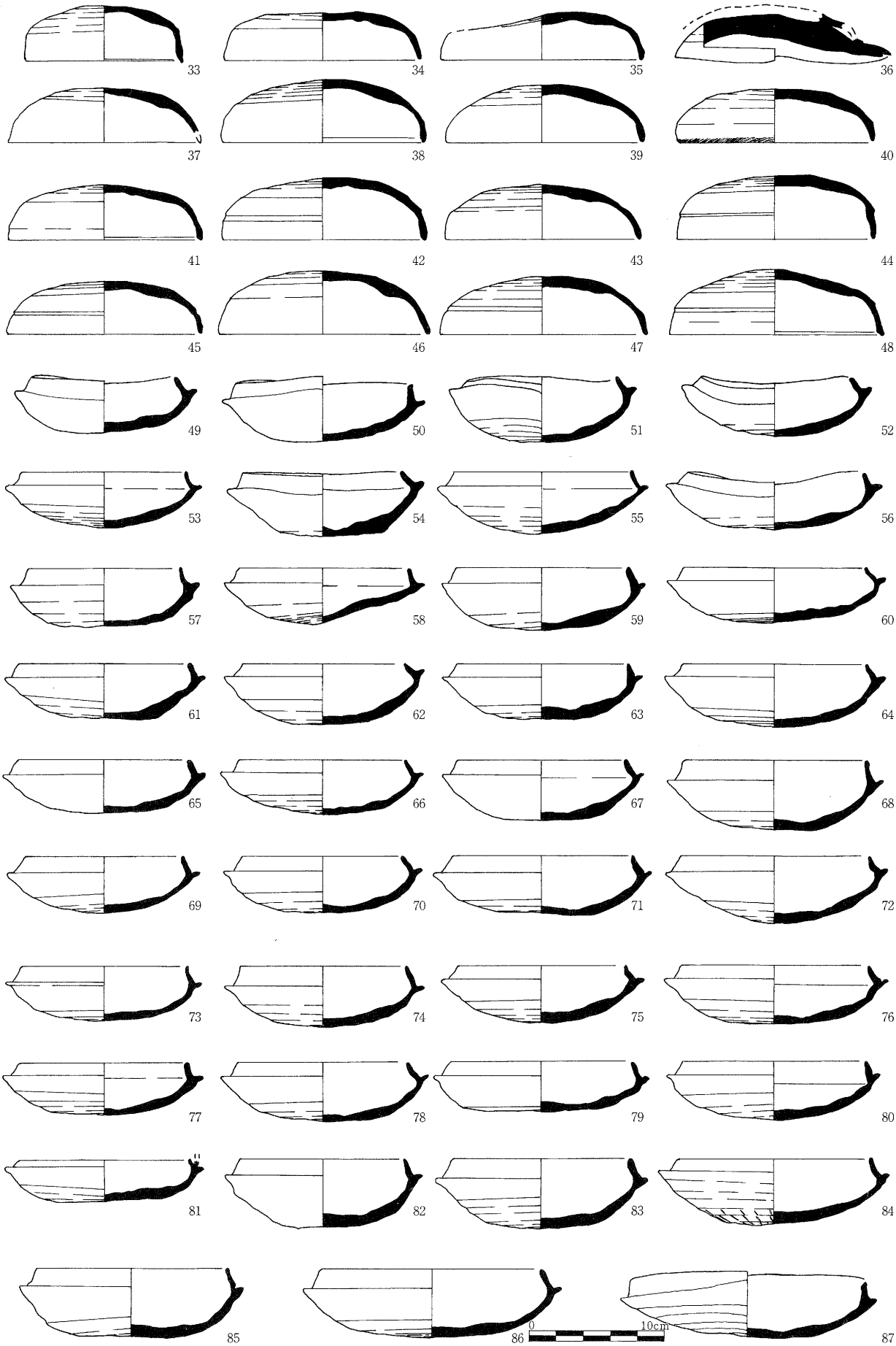


図28　１区出土須恵器（１）

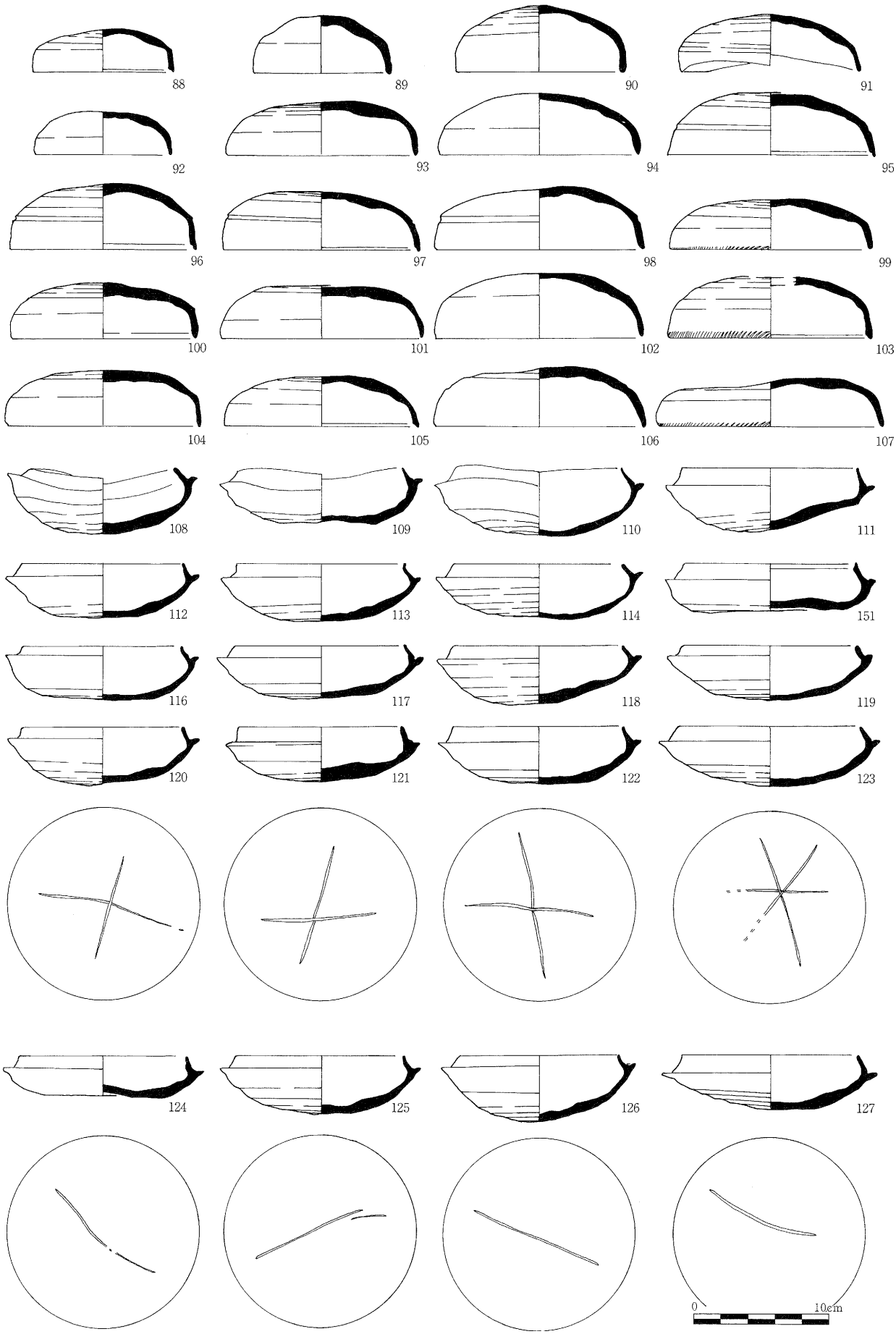


図29　1区出土須恵器（2）

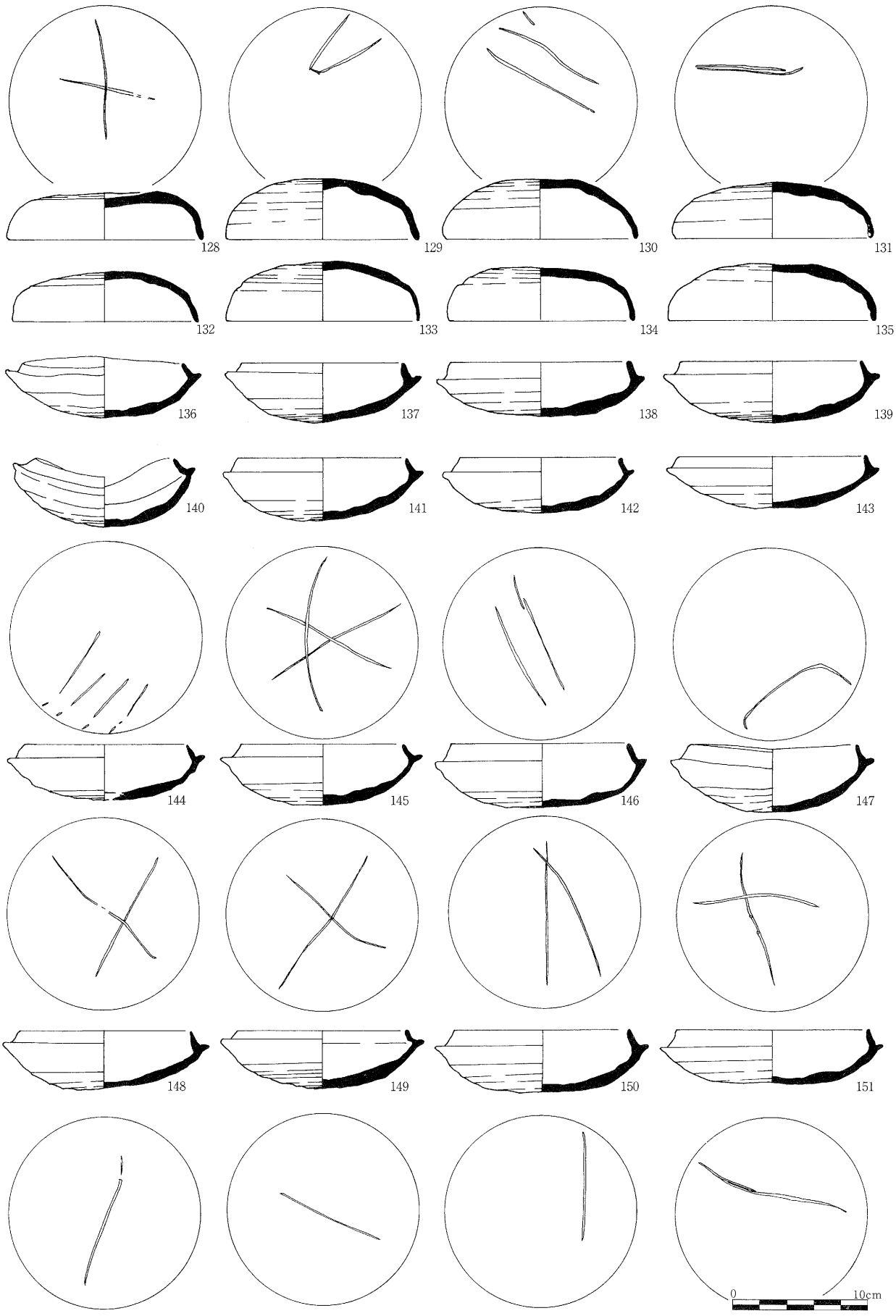


図30　1区出土須恵器（3）

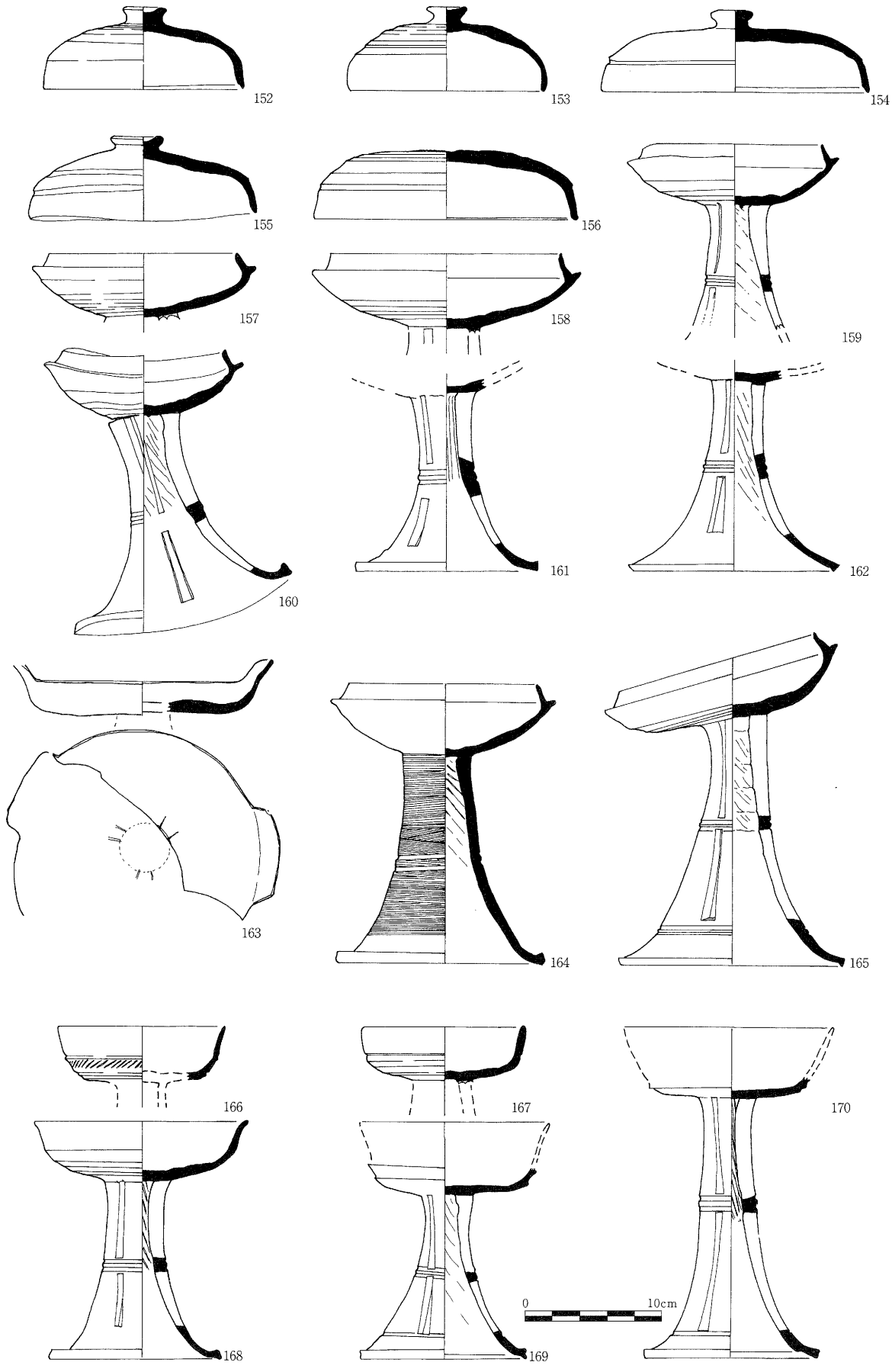


図31　1区出土須恵器（4）

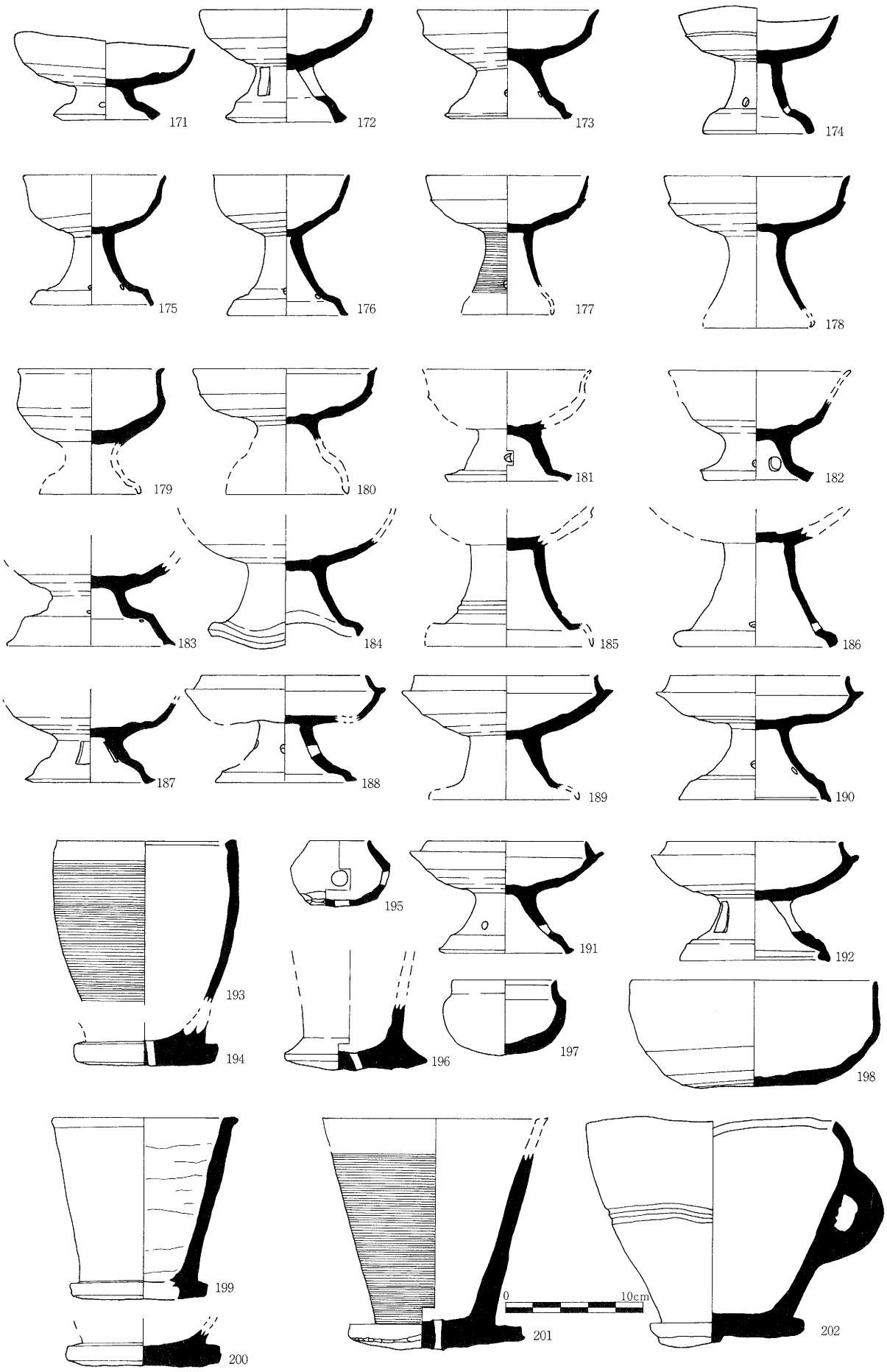


図32　1区出土須恵器（5）

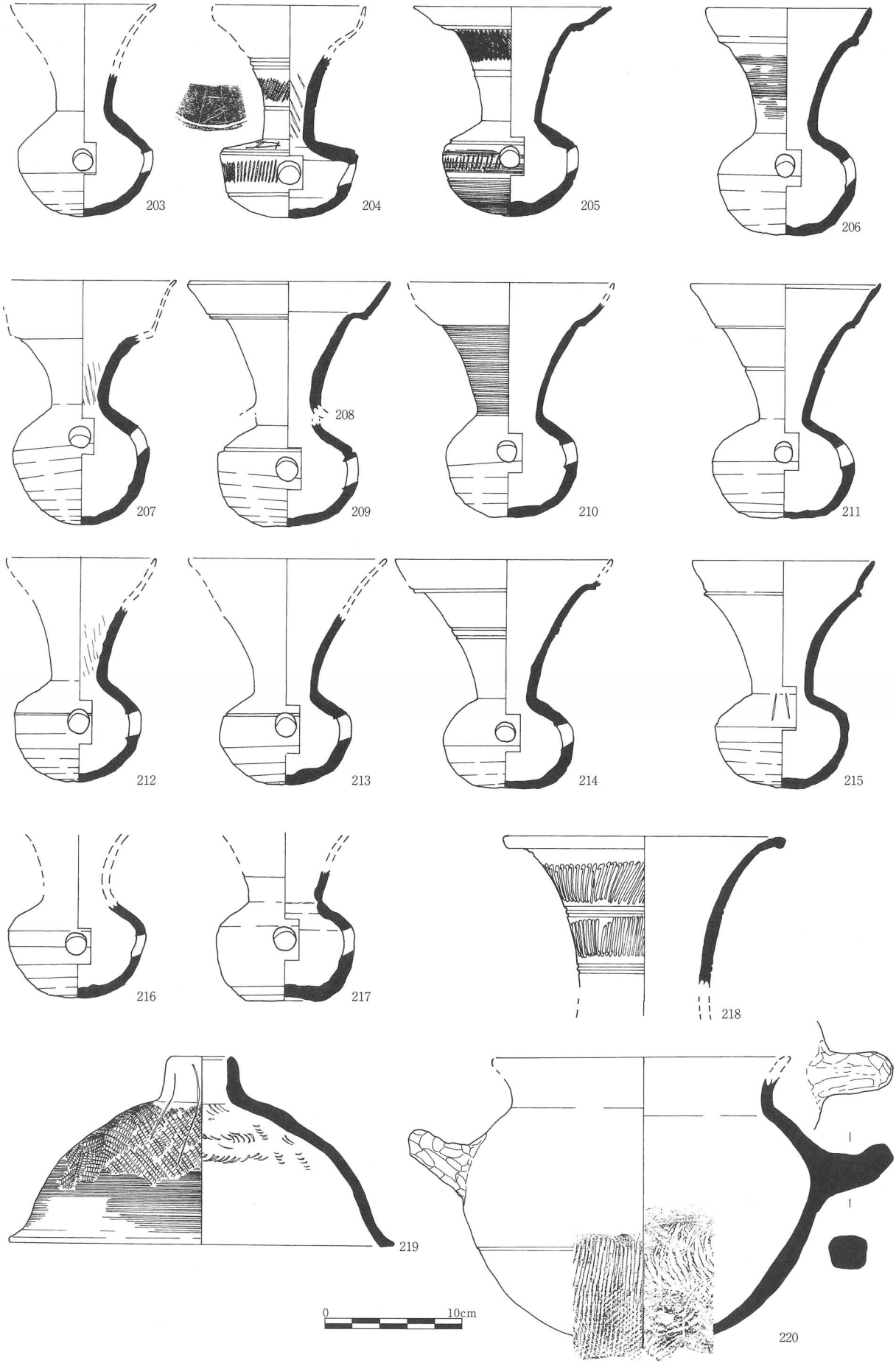


図33　1区出土須恵器（6）

杯部は加飾がなく、丁寧にナデ仕上げし屈曲部に沈線を施す。器厚は1cm前後で分厚い（図35）。

提瓶は口縁部を折り返し、丸く分厚く仕上げるものと、直立気味に尖らせるものがある(245)～(249)。体部はカキ目仕上げし、肩に環状の把手を付けるもの、鈎形の把手を付けるものがある（図36）。

横瓶は砲弾形で、口縁部径16.4cm、体部最大長26cmの大型から、口縁部径7.1cm、体部最大長10.4cmの小型がある(250)～(255)（図36・37）。

甕は頸部が小さく、体部は柿の実形か球形で、口縁端部を折り返して下方向に屈曲するもの、丸く仕上げるものなどがある(259)～(272)。大半は体部外面に格子目タタキを、内面に青海波紋

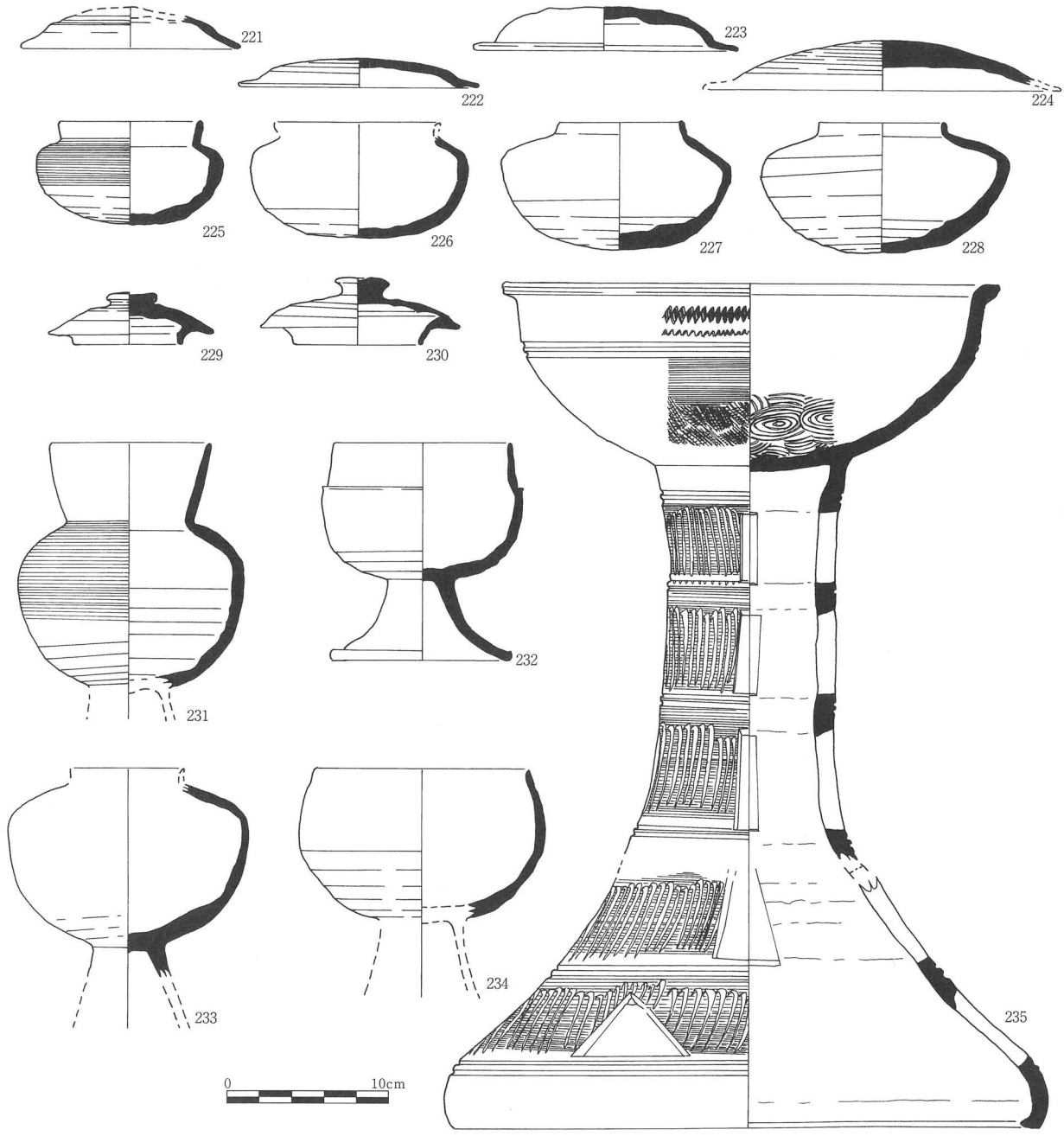


図34　１区出土須恵器（７）

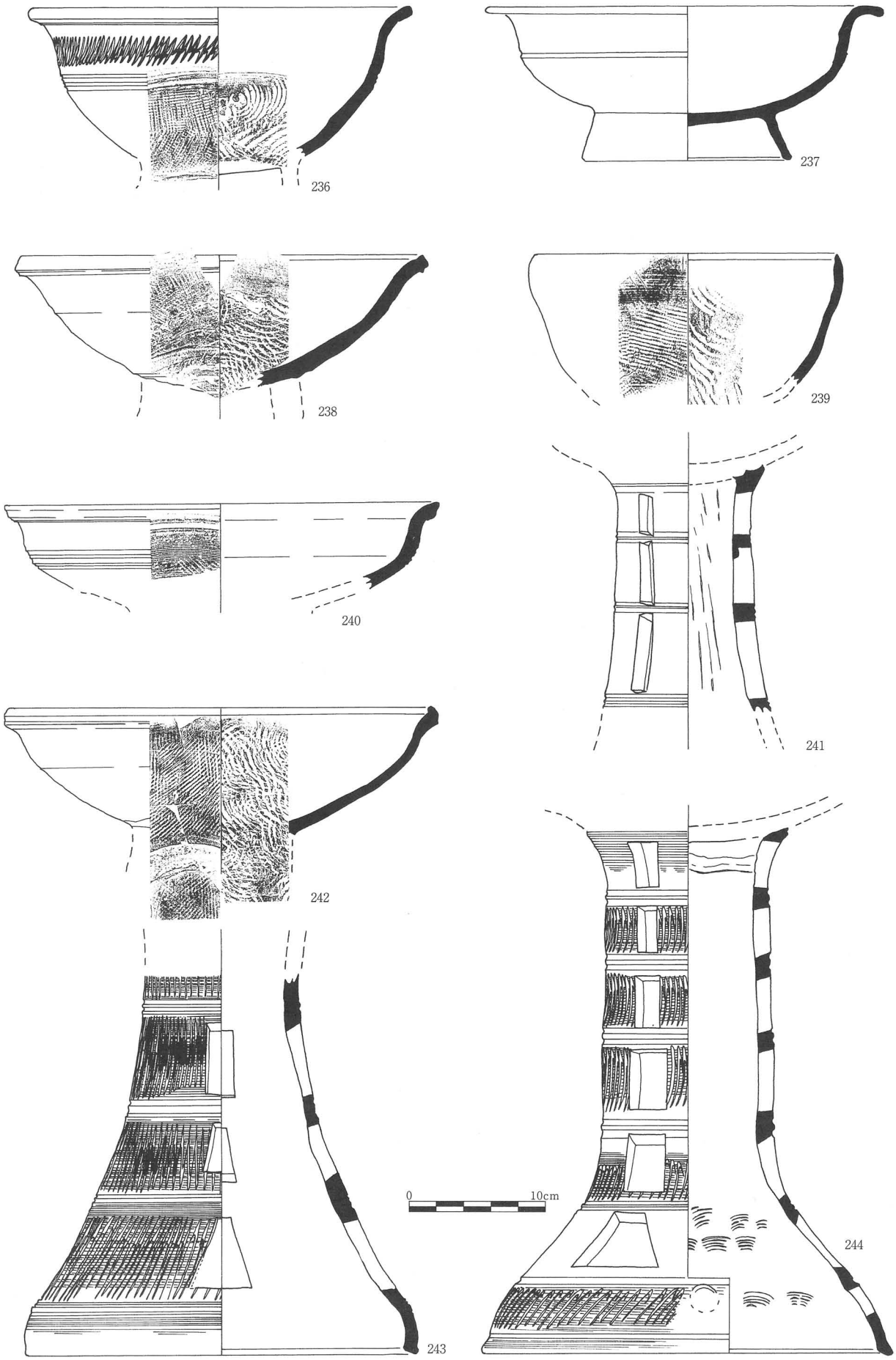


図35　1区出土須恵器（8）

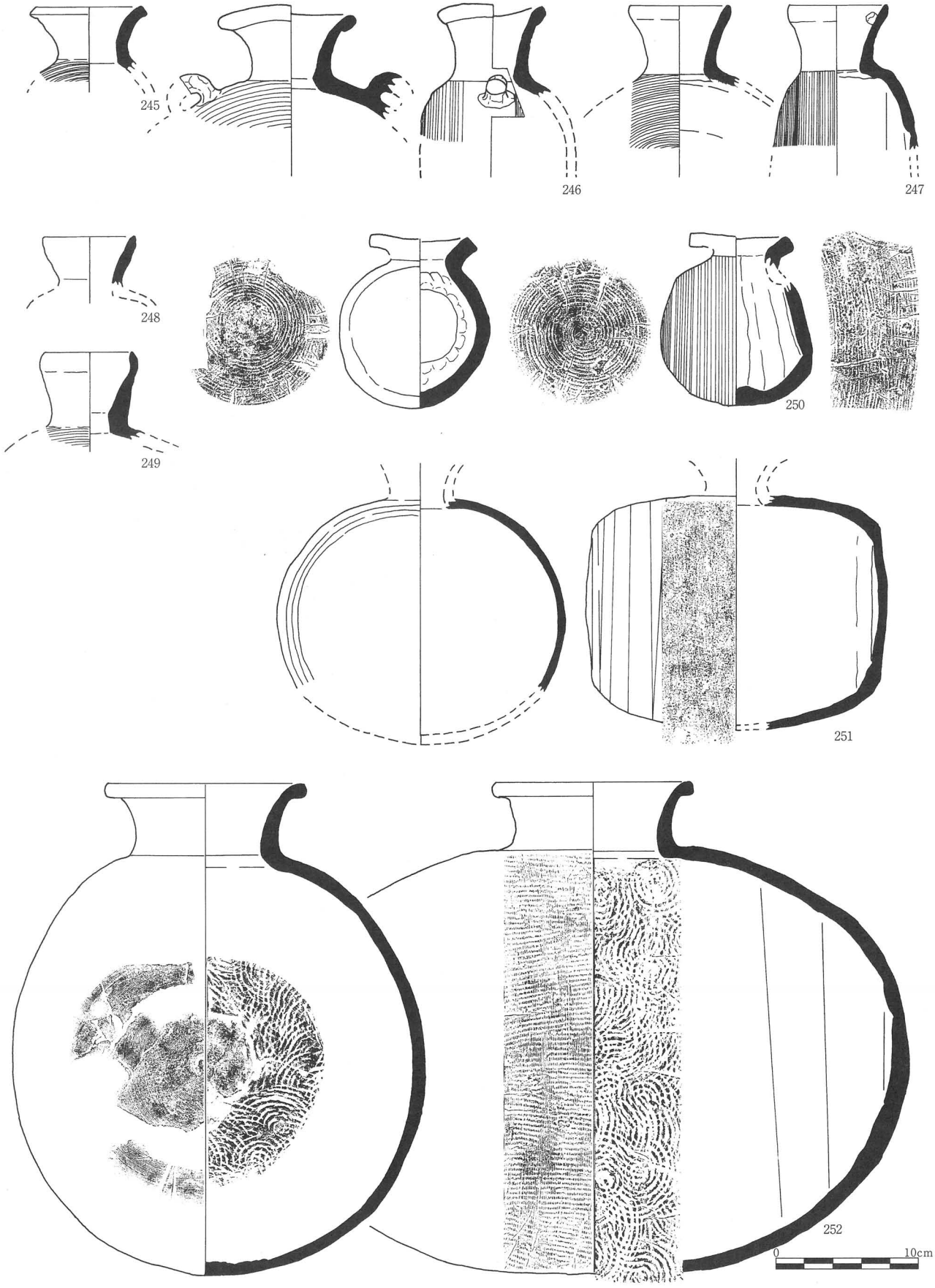


図36　1区出土須恵器（9）

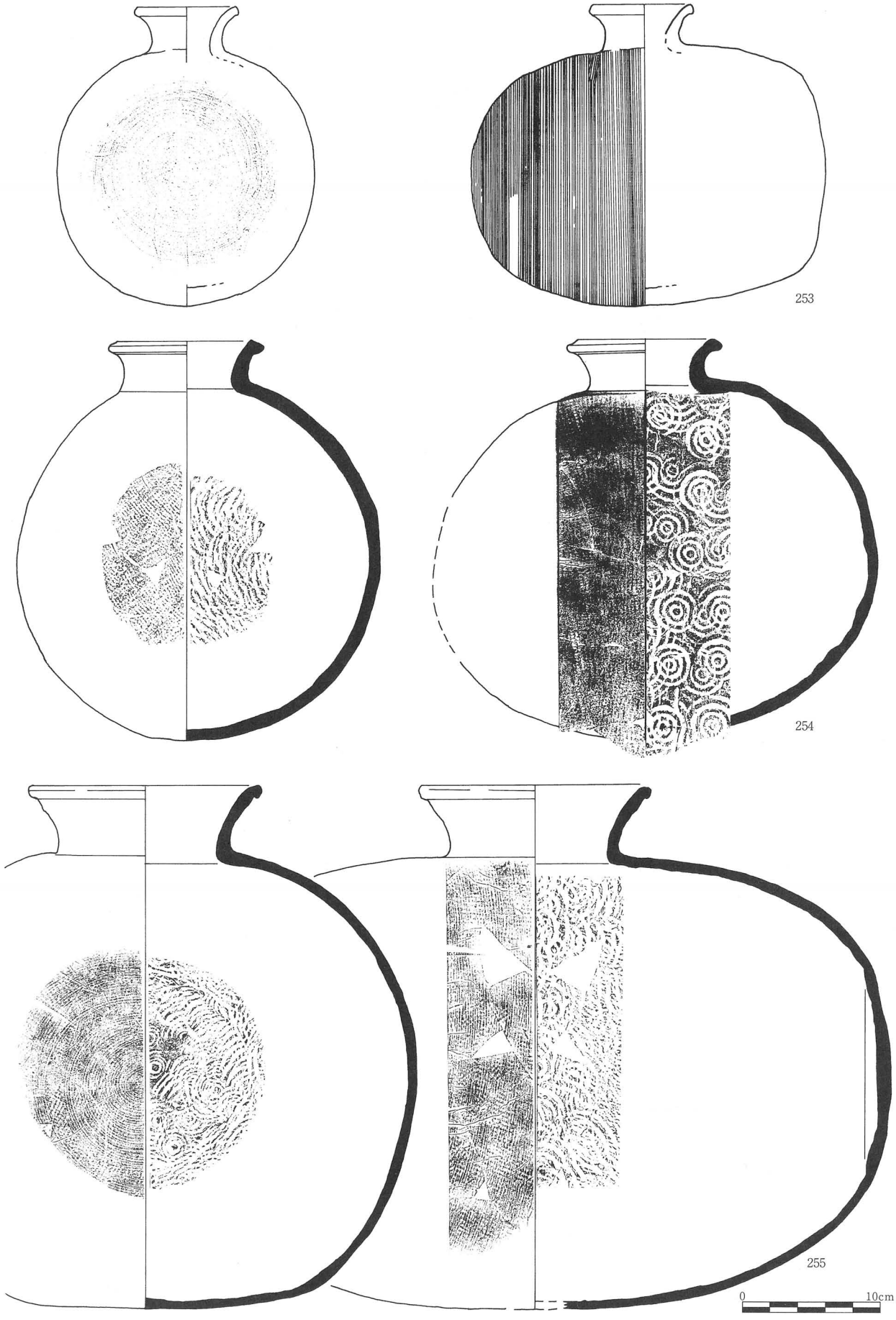


図37　1区出土須恵器（10）

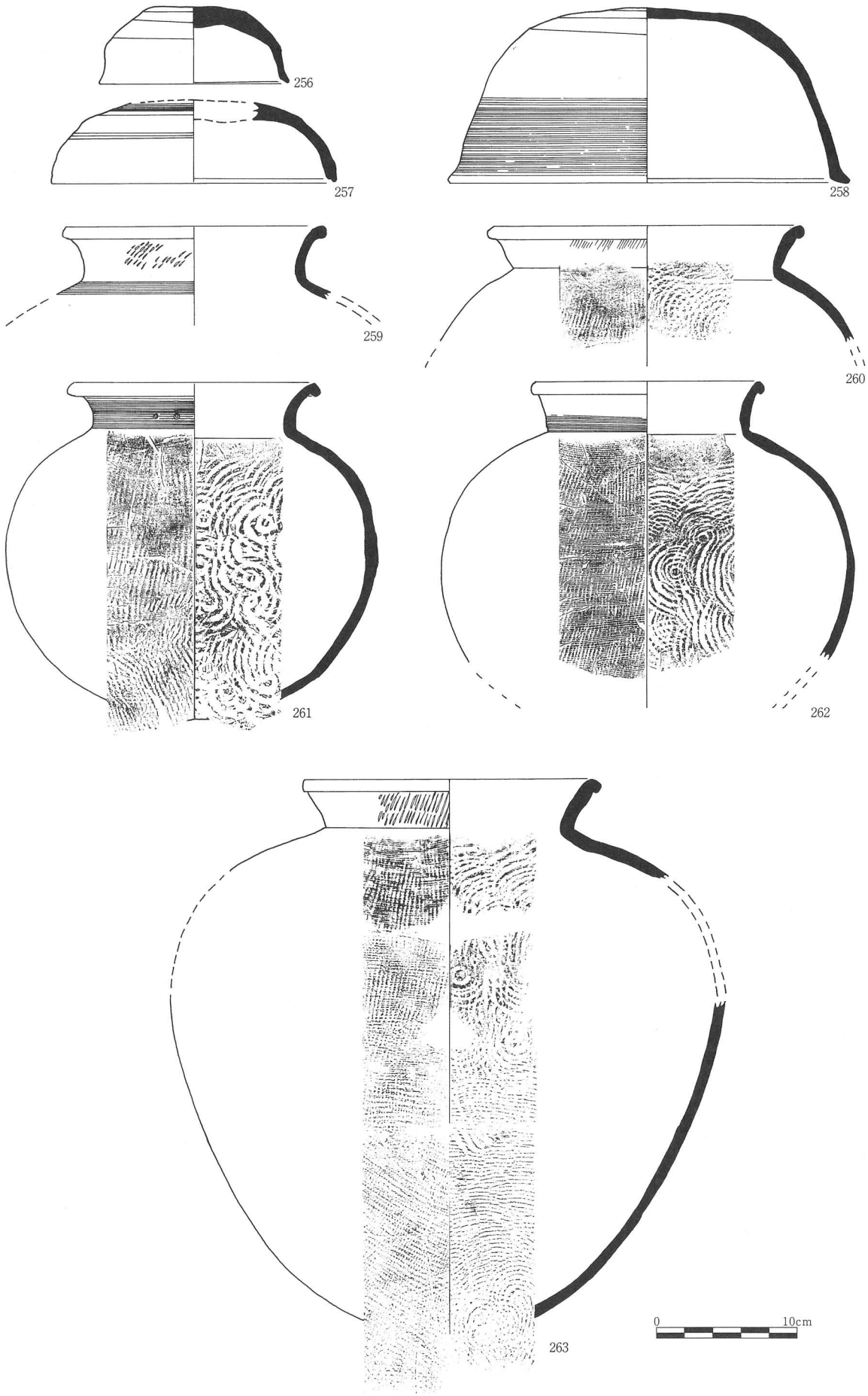


図38　1区出土須恵器（11）

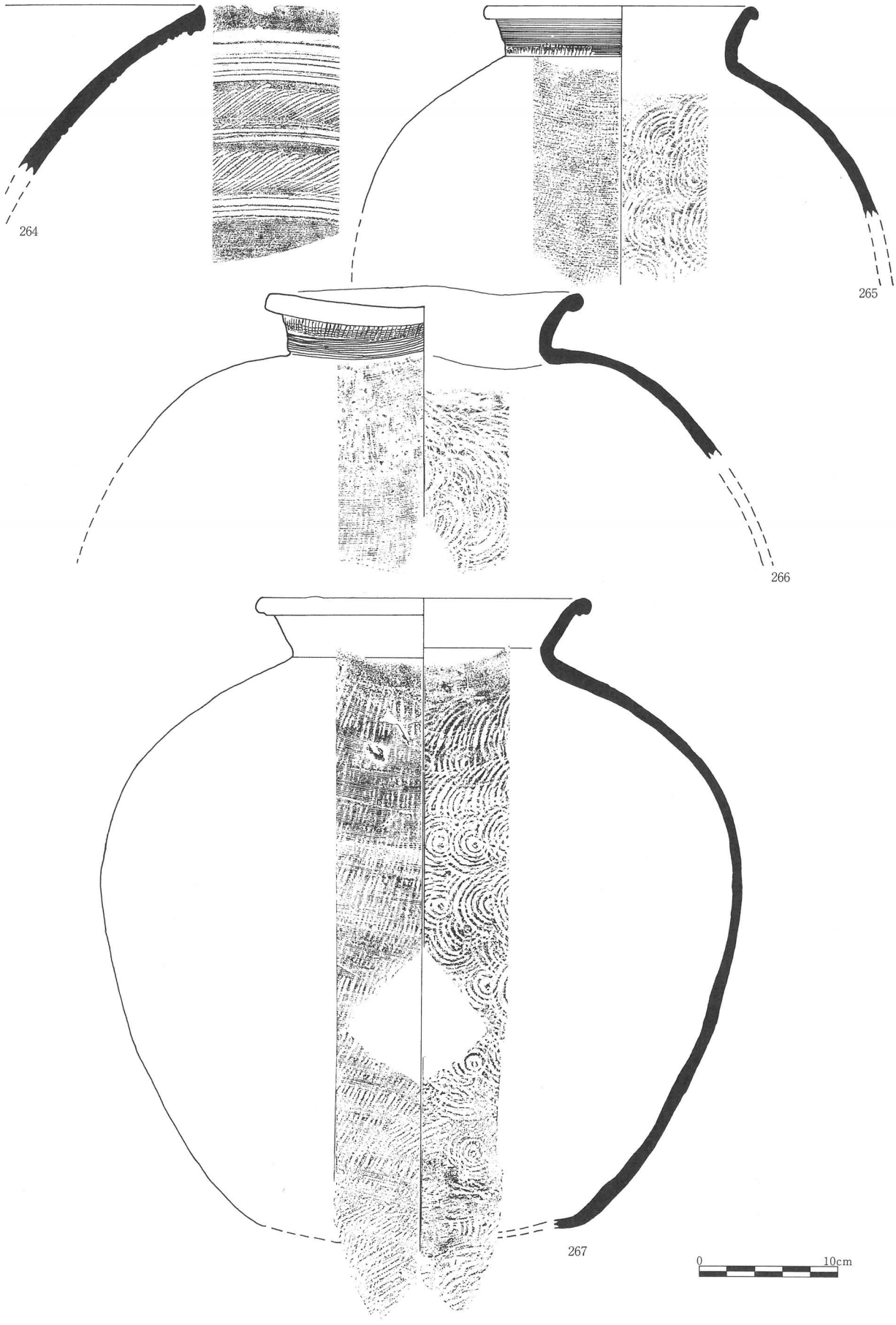


図39　1区出土須恵器（12）

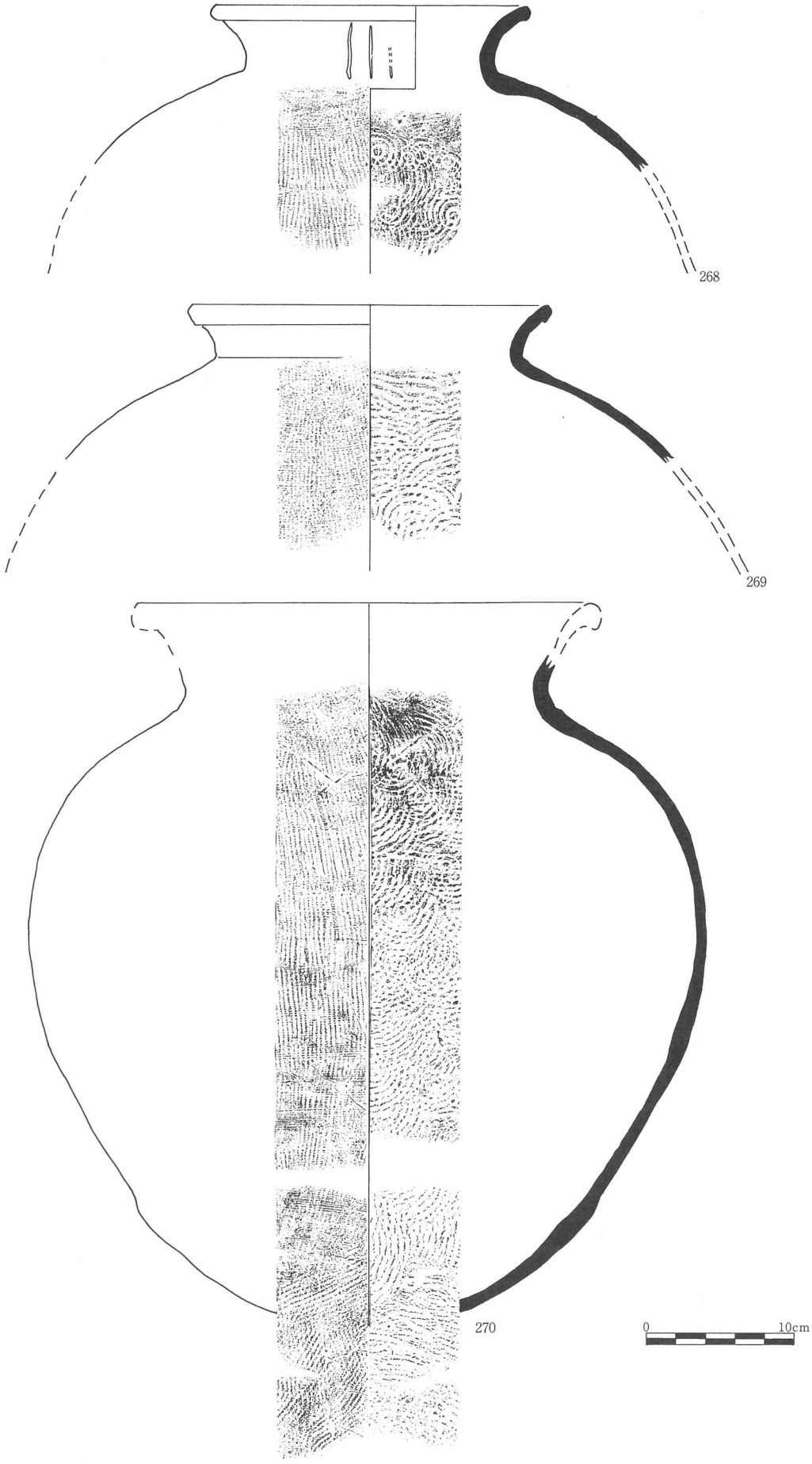


図40　1区出土須恵器（13）

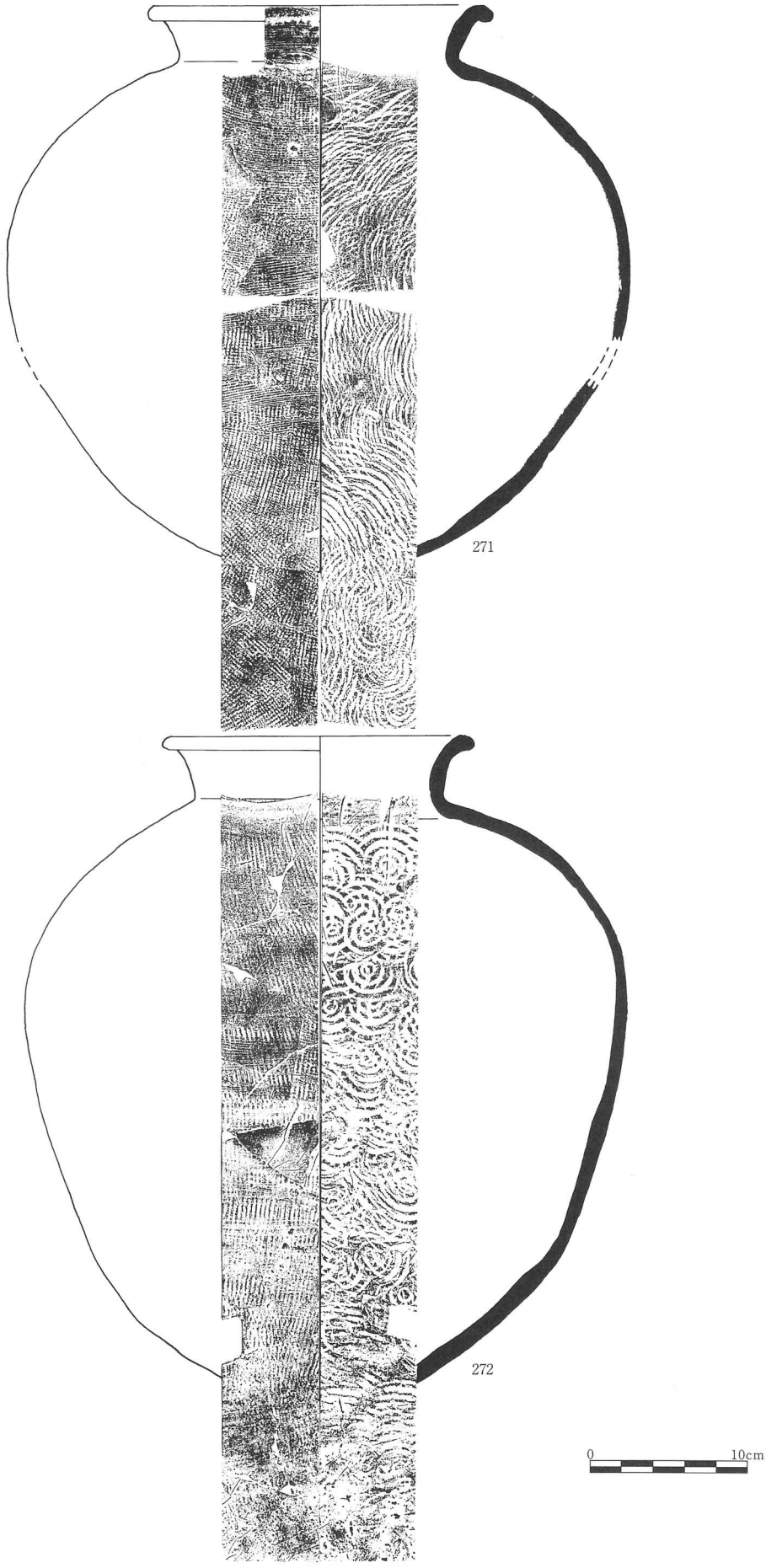


図41　1区出土須恵器（14）

の同心円タタキを残す。頸部と体部外面上半をたたいた後、カキ目仕上げするものもある（図38～41）。把手杯甕は扁平の体部に頑丈な把手をつけ、短い頸部がひらく(220)（図33）。

甕の蓋と思われる鉢形の蓋がある(256)～(259)。鉢と峻別できる違いは口縁端部を平たく厚く作り出す。外面は杯蓋のつくりと共通し、回転ヘラ削りで屈曲部を明瞭にするものと緩やかに曲げるものがある。大型のものは外面にカキ目が残り、口径28.4cm、高さ12.7cmを測る（図38）。

陶棺は須恵質の小片で底部外面の破片と考える。円筒形の脚部がはずれる。厚さ1cm程度で、内面は粗くヘラ削りし、外面はハケ調整する（１）・（２）(図17)。

乾燥台は窯内部での発見例があり、焼き台とも考えられる。今回調査では11個体発見されたが、口径・器高はまちまちで同じ形態はない。天井部は無調整で中央を大きく穿孔し、体部に円形や方形の透かし穴を開ける。端部は厚く平らに仕上げる。内外面共にナデ仕上げする(22)・(24)・(26)・(31)（図27）。

ｃ．古墳時代後期の遺物（２区）

２区出土遺物も六世紀後半の須恵器が大半で、その他に同時期の土師器小壷がある。須恵器は杯・高杯・鉢・壷・器台・コシキ・甕などと、陶製紡錘車がある（図42～47　図版４～６）。

土師器小壷は手づくねで、ロクロを使用しない（図26　図版６）。高さ6～10cm、口径4.4～8.1cmである。頸部を明確に作り出すものと曖昧なものがあり、底部は２cm以上の厚みのものがある(18)～(20)。その他、土師器の甕小片がある。

乾燥台は窯道具としての焼き台と報告される場合もある。口径10.4～36.8cm、高さ4.2～16.4cmと規模はまちまちである。天井部は無調整で中央を大きく穿孔し、体部に円形や方形の透かし穴を開ける。端部は厚く平らに仕上げる。内外面共にナデ仕上げする(23)・(25)・(27)～(30)・(32)。二次焼成を受けたような痕跡はない（図27　図版６）。

須恵器杯蓋（273）～（288）・(324)～(327)は口径13.1～15.2cm、高さ3.6～4.3cmである。焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁端部は丸く仕上げるもの、やや尖らせるものがある。外面は屈曲が明快で沈線を施すもの、なだらかに丸く仕上げるものがある。天上部はどれも丁寧に回転ヘラ削りを施す（図42・43）。

杯身（289）～（323）・(328)～(339)は口径11.8～16.8cm、高さ3.2～5.3cmである。これらも焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁部は内傾するものが大半で、湾曲して端部のみ直立するもの、短く直立気味のものもある。口縁端部は、丸く仕上げるもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面はなだらかに丸く仕上げ、天上部は丁寧に回転ヘラ削りを施す（図42・43）。

高杯は長脚二段透かしのものと低脚で一段透かし、あるいは透かし穴をもたないものがある(342)～(350)。長脚の高杯は有蓋と無蓋がある。有蓋高杯は脚部にカキ目を施し、端部を尖らせ

る。二段の透かし穴があり、下の段は上の段の半分ほどの長さである。その蓋は頂部につまみがあり、屈曲部が明瞭でなく、なだらかで端部を丸く仕上げる。焼成前に「一」形のヘラ記号をもつ。無蓋高杯は杯部がラッパ状に開き、屈曲部に段を多重に施す（図44）。

低脚の高杯にも有蓋と無蓋があり、両者とも蓋杯を転用したつくりである。透かし穴は長方形で三方向のものと四方向のもの、穴を開けるものなどがある。脚端部は平たく仕上げるものと尖らせて接地させるものがある（図44）。

ハソウは頸部に段を設け、ラッパ状に開く。体部は小さくほぼ球形にし、底部を丸く削りだすものと平たくするものがある(355)～(361)。頸部外面をカキ目仕上げするもの、波状紋や刺突紋の加飾を伴うものがある（図44）。

壷は長頸と短頸、台付のものもある。長頸壷はラッパ状の頸部に波状紋の加飾を施すもの(351)、直立気味のものがある(379)。後者には蓋が伴うと考える(369)・(370)。体部は屈曲部を沈線で区切るもの、刺突紋などで加飾するものがある。短頸壷は扁平の体部で底部を丸く仕上げる小型品である(366)～(368)。短頸壷の蓋は扁平な皿状で口径12cm、高さ2.4cmとなる(365)（図45）。

台付壷は二段透かしのもの、三方向の円形透かしのもの、透かし穴のないものがある。脚端部は平たく仕上げる（図45）。

金属器模倣と考える大型鉢は杯端部が外湾し、屈曲部に段を設け、発達した高台をもつ(362)。内外面とも丁寧にナデ仕上げする（図44）。岡山県王墓山古墳出土例があり、器台として使われたようだ。また、奈良時代初頭の漆器では奈良県長屋王邸宅跡出土例がある。

提瓶は口縁部を折り返し、丸く分厚く仕上げるものと、直立気味に尖らせるものがある(381)～(383)。体部はカキ目仕上げし、肩に鈎形の把手を付ける。体部を横向きにし、「II」形の把手をつけるものもある(354)（図44・46）。

横瓶は砲弾形で、口縁部を丸く仕上げる(371)・(372)・(388)（図45・47）。

コシキは口縁部を平らにし、体部をナデ仕上げし、二方向の把手をつける（384）～（386）。底部に大きく透かし穴を施す。いずれも焼が甘く、灰白色・乳白色である（図46）。

甕は頸部が小さいもの、長く波状紋の加飾があるもの、体部は柿の実形か球形で、口縁端部を折り返して下方向に屈曲するもの、丸く仕上げるものなどがある(387)・（389）～(391)。大半は体部外面に格子目タタキを、内面に青海波紋の同心円タタキを残す。頸部と体部外面上半をたたいた後、カキ目仕上げするものもある（図47）。

甕の底部には焼成時に蓋杯を貼り付けて固定した痕跡が目立つ。これまで、焼台と考えられていた鉢状のものがあたった痕跡ではなく(22)～(32)、窯詰めの実態を示唆すると考える。

把手杯甕は扁平の体部に頑丈な把手をつけ、短い頸部がひらく(363)（図44）。

甕の蓋と思われる鉢形の蓋がある(352)。鉢との違いは口縁端部を平たく厚く作り出すことだ。大型で外面に鈎状の把手が付き、口径15.2cmを測る（図44）。

陶製紡錘車は直径3.2cmの円形で、中央に穿孔がある（364）（図45）。

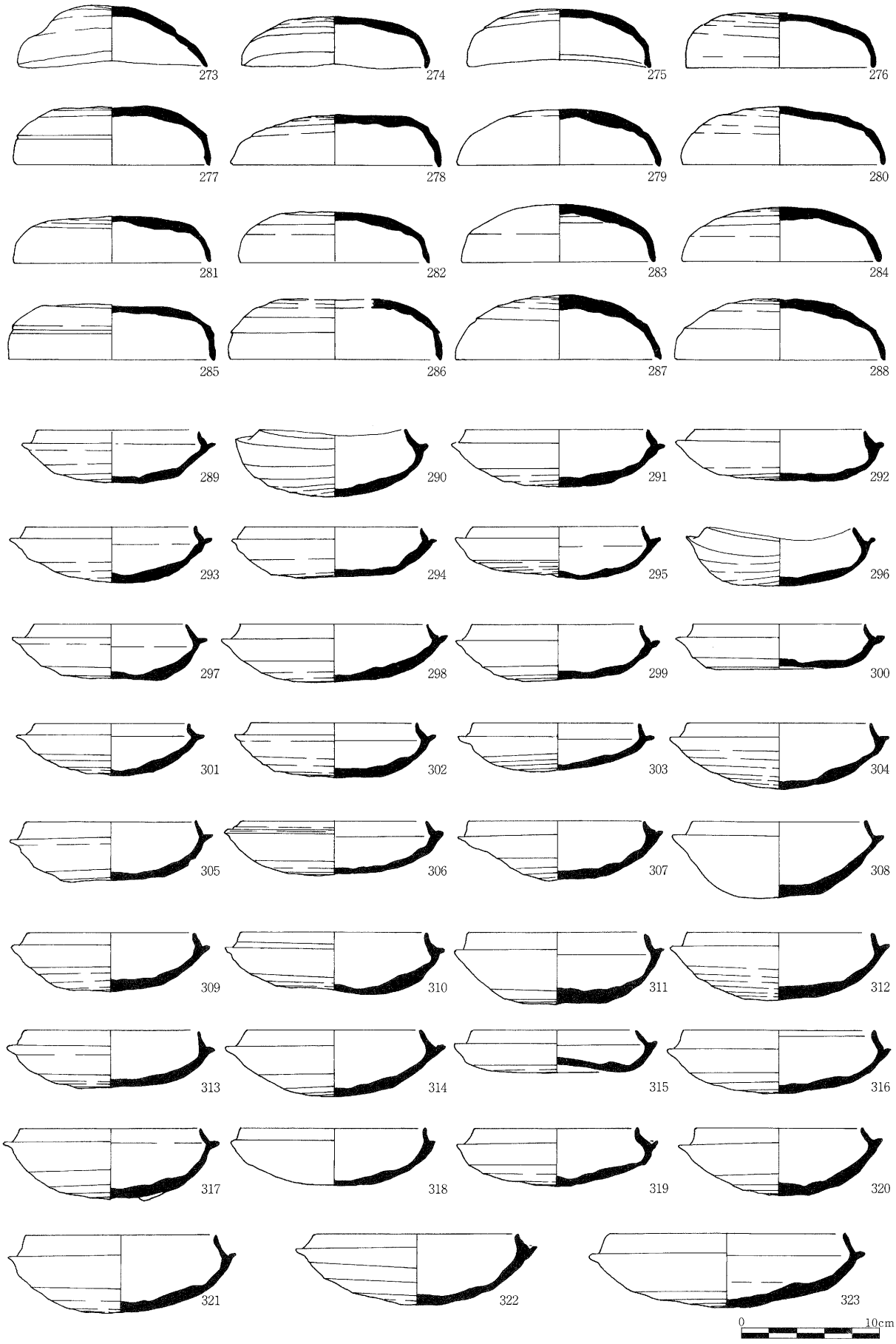


図42　２区出土須恵器（１）

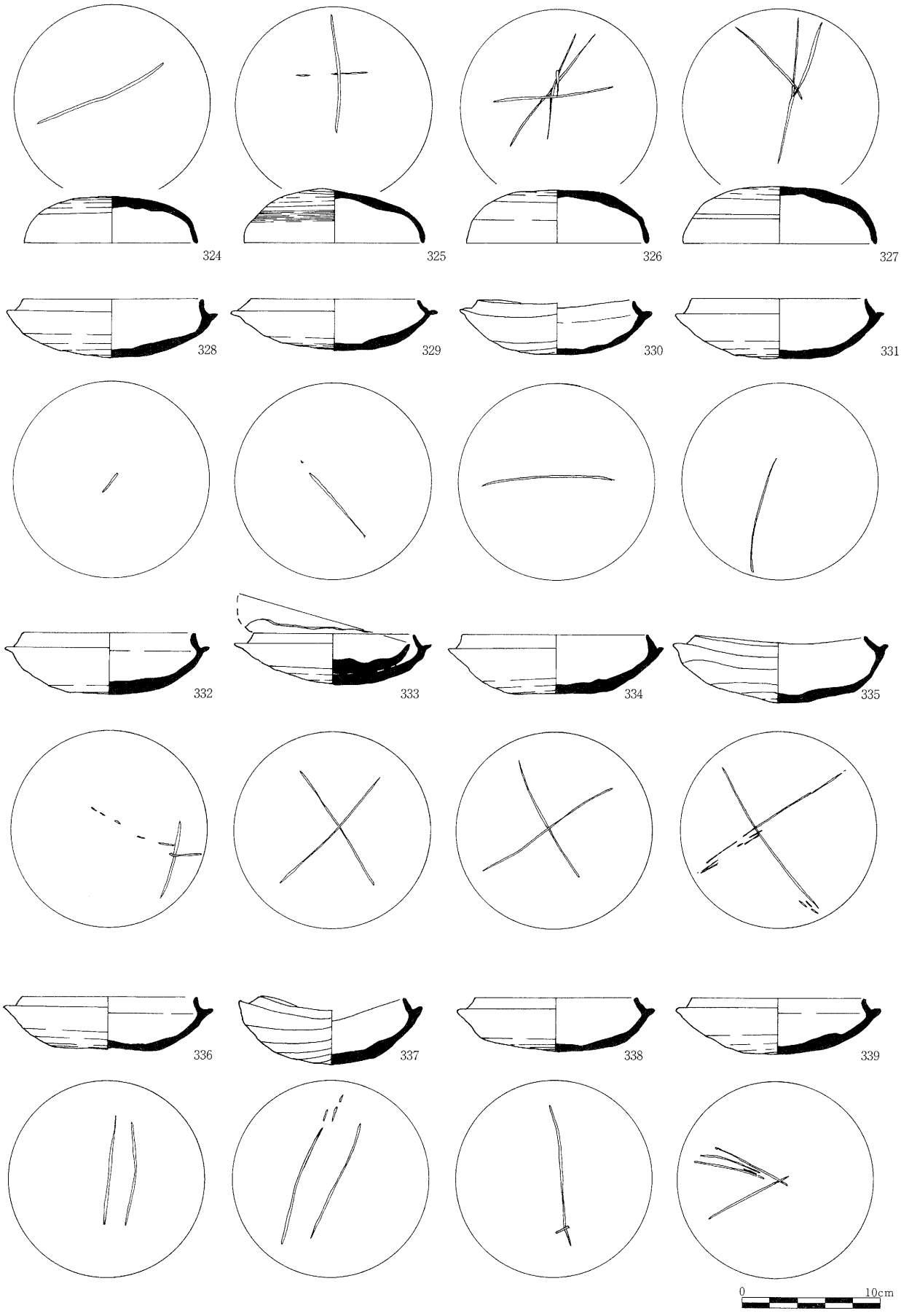


図43　2区出土須恵器（2）

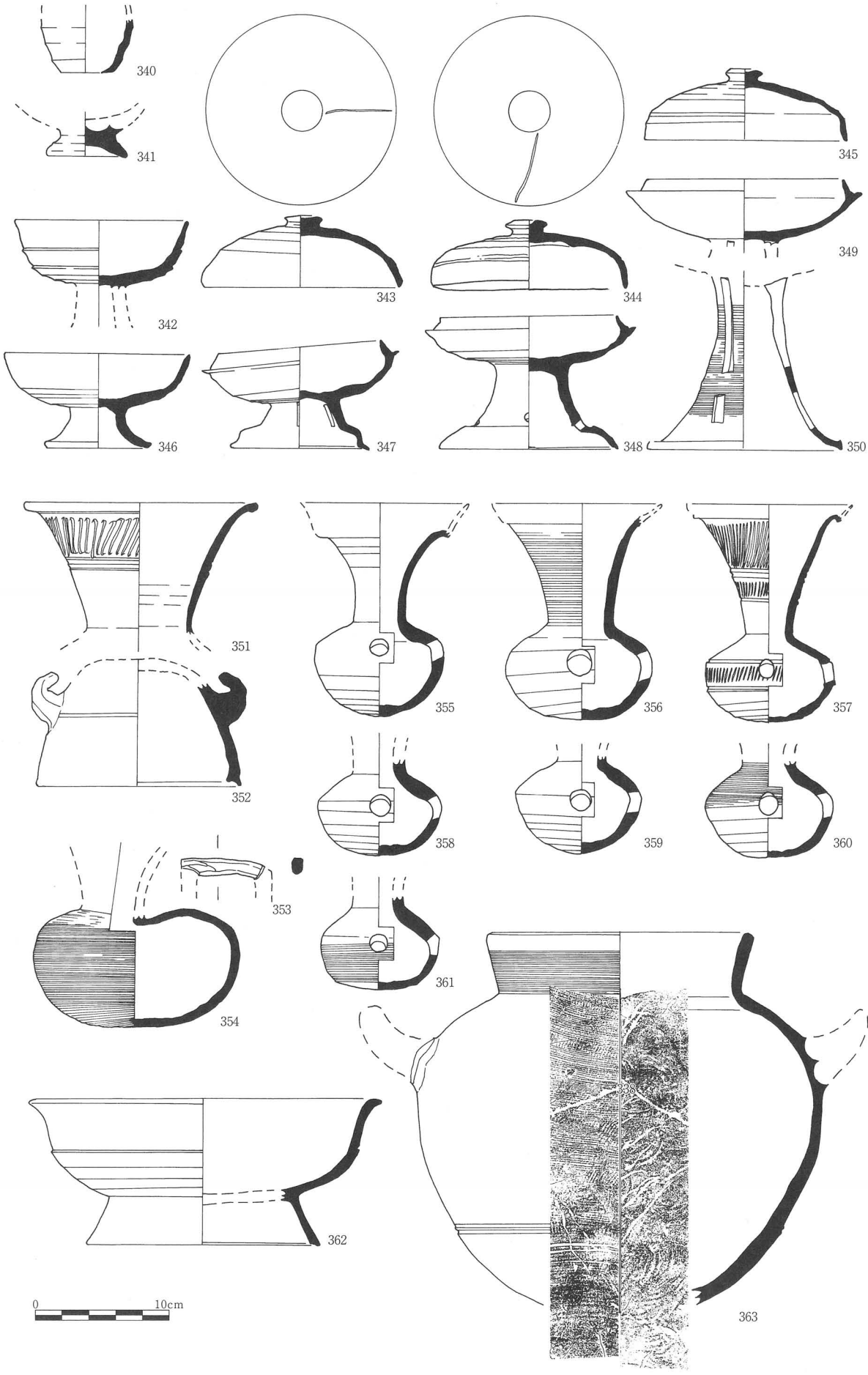


図44　2区出土須恵器（3）

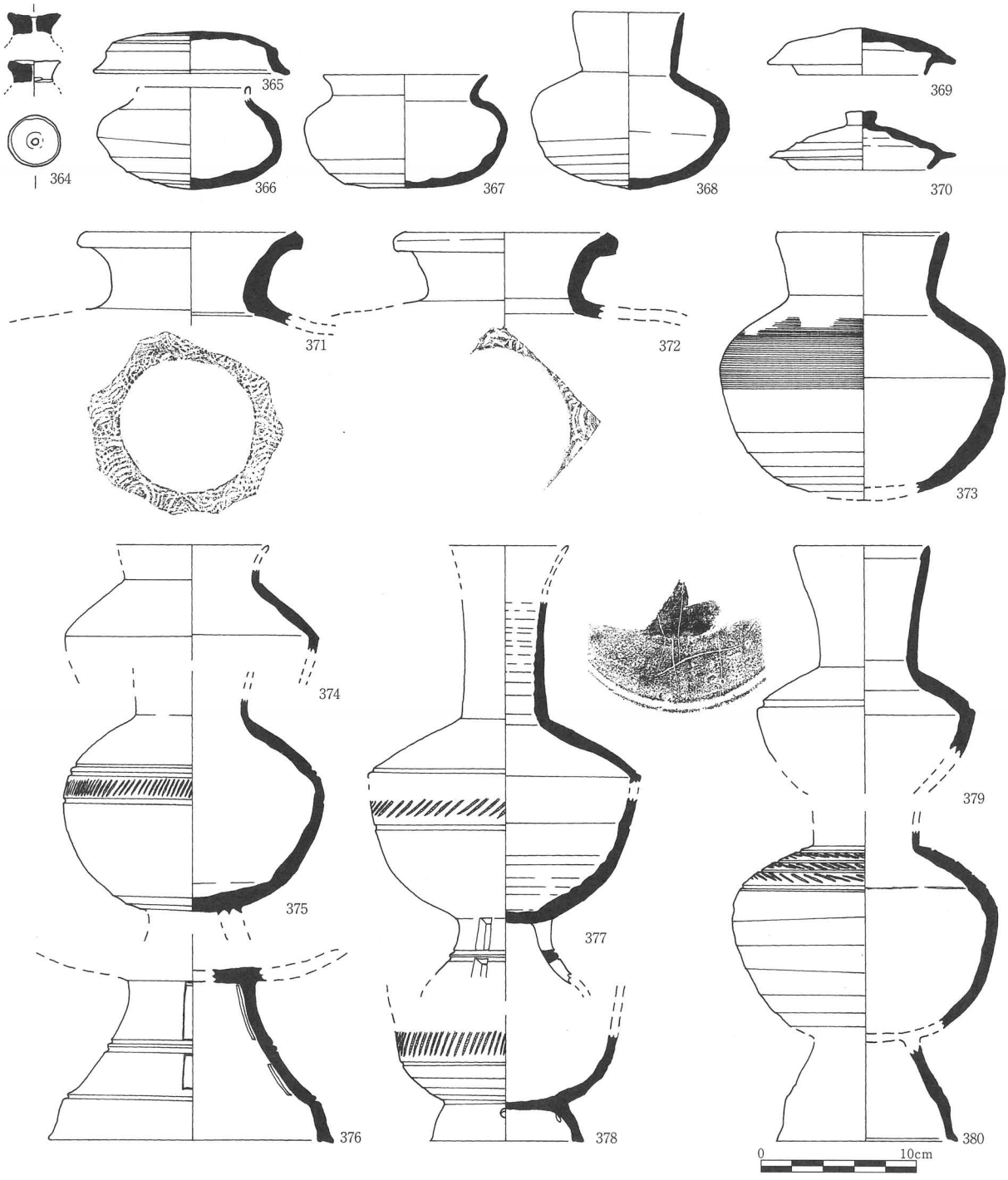


図45　2区出土須恵器（4）

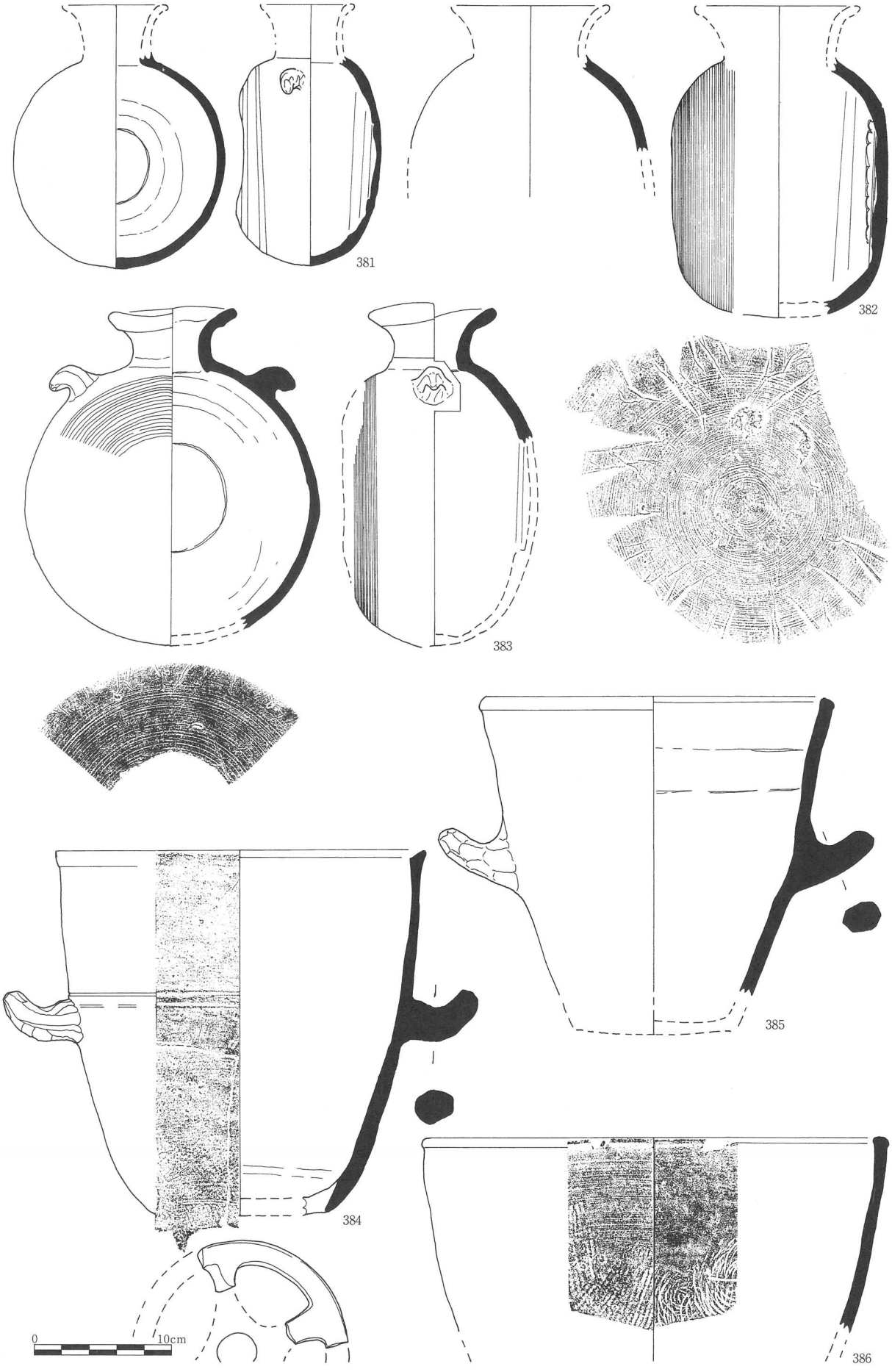


図46　2区出土須恵器（5）

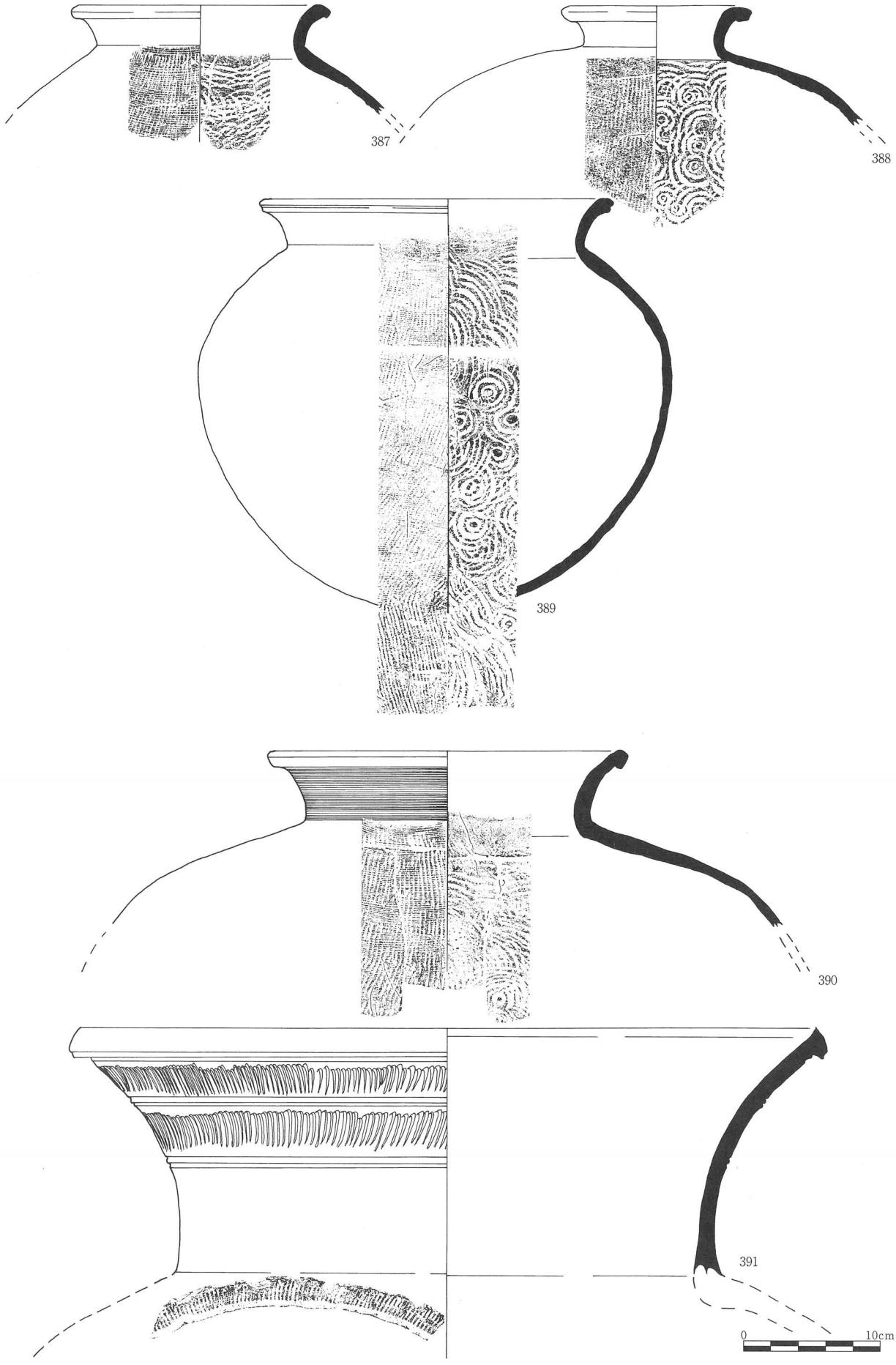


図47　2区出土須恵器（6）

d．古墳時代後期の遺物（３～８区）

３～８区出土遺物も六世紀後半の須恵器が大半で、少量の土師器がある。須恵器は杯・高杯が大半で、鉢・壷・器台・コシキ・甕などがある（図48～50）。

８区は１・２区同様に溝などからまとまった出土が見られた。その一方、３～７区は削平によって土器は小片となって、水田床土に含まれていた。７区は長脚二段透かし高杯の出土が目立つ。

須恵器杯蓋（392）～（395）・(466)～(475)は口径11.2～16.2cm、高さ3.6～4.1cmである。焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁端部は丸く仕上げるもの、やや尖らせるものがある。外面は屈曲が明快で沈線を施すもの、なだらかに丸く仕上げるものがある。天上部はどれも丁寧に回転ヘラ削りを施す（図48・50）。

杯身（396）～（411）・(476)～(495)・(499)は口径8.8～16.4cm、高さ2.7～5.3cmである。これらも焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁部は内傾するものが大半で、湾曲して端部のみ直立するもの、短く直立気味のものもある。口縁端部は、丸く仕上げるもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面はなだらかに丸く仕上げ、天上部は丁寧に回転ヘラ削りを施す（図48・50）。

高杯は長脚二段透かしのものと低脚で一段透かし、あるいは透かし穴をもたないものがある(412)～(434)・(500)～(502)。長脚の高杯は有蓋と無蓋がある。二段の透かし穴があり、下の段は上の段の半分ほどの長さのもの、ほぼ同じ長さのものがある。

低脚の高杯にも有蓋と無蓋があり、両者とも蓋杯を転用したつくりである。透かし穴は長方形で三方向のものと四方向のもの、穴を開けるものなどがある。脚端部は平たく仕上げるものと尖らせて接地させるものがある（図47・50）。

ハソウは頸部に段を設け、ラッパ状に開く。体部は小さくほぼ球形にし、底部を丸く削りだす(442)～(444)。頸部外面を波状紋や刺突紋の加飾を伴うものがある（図49）。

壷は長頸と短頸がある。長頸壷はラッパ状の頸部で(445)・(446)、体部に加飾するものもある(447)。短頸壷は扁平の体部で底部を丸く仕上げる(448)～(450)・(503)。短頸壷の小型は口径6.4cm、高さ4.1cmとなる(451)（図49・50）。

器台は脚外面をハケメ調整し、方形透かしを三方向にあける(463)～(465)（図49）。

提瓶は口縁部を直立気味に尖らせる(437)～(441)（図49）。

こね鉢は体部中央に沈線があり、底部を厚く平らにする（504）。この器種の小型品と考える口径8.1cm高さ4.4cmと(497)、口径10cm高さ5.7cmのラッパ状に開く鉢がある（435）（図49・50）。

甕は頸部が小さく、口縁端部を折り返して下方向に屈曲するもの、丸く仕上げるものなどがある(452)～(462)・(505)。大半は体部外面に格子目タタキを、内面に青海波紋のタタキ目を残す。頸部と体部外面上半をたたいた後、カキ目仕上げするものもある（図49・50）。

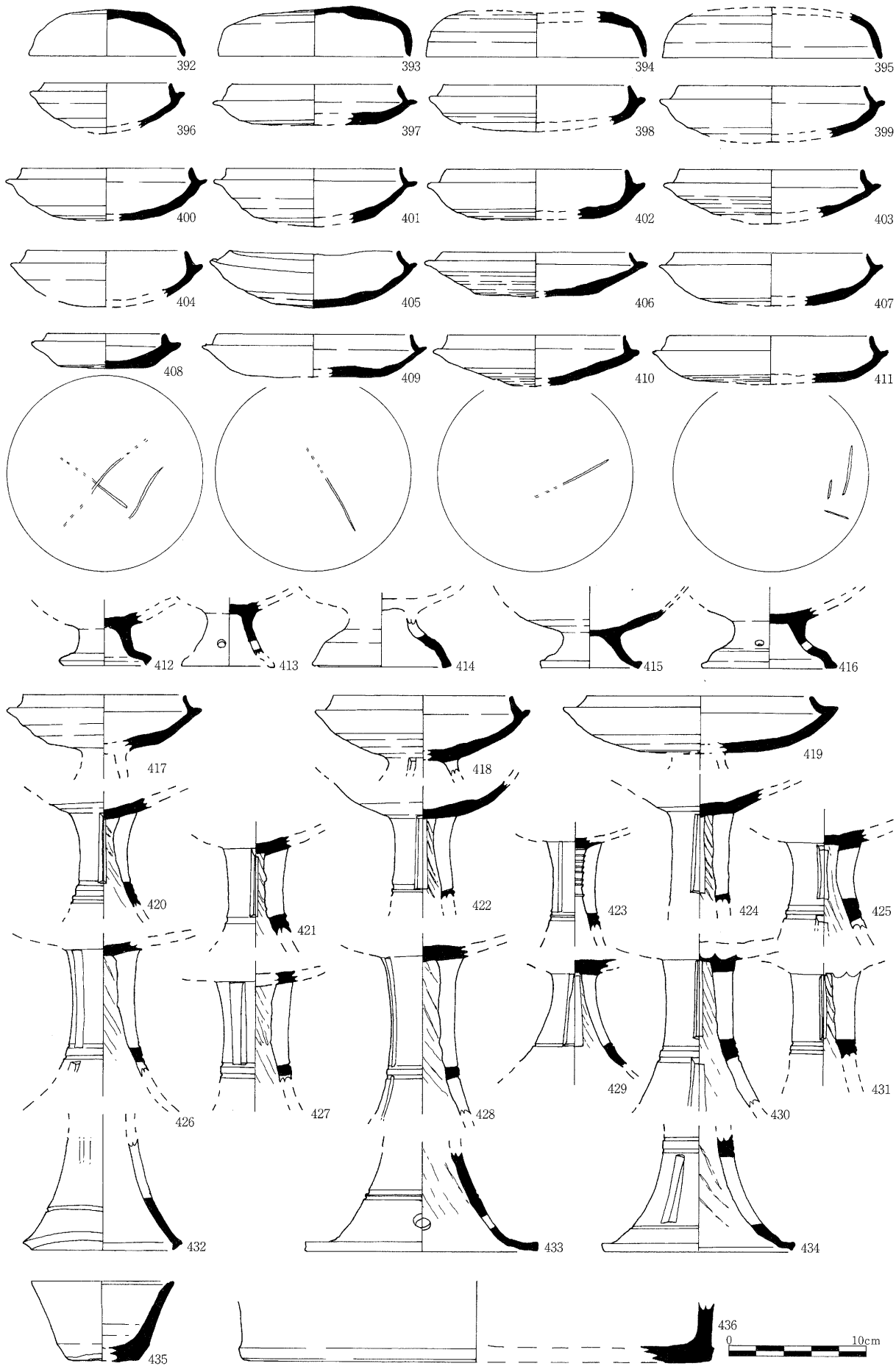


図48　4～7区出土須恵器（1）

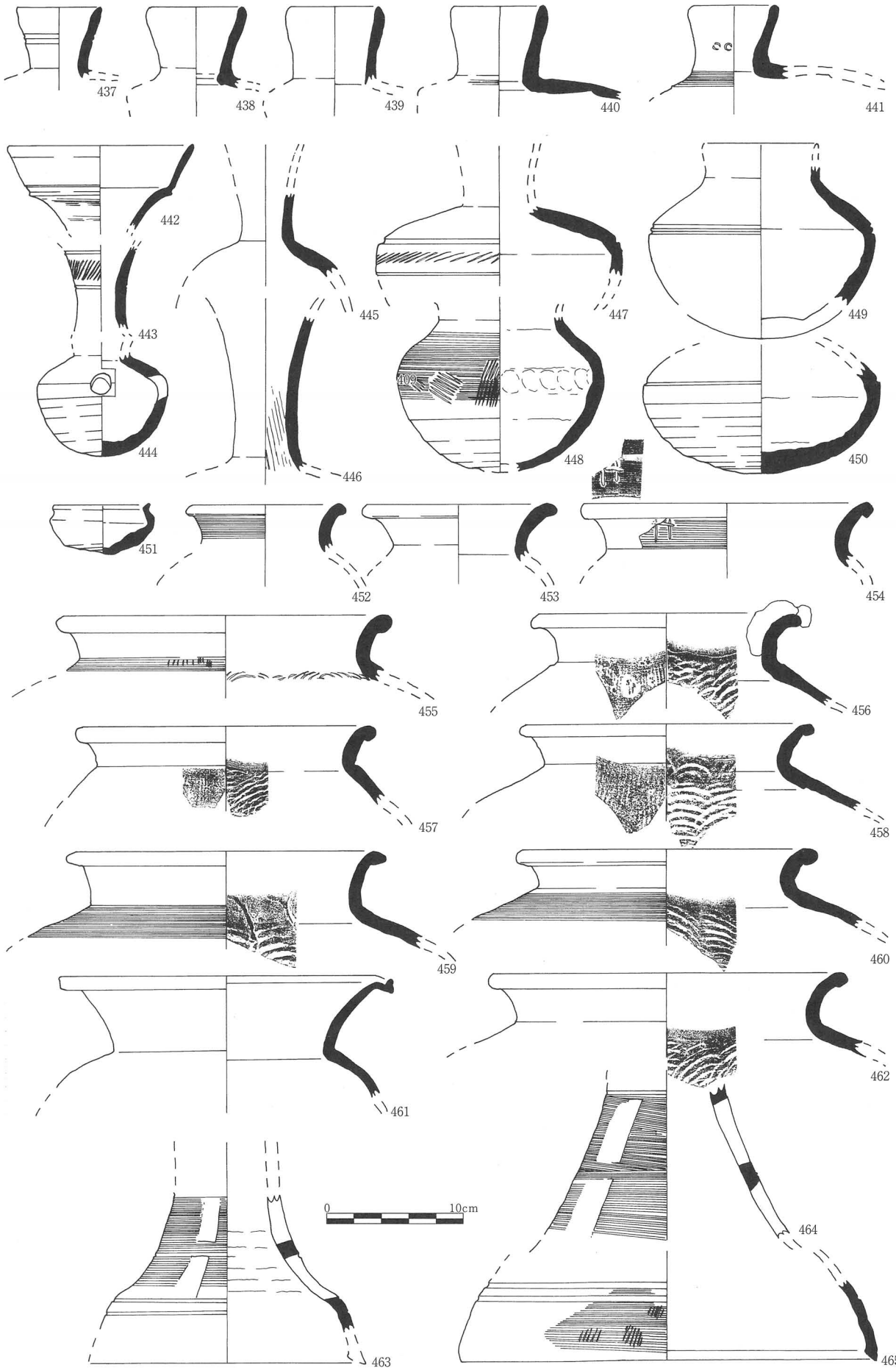


図49　4～7区出土須恵器（2）

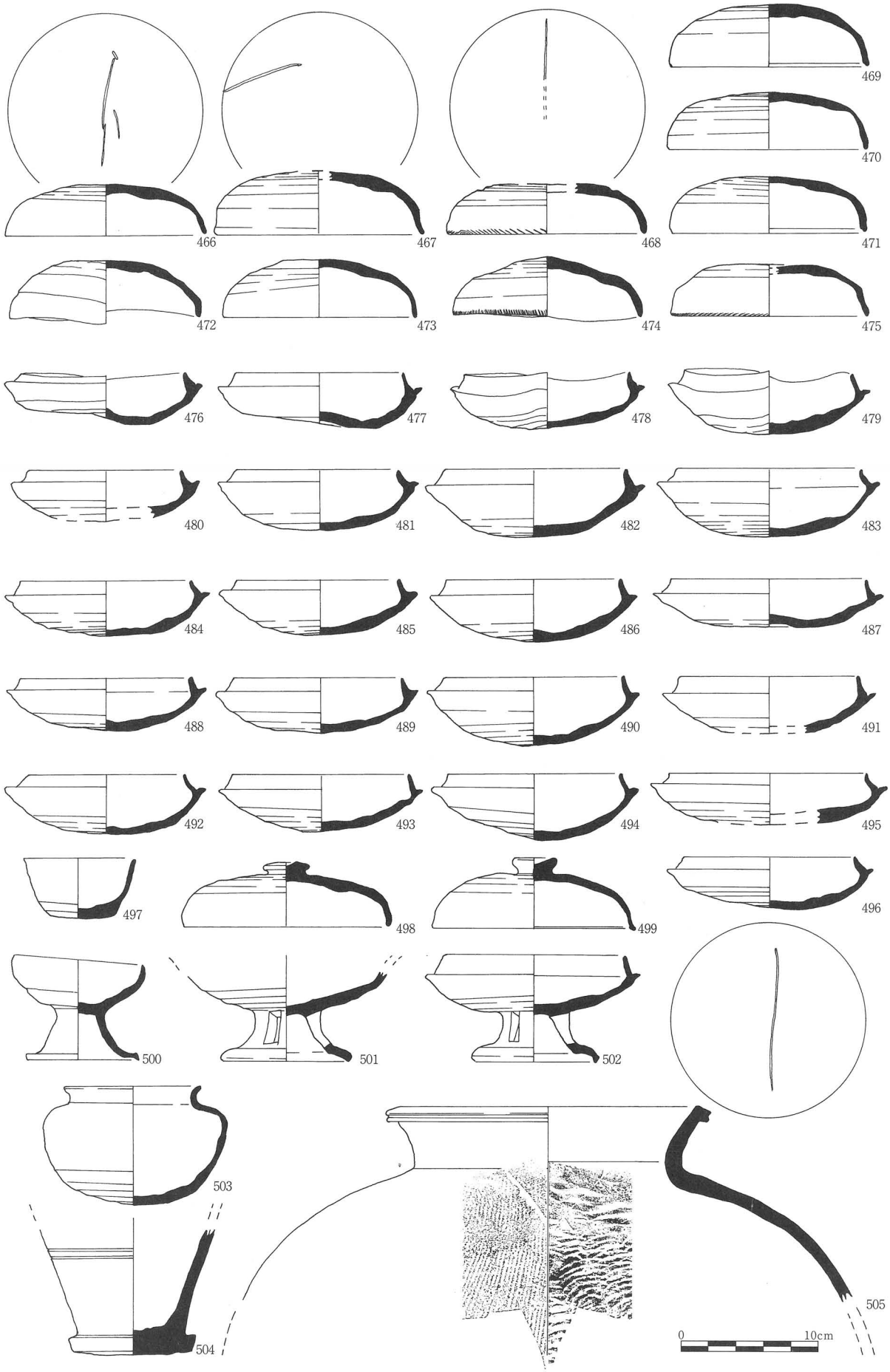

466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
0
10cm

図50　8区出土須恵器

e．古代の遺物（１～８区）

奈良時代の須恵器蓋杯(４)～(６)が５区と７区から、平安時代の碗・壷が１c区・６区・７区から発見されている(７)～(11)。いずれも同時期の遺構に伴うものではない。奈良時代の遺構・遺物は92年度調査や03年度調査で数多く発見されており、この頃まで陶器山地区では古墳時代以来の生産体制が続いていたようだ。平安時代の遺物は02年度調査や98年度調査で少量発見さるにとどまり、陶器山地区での須恵器生産体制の変化は判然としない（図22　図版７）。

杯身は（５）・(６)、ハ字形に開く短い高台をもつ。立ち上がりが明瞭な段となり、奈良時代前期と考える。蓋は厚みが均質で作りも丁寧になることから、奈良時代でも古い段階だろう(４)。碗（７）は、底部に糸切痕をもつ小片である。平安時代前期のものか。

壷は、高台をもつ小片で、底部と体部は厚い(８)～(11)。

f．中世の遺物（１～８区）

鎌倉～室町時代の中国製白磁・青磁、瓦器碗・皿、土師器皿、瓦質・土師質羽釜・甕、東播系すり鉢、瓦などが出土している。出土は１区・６区に集中するが全体量は多くない（図51・52　図版７・８）。

中国製磁器は碗・皿の小片ばかりで、白磁は少ない。青磁碗は青白色で胎土が白く緻密な龍泉窯系のものが少量と、緑褐色で胎土に不純物を含む同安窯系のものに分けられる。青磁碗には口縁端部を外反させ、凌ぎ連弁紋を加飾する龍泉窯系のものがある（519)。いずれも高台は無釉で、見込みは蛇ノ目釉ハギを施す。高台無釉薬で、内面に沈線がめぐるものもある。

青磁皿は、内外面ともに施釉され、見込みに印刻で草花紋をかざる同安窯系のものがある(515)。

瓦器皿は口径8cm程度で、器高は低く口縁部のナデは強い。暗紋はない（507）～（511)。

瓦器碗は口径13cm程度で、高台や暗紋が省略される室町時代にくだるものがある(513)・(514)。

土師器皿は立ち上がりを明瞭に屈曲させるものと、緩やかに傾斜させるものがある（512)。

土師質羽釜は口縁部が内傾し、外面に沈線がめぐる。口縁端部は平らにするものとやや丸みをもたせるものがある。体部内面はハケ調整、外面はヘラ削りを施す(520)～(529)。

東播系すり鉢は口縁部がとがるもの、薄くやや丸く仕上げるものがある(530)～(534)。いずれも口径は24cm程度、瓦質すり鉢は東播系と形態が共通し、内面に密な擂目を入れる（533)。

土師質甕は大小二種類ある。口縁部は直下で折り返す短い頸部となり、外面に粗いタタキ目、内面はハケメ仕上げする。大型の口径は45cm程度、小型の口径は20cm程度である（535）～（537)。

瓦は５～７区から散在して発見された。軒平瓦は二点発見され、外縁が厚く高い唐草紋の同笵瓦である(540)・(541)。軒丸瓦は珠紋を伴わない巴紋である(542)・(543)。

平瓦は厚さ2.5cm程度の厚手の大型品で(546)～(550)、凸面はナデ仕上げされ、凹面は布目が

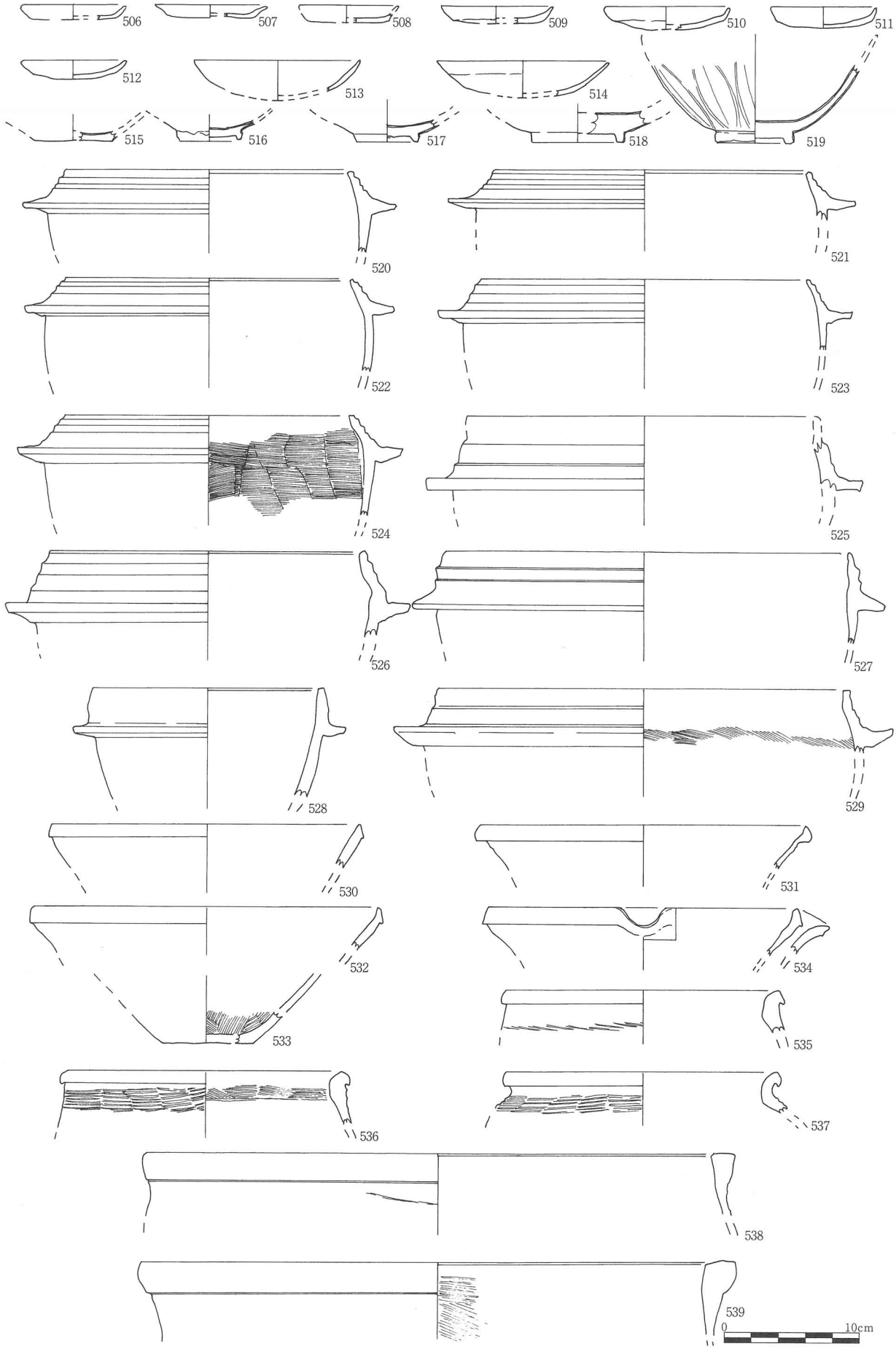

506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
0
10cm

図51　中世の遺物（１）

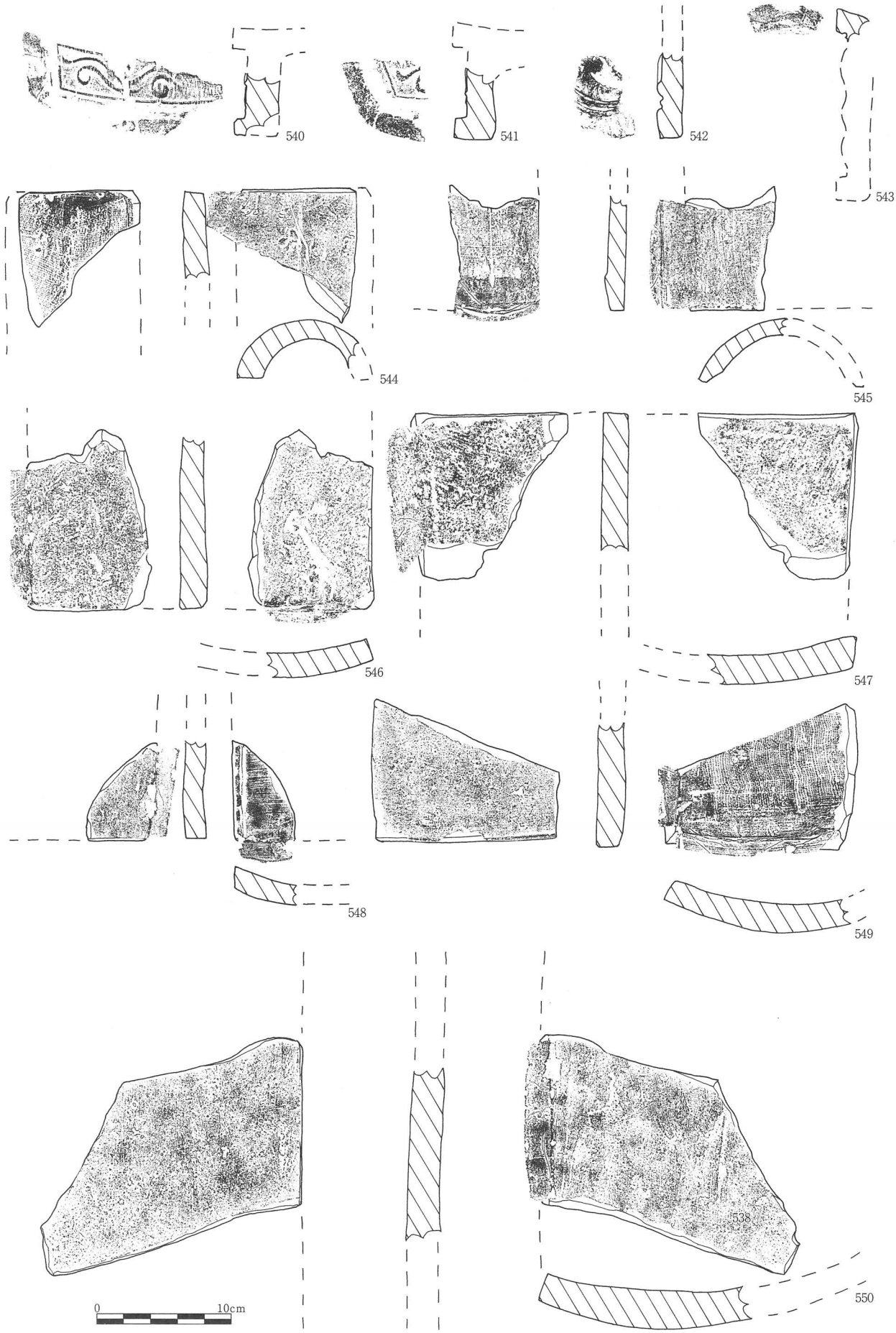


図52　中世の遺物（２）

g．近世の遺物（１～８区）

今回調査区からは中世末以降の遺物もみつかっている。いずれも遺構に伴うものではなく、現代までの水田耕土・床土などに含まれていた。発見遺物は陶磁器と瓦で、中世末から近世末まで一定量がみられる。17世紀前半代は唐津焼が目立ち、陶器藩入植時の動向を示すものだろう。18世紀代は「くらわんか」碗がふえ、19世紀代は肥前磁器に瀬戸・美濃焼磁器・京焼系の陶磁器など様々な産地の遺物が混ざるようになる（図53　図版８）。

中国製磁器は白磁（554）と青花（551）～（553）・（555）・（560）がある。いずれも小片だが、17世紀前半までのものと考える。白磁皿（554）は端反碗で、厚みは薄く0.2cmである。口径12.0cmを測る。青花は皿（551）・（553）と碗（552）・（555）・（560）がある。青花皿（551）は口径12.0cmを測る。内面に二条の線を描く皿（553）は口径12.9cmを測る。小型の青花碗（552）は口縁部が直立気味で口径9.0cmを測る。外面を加飾する碗（555）には唐草紋を刻むもの、見込みに花弁文を刻むもの（560）があり、後者は高台径5.2cmを測る。

国産磁器には肥前磁器（556）～（559）・（561）～（564）・（566）～（569）と瀬戸・美濃焼磁器（565）がある。青磁碗（556）は全体に青磁釉をかけ、畳付けのみ無釉である。一重網目文碗（557）は高台径3.6cmを測る。コンニャク印判文碗（558）・（567）は、（558）が全体に薄手で丁寧なつくりの高台をもつことに対し、厚手の浅い碗もある（567）。「くらわんか」碗と呼ばれるものには（559）・（561）～（562）・（566）～（569）がある。二重網目文碗（559）は高台径3.7cmを測る。また、梅枝文碗（569）は見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。口径10.8cm、器高4.4cm、高台径4.7cmを測り、厚手の浅い碗である。

瀬戸・美濃焼磁器染付碗（565）は腰が張り、口縁部が開く碗である。高台径4.2cmを測る。

国産陶器には唐津焼（570）～（576）・（587）、瀬戸・美濃焼（578）、京焼系（580）・（581）・（582）、丹波焼（579）・（588）、堺焼（585）・（586）がある。唐津焼は皿（570）～（574）、碗（575）～（577）、鉢（587）がみつかっている。皿（570）は見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、内面から外面にかけて透明釉をかける。高台径3.0cmを測る。刷毛目文皿（572）は赤褐色の胎土の上に白泥を刷毛で装飾し、高台畳付け見込みに砂目痕が残る。鉄絵皿（574）は見込みと高台付近に4箇所目痕が残る。高台は削りが浅く、高台径3.8cmを測る。灰釉碗（576）は高台内の削りは浅く、高台径5.2cmを測る。三島手鉢（587）は口縁部を屈曲させ、端部を上方へ引き上げる。口径29.9cmを測る。

瀬戸・美濃焼陶器碗（577）は緑釉を掛け、表面に貫入が入る。付け高台の径は5.8cmを測る。

京焼系陶器は灯火具（580）・（581）を中心に、土鍋、土瓶などがみつかっている。皿形の灰釉灯明皿（581）は内面に櫛掻きがあり、口径11.2cmを測る。内面に返りがある灰釉灯明受皿（580）は外面には重ね焼きの痕跡が残る。口径8.9cmを測る。脚をもつ灰釉有脚灯明皿（582）は脚部の下に皿で油を受ける形である。口縁端部に煤が付着し、上部皿口径6.1cm、下部口径6.5cm

を測る。釉薬はオリーブ色に発色し、形も一般的にみられる京焼系の有脚灯明皿とは異なる。他産地の可能性もある。

丹波焼徳利（579）は外面に鉄釉を掛け、底部は釉薬を拭い、砂が付着する。底径6.8㎝を測る。甕（588）は外面に鉄釉を掛ける。底部は釉薬を拭い、砂が付着する。底径13.6㎝を測る。

堺焼擂鉢（585）の摺目の単位は10本単位で、口径28.6㎝を測る。見込み部分の破片は（586）、摺目がいわゆる「ウールマーク形」である。底径11.2cmを測る。

他に、肥前磁器碗を転用した加工円盤（583）・（584）が二つある。ひとつ（583）は縦3.3㎝、横2.8㎝、ひとつ（584）は縦4.7㎝、横4.7㎝、厚さ0.5㎝を測る。

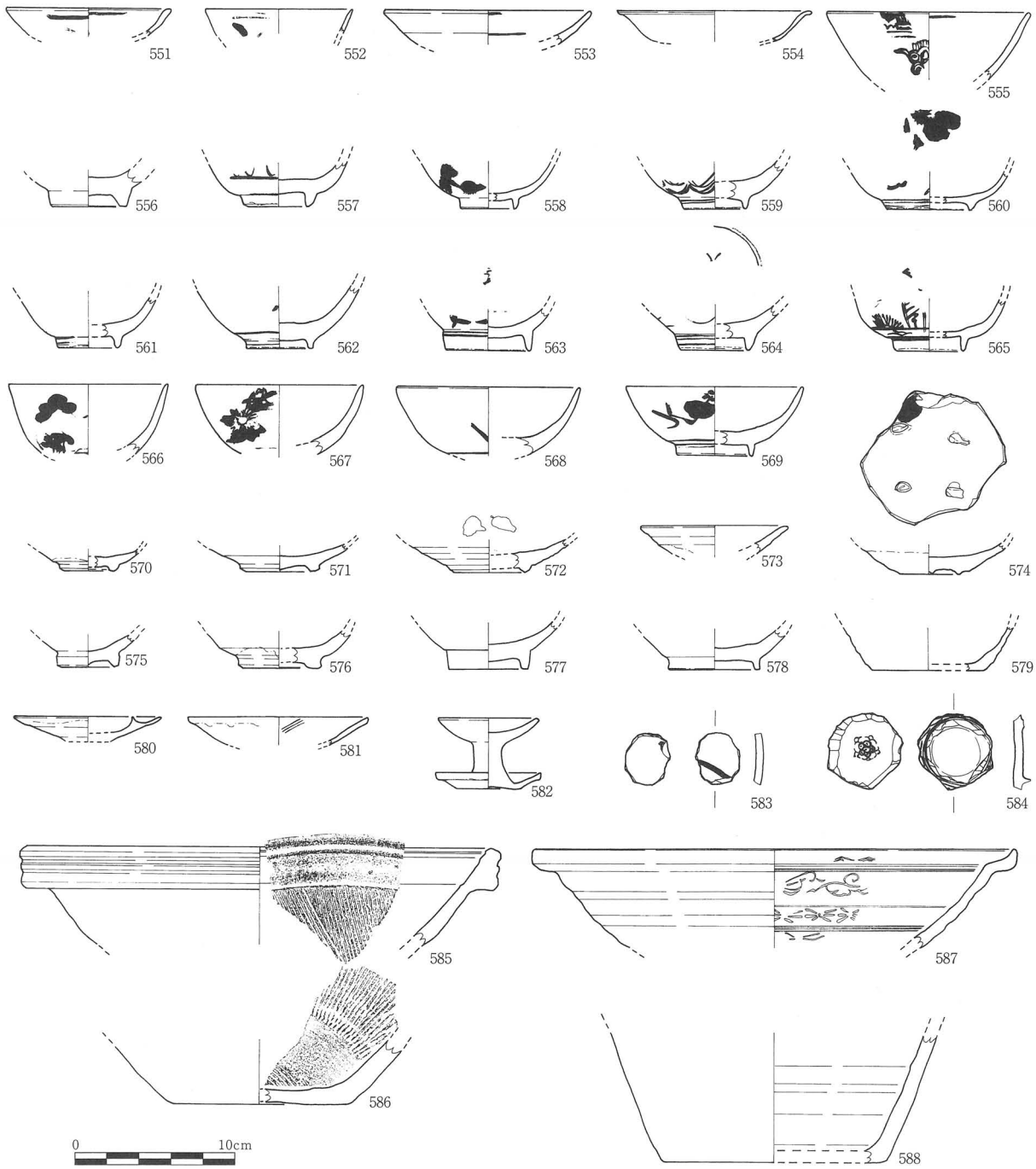


図53　近世の遺物

第Ⅲ章　まとめ

今回調査では１・２区から古墳時代後期の遺物が大量に発見された。これらは生焼けのものや焼ひずみのはなはだしいものが多く含まれており、この集落で備蓄や選別が行われていたと考える。つまり、須恵器工人の集落と須恵器の集積地だろう。器台・大型の高杯・横瓶など、古墳への副葬品やイイダコ壷などの生産用具を含む点も工人集落の特徴をよく示す。

出土須恵器からみる集落の時期は近畿で群集墳がもっとも隆盛する六世紀後半のＭＴ85～ＴＫ43段階である。蓋杯の口縁端部形態など、一つ一つにはその前後段階の特徴を備えるものもふくまれるが、これらは段階内での多様性とかんがえ、時期差を示すかどうか疑わしい。ともすれば、この集落の存続期間を短く見積もることも可能であるが、集落の中心をずらして奈良時代前期まで機能が続いていたと考える。これまでの調査では須恵器が定型化する五世紀後半のＴＫ208～ＴＫ47段階の窯や遺物が知られる。ところが、ＭＴ15段階は知られない。

出土須恵器は土坑や溝から発見されるとともに、上層の水田耕土や床土にも完形に近い形で散乱していたことから、もともと遺構に含まれる形で投棄されていたものか、後世の土地改変で投棄されたものか判然としない。例えば、須恵器生産が行われていたころは余地に山積みされていたものかもしれない。これらが後世の耕作に伴って、溝や土坑に投棄されたかもしれない。

また、蓋杯には焼きひずみがはなはだしいものが多く、もともと大甕や壷などをあな窯の床面に固定するための焼台に転用されていた可能性もある。大甕の底部には杯のあたった痕跡が明瞭に残されているものが目立ち、自然釉のかかり具合から、甕底部に杯が固定されていたことがうかがえる。

その他、金属器を模倣した大型の鉢は見本品を手元においての製作か、それを模倣した木器・漆器のさらなる模倣か興味がもたれる。岡山県王墓山古墳に類例があり、六世紀後半段階という仏教思想などの流入段階に須恵器工人がいち早くこのような大型品の生産を手がけていたことは、渡来人などの影響も看取できる。以上の生産体制は、陶器遺跡周辺では奈良時代前期まで続けられ、律令体制への移行期に画期が見出せないことも重要だろう。

平安時代以降、須恵器生産後の土地利用は耕地化が徐々に進んだと考える。０３年度調査区や今回調査の６区で発見された方形区画の屋敷地は中世後半に有力者の台頭がうかがえる。これらの地元勢力は近世の陶器藩にどのように吸収されていくのか興味がもたれる。いずれも、近世前期以降の遺物が少なく、示唆的である。

文献史料によると、江戸時代前期に陶器藩による該当地域の新田開発が進んだことが知られる。新たな入植者は福田村などをつくったといわれる。陶器遺跡の現在の水田畦畔には江戸時代前期の唐津焼・肥前磁器などが含まれ、史料に合致する。また、江戸時代後期から末にかけての陶磁器がみられる部分もある。第二段階の水田開発か裏作の充実を考えるか、人口増加・生活向上などを示すものと思われる。

図番号	実測番号	地区	遺構・土層	器種	残存率
1	36	1a	溝1-53下層	陶棺	5
2	29	1a	溝1-53下層	陶棺	5
3	546	6	地山直上	杯身	5
4	457	5	溝5-1	杯蓋	5
5	554	7	灰褐土	杯身	5
6	550	7	灰褐土	杯身	5
7	482	6	灰褐土	碗	5
8	376	1c	溝1-1上面	碗	5
9	559	7	灰褐土	碗	5
10	553	7	灰褐土	壷	5
11	377	1c	溝1-2上面	壷	5
12	339	1c	灰褐土	ナイフ形石器	1
13	397	1c	地山直上	打製石鏃	1
14	340	2	灰褐土	打製石鏃	1
15	269	1c	溝1-53下層	砥石	1
16	313	2	地山直上	土師器小壷	4
17	312	2	地山直上	土師器小壷	4
18	80	1a	溝1-53下層	土師器小壷	4
19	79	1a	溝1-51	土師器小壷	4
20	110	2	地山直上	土師器小壷	4
21	262	2	溝2-1	土師器小壷	4
22	32	1a	溝1-59	乾燥台	5
23	108	2	土坑2-6上面	乾燥台	5
24	30	1c	溝1-5	乾燥台	2
25	105	2	地山直上	乾燥台	2
26	24	1a	溝1-59	乾燥台	2
27	276	2	溝2-6	乾燥台	5
28	107	2	溝2-5	乾燥台	5
29	216	2	溝2-1	乾燥台	2
30	106	2	地山直上	乾燥台	2
31	31	1a	溝1-59	乾燥台	2
32	318	2	地山直上	乾燥台	5
33	86	1a	溝1-53下層	杯蓋	2
34	97	1a	溝1-59	杯蓋	2
35	278	1c	溝1-11	杯蓋	2
36	88	1a	溝1-53下層	杯蓋	2
37	98	1a	溝1-59	杯蓋	3
38	253	1a	溝1-59	杯蓋	2
39	95	1a	溝1-53	杯蓋	1
40	257	1c	溝1-12	杯蓋	1
41	254	1a	溝1-59	杯蓋	1
42	96	1a	溝1-53下層	杯蓋	2
43	99	1a	溝1-59	杯蓋	2
44	256	1c	溝1-16	杯蓋	1
45	252	1a	溝1-59	杯蓋	2
46	82	1a	穴1-85	杯蓋	2
47	255	1d	溝1-12	杯蓋	1
48	277	1d	溝1-12	杯蓋	2
49	207	1c	溝1-12	杯身	1
50	206	1a	溝1-59	杯身	2
51	41	1c	溝1-51上面	杯身	2
52	202	1a	溝1-59	杯身	2
53	288	1a	溝1-59	杯身	1
54	21	1c	灰褐土	杯身	1
55	58	1d	溝1-12	杯身	2
56	292	1c	溝1-12	杯身	1
57	356	1c	大土坑1-1	杯身	1
58	37	1a	溝1-59	杯身	1
59	350	1a	溝1-59	杯身	1
60	55	1a	溝1-53下層	杯身	1
61	17	1a	溝1-51	杯身	1
62	43	1d	溝1-12	杯身	1
63	301	1a	溝1-53下層	杯身	2
64	293	1c	溝1-1上面	杯身	2
65	18	1c	灰褐土	杯身	2
66	62	1a	溝1-59	杯身	2
67	57	1c	溝1-1	杯身	2
68	22	1c	溝1-16	杯身	1
69	295	1c	大土坑1-2上面	杯身	1
70	300	1a	溝1-53下層	杯身	1
71	289	1a	灰褐土	杯身	1
72	51	1c	土坑1-8	杯身	1
73	388	1c	溝1-17	杯身	1
74	48	1c	溝1-16	杯身	1
75	47	1c	地山直上	杯身	1
76	50	1c	土坑1-8	杯身	1
77	199	1a	溝1-59	杯身	2
78	59	1d	溝1-12	杯身	2
79	296	1c	大土坑1-2	杯身	1
80	53	1a	溝1-53下層	杯身	1
81	49	1a	溝1-59	杯身	1
82	60	1a	溝1-51上面	杯身	1
83	291	1c	土坑1-8上面	杯身	1
84	61	1a	溝1-59	杯身	2
85	297	1a	溝1-51	杯身	1
86	56	1a	溝1-59	杯身	1
87	203	1a	溝1-59	杯身	2
88	166	1c	土坑1-8	杯蓋	2
89	186	1a	溝1-59	杯蓋	1
90	179	1a	地山直上	杯蓋	2
91	174	1c	溝1-2上面	杯蓋	2
92	175	1a	溝1-59上面	杯蓋	1
93	100	1a	溝1-59	杯蓋	2
94	171	1c	溝1-6	杯蓋	2
95	178	1c	土坑1-8	杯蓋	1
96	184	1a	溝1-59	杯蓋	1
97	180	1a	大土坑1-1	杯蓋	1
98	165	1c	土坑1-8	杯蓋	2
99	169	1d	溝1-12	杯蓋	2
100	104	1a	溝1-51上面	杯蓋	1
101	168	1c	溝1-6	杯蓋	2
102	176	1c	溝1-14	杯蓋	1
103	170	1c	大土坑1-1	杯蓋	5
104	185	1a	溝1-59	杯蓋	2
105	164	1c	土坑1-8	杯蓋	2
106	177	1c	溝1-5	杯蓋	2
107	172	1c	溝1-1	杯蓋	2
108	308	1c	溝1-6	杯身	2
109	387	1c	溝1-2上面	杯身	1
110	386	1d	溝1-12	杯身	1
111	390	1c	土坑1-8	杯身	1
112	353	1a	溝1-59	杯身	1
113	303	1c	大土坑1-1	杯身	1
114	309	1c	溝1-6	杯身	2
115	391	1c	大土坑1-2	杯身	1
116	351	1a	溝1-59	杯身	1
117	348	1a	溝1-59	杯身	2
118	352	1a	溝1-59	杯身	2
119	198	1a	溝1-59	杯身	2
120	305	1c	溝1-6	杯身	2
121	389	1c	溝1-2上面	杯身	1
122	384	1a	溝1-59	杯身	1
123	302	1a	溝1-53下層	杯身	2
124	354	1a	溝1-59	杯身	1
125	306	1c	溝1-6	杯身	2
126	307	1c	溝1-6	杯身	2
127	355	1c	溝1-14	杯身	1
128	103	1a	溝1-59	杯蓋	2
129	81	1a	溝1-50上面	杯蓋	2
130	89	1a	溝1-53下層	杯蓋	1
131	249	1a	溝1-53下層	杯蓋	1
132	85	1a	溝1-53下層	杯蓋	2
133	250	1a	溝1-59	杯蓋	2
134	87	1a	溝1-53下層	杯蓋	2
135	83	1a	溝1-53下層	杯蓋	2
136	20	1c	溝1-6上面	杯身	1
137	304	1c	大土坑1-1	杯身	1
138	16	1a	溝1-59	杯身	1
139	19	1a	溝1-59	杯身	2
140	287	1b	溝1-51	杯身	1
141	208	1c	溝1-5	杯身	1
142	44	1c	溝1-2	杯身	1
143	42	1c	溝1-2	杯身	2
144	299	1a	溝1-53下層	杯身	1
145	14	1a	溝1-59	杯身	1
146	40	1c	大土坑1-1	杯身	2
147	63	1a	溝1-59	杯身	2
148	54	1a	溝1-53	杯身	2
149	39	1c	溝1-6	杯身	1
150	15	1c	溝1-1	杯身	1
151	385	1a	溝1-59	杯身	1
152	173	1c	溝1-1	高杯蓋	2
153	183	1a	溝1-59	高杯蓋	2
154	182	1a	溝1-59	高杯蓋	2
155	150	1a	溝1-59	高杯蓋	2
156	167	1c	溝1-6	高杯蓋	4
157	294	1c	灰褐土	有蓋高杯	4
158	151	1a	溝1-59	有蓋高杯	5
159	233	1a	溝1-59	有蓋高杯	4
160	234	1c	溝1-6	有蓋高杯	1
161	231	1c	溝1-6	有蓋高杯？	4
162	148	1a	溝1-59	有蓋高杯？	4
163	35	1a	溝1-53下層	無蓋高杯	5
164	232	1c	溝1-1	有蓋高杯	2
165	149	1a	溝1-59	有蓋高杯	1
166	576	1a	溝1-59	無蓋高杯	5
167	102	1c	溝1-12上面	無蓋高杯	4
168	235	1c	大土坑1-2	無蓋高杯	4
169	146	1b	溝1-59	無蓋高杯	4
170	147	1b	溝1-59	無蓋高杯	4
171	120	1c	土坑1-51	無蓋高杯	2
172	381	1c	溝1-14	無蓋高杯	2
173	128	1a	溝1-59	無蓋高杯	2
174	383	1c	溝1-17	無蓋高杯	2
175	129	1a	溝1-59	無蓋高杯	2
176	126	1a	溝1-59	無蓋高杯	2

図番号	実測番号	地区	遺構・土層	器種	残存率
177	121	1c	溝1-59	無蓋高杯	4
178	132	1c	溝1-4上面	無蓋高杯	4
179	101	1a	大土坑1-1	無蓋高杯	4
180	117	1a	溝1-59	無蓋高杯	4
181	118	1c	溝1-59	無蓋高杯	5
182	122	1c	溝1-2	無蓋高杯	4
183	124	1c	溝1-2	無蓋高杯	4
184	382	1d	溝1-6	無蓋高杯	5
185	125	1c	灰褐土	無蓋高杯	5
186	127	1c	溝1-6	無蓋高杯	5
187	123	1c	大土坑1-2	有蓋高杯	4
188	119	1c	溝1-6	有蓋高杯	2
189	131	1a	大土坑1-2	有蓋高杯	1
190	130	1a	溝1-59	有蓋高杯	2
191	5	1c	溝1-59	有蓋高杯	2
192	6	1a	大土坑1-2	有蓋高杯	2
193	237	1c	溝1-53	こね鉢	5
194	240	1c	溝1-2	こね鉢	5
195	26	1a	溝1-2	イイダコ壷	1
196	239	1c	溝1-53	こね鉢	5
197	76	1c	溝1-2	小壷	2
198	23	1a	溝1-16	鉢	2
199	236	1c	溝1-53	こね鉢	2
200	238	1c	溝1-2	こね鉢	5
201	70	1c	溝1-2	こね鉢	4
202	69	1c	大土坑1-2	こね鉢	2
203	192	1c	溝1-1	ハソウ	4
204	1	1a	溝1-6	ハソウ	4
205	189	1c	溝1-50	ハソウ	2
206	193	1c	溝1-1	ハソウ	2
207	3	1c	溝1-6	ハソウ	4
208	72	1d	溝1-6	ハソウ	5
209	196	1c	溝1-12	ハソウ	4
210	197	1a	大土坑1-2	ハソウ	1
211	190	1a	灰褐土	ハソウ	2
212	4	1a	溝1-57	ハソウ	4
213	194	1c	灰褐土	ハソウ	4
214	187	1a	溝1-6	ハソウ	1
215	191	1c	溝1-53	ハソウ	2
216	188	1a	溝1-6	ハソウ	4
217	2	1c	溝1-53	ハソウ	5
218	113	1d	溝1-2	長頸壷	5
219	77	1c	溝1-12	漏斗形製品	2
220	45	1b	大土坑1-1	把手付甕	2
221	74	1d	溝1-12	短頸壷蓋	5
222	28	1a	溝1-12	短頸壷蓋	2
223	27	1a	溝1-59	短頸壷蓋	2
224	75	1d	溝1-59	短頸壷蓋	4
225	92	1a	溝1-12	短頸壷	1
226	93	1c	溝1-59	短頸壷	4
227	90	1c	大土坑1-1	短頸壷	1
228	91	1a	大土坑1-2	短頸壷	1
229	181	1c	溝1-59	長頸壷蓋	1
230	251	1a	灰褐土	長頸壷蓋	1
231	78	1c	溝1-59	台付長頸壷	4
232	25	1c	溝1-11・12	台付鉢	2
233	94	1a	溝1-2	台付短頸壷	4
234	33	1a	溝1-59	台付鉢	5
235	12.13	1c	溝1-57	器台	2
236	10	1c	大土坑1-2	器台	5
237	67	1c	大土坑1-1	器台	2
238	64	1d	溝1-1	器台	5
239	577	1a	溝1-12	器台	5
240	65	1d	溝1-59	器台	5
241	11	1c	溝1-12	器台	4
242	116	1a	溝1-2上面	器台	3
243	114	1d	溝1-51	器台	4
244	115	1d	溝1-12	器台	4
245	8	1c	溝1-12	提瓶	5
246	71	1d	大土坑1-1	提瓶	5
247	9	1a	溝1-12	提瓶	5
248	575	1a	溝1-53下層	提瓶	5
249	7	1a	溝1-59	提瓶	5
250	66	1c	溝1-53下層	横瓶	1
251	268	1c	溝1-6	横瓶	4
252	243	1c	土坑1-8	横瓶	2
253	68	1c	溝1-2上面	横瓶	2
254	244	1c	溝1-6	横瓶	2
255	242	1a	溝1-1上面	横瓶	2
256	34	1c	溝1-59	甕蓋	1
257	547	1a	溝1-6	甕蓋	5
258	267	1d	灰褐土	甕蓋	2
259	258	1c	溝1-12	甕	5
260	286	1c	灰褐土	甕	4
261	46	1a	大土坑1-1上面	甕	4
262	241	1a	溝1-59	甕	5
263	283	1c	溝1-59	甕	4
264	112	1a	溝1-2上面	甕	5

図番号	実測番号	地区	遺構・土層	器種	残存率
265	152	1c	溝1-1上面	甕	4
266	266	1c	溝1-5	甕	4
267	245	1c	溝1-4	甕	2
268	145	1a	溝1-59	甕	4
269	143	1a	溝1-59	甕	4
270	144	1a	溝1-59	甕	4
271	280	1c	大土坑1-1	甕	4
272	246	1c	溝1-1	甕	2
273	335	2	溝2-1上面	杯蓋	1
274	154	2	土坑2-6上面	杯蓋	1
275	336	2	溝2-1上面	杯蓋	1
276	209	2	溝2-5	杯蓋	1
277	156	2	土坑2-5	杯蓋	1
278	333	2	溝2-1上面	杯蓋	1
279	334	2	溝2-1上面	杯蓋	2
280	396	2	溝2-4	杯蓋	1
281	394	2	地山直上	杯蓋	2
282	424	2	溝2-1上面	杯蓋	2
283	212	2	溝2-6	杯蓋	1
284	157	2	土坑2-9	杯蓋	1
285	395	2	溝2-5	杯蓋	2
286	413	2	地山直上	杯蓋	5
287	578	2	溝2-1上面	杯蓋	4
288	579	2	溝2-1上面	杯蓋	4
289	346	2	溝2-6	杯身	1
290	228	2	溝2-7	杯身	1
291	222	2	溝2-1	杯身	1
292	580	2	溝2-1上面	杯身	4
293	224	2	溝2-1	杯身	1
294	272	2	溝2-5	杯身	1
295	345	2	溝2-7	杯身	1
296	330	2	土坑2-9	杯身	1
297	342	2	溝2-6	杯身	1
298	402	2	溝2-5	杯身	1
299	401	2	溝2-4	杯身	1
300	403	2	溝2-5	杯身	1
301	328	2	土坑2-4	杯身	1
302	325	2	土坑2-2上面	杯身	1
303	230	2	溝2-7	杯身	1
304	323	2	土坑2-2上面	杯身	1
305	271	2	溝2-5	杯身	1
306	324	2	土坑2-2上面	杯身	1
307	223	2	溝2-1上面	杯身	1
308	326	2	土坑2-2上面	杯身	1
309	329	2	土坑2-6上面	杯身	1
310	227	2	溝2-6	杯身	1
311	226	2	溝2-5	杯身	1
312	343	2	溝2-7	杯身	4
313	344	2	溝2-7	杯身	2
314	400	2	地山直上	杯身	1
315	229	2	溝2-7	杯身	1
316	273	2	溝2-5	杯身	1
317	347	2	溝2-6	杯身	1
318	327	2	土坑2-5	杯身	1
319	221	2	溝2-1上面	杯身	1
320	399	2	地山直上	杯身	1
321	270	2	溝2-5	杯身	2
322	220	2	溝2-1上面	杯身	1
323	422	2	溝2-1上面	杯身	1
324	215	2	溝2-7	杯蓋	2
325	393	2	地山直上	杯蓋	2
326	155	2	土坑2-6	杯蓋	2
327	210	2	溝2-5	杯蓋	2
328	426	2	溝2-1	杯身	1
329	407	2	地山直上	杯身	1
330	404	2	地山直上	杯身	1
331	225	2	溝2-5	杯身	1
332	405	2	溝2-5	杯身	1
333	219	2	溝2-1上面	杯身	1
334	398	2	地山直上	杯身	1
335	425	2	溝2-1	杯身	1
336	423	2	溝2-1上面	杯身	1
337	341	2	溝2-6	杯身	1
338	406	2	地山直上	杯身	1
339	408	2	地山直上	杯身	1
340	217	2	溝2-1	小壷	5
341	392	2	地山直上	台付小壷	4
342	332	2	溝2-1	長脚無蓋高杯	4
343	331	2	溝2-1上面	高杯蓋	1
344	397	2	地山直上	高杯蓋	1
345	213	2	溝2-7	高杯蓋	1
346	153	2	土坑2-6	短脚無蓋高杯	2
347	263	2	溝2-1	短脚有蓋高杯	2
348	274	2	溝2-5	短脚有蓋高杯	2
349	427	2	溝2-1上面	長脚有蓋高杯	4
350	159	2	土坑2-5	長脚有蓋高杯	4
351	160	2	土坑2-5	長頸壷	5
352	218	2	灰褐土	甕蓋	5

図番号	実測番号	地区	遺構・土層	器種	残存率
353	314	2	地山直上	提瓶把手	5
354	161	2	土坑2-3	提瓶	4
355	158	2	土坑2-3	ハソウ	4
356	137	2	溝2-7	ハソウ	4
357	261	2	溝2-1上面	ハソウ	1
358	135	2	溝2-6	ハソウ	4
359	134	2	地山直上	ハソウ	4
360	136	2	地山直上	ハソウ	4
361	133	2	地山直上	ハソウ	4
362	284	2	溝2-1	台付鉢	2
363	247	2	溝2-1	把手付甕	2
364	311	2	灰褐土	陶製紡錘車	4
365	211	2	溝2-6	短頸壺蓋	1
366	139	2	地山直上	短頸壺	1
367	265	2	溝2-1上面	短頸壺	1
368	264	2	溝2-1	短頸壺	2
369	214	2	溝2-7	長頸壺蓋	1
370	141	2	地山直上	長頸壺蓋	1
371	317	2	溝2-5	横瓶	5
372	319	2	溝2-1上面	横瓶	5
373	320	2	溝2-6	台付長頸壺	5
374	260	2	溝2-1上面	台付長頸壺	5
375	140	2	溝2-6	台付長頸壺	4
376	259	2	溝2-1上面	台付長頸壺	5
377	315	2	地山直上	台付長頸壺	4
378	275	2	溝2-5	台付長頸壺	4
379	316	2	溝2-10	台付長頸壺	5
380	285	2	溝2-1	台付長頸壺	3
381	142	2	溝2-6	提瓶	4
382	111	2	地山直上	提瓶	5
383	248	2	地山直上	提瓶	4
384	322	2	溝2-7	コシキ	4
385	282	2	溝2-7	コシキ	5
386	321	2	溝2-7	コシキ	5
387	163	2	溝2-7	甕	5
388	162	2	溝2-1上面	横瓶	5
389	281	2	溝2-7	甕	5
390	338	2	地山直上	甕	5
391	337	2	溝2-7	甕	5
392	545	6	地山直上	杯蓋	5
393	439	7	灰褐土	杯蓋	4
394	542	7	灰褐土	杯蓋	5
395	537	7	灰褐土	杯蓋	5
396	531	7	灰褐土	杯身	5
397	540	7	灰褐土	杯身	5
398	462	5	溝5-1	杯身	5
399	460	5	灰褐土	杯身	5
400	459	5	灰褐土	杯身	5
401	536	7	灰褐土	杯身	5
402	461	5	灰褐土	杯身	5
403	543	7	灰褐土	杯身	5
404	547	6	地山直上	杯身	5
405	535	7	灰褐土	杯身	5
406	533	7	灰褐土	杯身	4
407	530	7	灰褐土	杯身	5
408	529	7	灰褐土	杯身	5
409	528	7	灰褐土	杯身	5
410	534	7	灰褐土	杯身	5
411	544	6	地山直上	杯身	5
412	465	6	地山直上	短脚高杯	5
413	466	6	灰褐土	短脚高杯	5
414	455	5	灰褐土	短脚高杯	5
415	412	7	灰褐土	短脚高杯	5
416	440	7	灰褐土	短脚高杯	5
417	532	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
418	458	5	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
419	539	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
420	442	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
421	445	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
422	444	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
423	454	5	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
424	443	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
425	446	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
426	451	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
427	452	7	地山直上	長脚有蓋高杯	5
428	449	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
429	448	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
430	447	7	溝7-1上面	長脚有蓋高杯	5
431	573	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
432	450	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
433	441	7	灰褐土	長脚有蓋高杯	5
434	453	7	溝7-1	長脚有蓋高杯	5
435	556	7	灰褐土	小鉢	4
436	555	7	灰褐土	平底鉢	5
437	463	6	灰褐土	提瓶	5
438	433	7	灰褐土	提瓶	5
439	434	7	灰褐土	提瓶	5
440	432	7	灰褐土	提瓶	5
441	431	7	溝7-1上面	提瓶	5
442	560	6	灰褐土	ハソウ	5
443	561	6	地山直上	ハソウ	5
444	549	7	灰褐土	ハソウ	4
445	436	7	灰褐土	長頸壺	5
446	428	7	溝7-1上面	長頸壺	5
447	438	7	灰褐土	長頸壺	5
448	435	7	灰褐土	短頸壺	5
449	430	7	溝7-1	短頸壺	5
450	429	7	灰褐土	短頸壺	5
451	437	7	灰褐土	短頸壺	2
452	464	6	地山直上	甕	5
453	527	7	灰褐土	甕	5
454	516	7	地山直上	甕	5
455	518	7	溝7-1上面	甕	5
456	524	7	灰褐土	甕	5
457	526	7	灰褐土	甕	5
458	522	7	灰褐土	甕	5
459	521	7	灰褐土	甕	5
460	519	7	溝7-1	甕	5
461	375	5	灰褐土	甕	5
462	517	7	灰褐土	甕	5
463	548	7	灰褐土	器台	5
464	551	7	灰褐土	器台	5
465	552	7	灰褐土	器台	5
466	409	8	地山直上	杯蓋	4
467	363	8	溝8-5	杯蓋	2
468	471	8	溝8-5	杯蓋	5
469	470	8	穴8-3	杯蓋	2
470	365	8	溝8-5	杯蓋	1
471	373	8	溝8-5	杯蓋	1
472	419	8	地山直上	杯蓋	1
473	362	8	溝8-4	杯蓋	2
474	472	8	地山直上	杯蓋	2
475	416	8	穴8-7	杯蓋	4
476	477	8	地山直上	杯身	2
477	418	8	地山直上	杯身	1
478	411	8	地山直上	杯身	1
479	410	8	地山直上	杯身	1
480	475	8	溝8-5	杯身	5
481	367	8	溝8-5	杯身	4
482	478	8	地山直上	杯身	2
483	370	8	溝8-5	杯身	2
484	415	8	溝8-5	杯身	1
485	476	8	溝8-5	杯身	1
486	372	8	溝8-5	杯身	2
487	417	8	地山直上	杯身	5
488	360	8	溝8-4	杯身	2
489	358	8	地山直上	杯身	2
490	366	8	溝8-5	杯身	2
491	478	8	地山直上	杯身	2
492	371	8	溝8-5	杯身	2
493	368	8	溝8-5	杯身	2
494	369	8	溝8-5	杯身	2
495	414	8	灰褐土	杯身	5
496	359	8	溝8-4	杯身	2
497	109	8	地山直上	小鉢	2
498	361	8	溝8-4	高杯蓋	5
499	364	8	溝8-5	高杯蓋	1
500	421	8	穴8-7	短脚無蓋高杯	1
501	469	8	溝8-4	短脚有蓋高杯	4
502	468	8	溝8-4	短脚有蓋高杯	2
503	420	8	溝8-4	短頸壺	1
504	467	8	溝8-5	こね鉢	4
505	374	8	灰褐土	甕	4
506	513	4	溝4-1	土師器皿	5
507	483	6	溝6-1	瓦器皿	5
508	485	6	溝6-2	瓦器皿	5
509	487	6	溝6-2	瓦器皿	5
510	480	6	地山直上	瓦器皿	5
511	481	6	地山直上	瓦器皿	5
512	514	4	溝4-1	土師器皿	5
513	486	6	溝6-1	瓦器椀	5
514	479	6	灰褐土	瓦器椀	5
515	489	6	溝6-1	中国製青磁皿	5
516	490	6	溝6-2	中国製青磁碗	5
517	572	2	灰褐土	中国製青磁碗	5
518	571	2	灰褐土	中国製青磁碗	5
519	379	1a	溝1-54	中国製青磁碗	4
520	493	6	溝6-1	土師質羽釜	5
521	496	6	溝6-1	土師質羽釜	5
522	495	6	地山直上	土師質羽釜	5
523	494	6	溝6-1	土師質羽釜	5
524	491	6	溝6-1	土師質羽釜	5
525	509	5	灰褐土	土師質羽釜	5
526	492	6	灰褐土	土師質羽釜	5
527	507	5	溝5-1上面	土師質羽釜	5
528	506	5	灰褐土	土師質羽釜	5

図番号	実測番号	地区	遺構・土層	器種	残存率
529	497	6	溝6-1	土師質羽釜	5
530	498	6	灰褐土	東播系すり鉢	5
531	501	6	溝6-1	東播系すり鉢	5
532	500	6	黒褐土	東播系すり鉢	5
533	499	6	溝6-1	東播系すり鉢	5
534	512	5	採集	瓦質すり鉢	5
535	505	6	灰褐土	土師質甕	5
536	511	5	溝5-1	土師質甕	5
537	504	6	灰褐土	土師質甕	5
538	503	6	灰褐土	土師質甕	5
539	502	6	灰褐土	土師質甕	5
540	566	6	灰褐土	唐草紋軒平瓦	5
541	564	6	灰褐土	唐草紋軒平瓦	5
542	378	1d	灰褐土	巴紋軒丸瓦	5
543	563	5	溝5-1上面	軒丸瓦	5
544	567	6	黒褐土	丸瓦	5
545	562	5	地山直上	丸瓦	5
546	569	7	灰褐土	平瓦	5
547	561	5	溝5-1上面	平瓦	5
548	565	6	灰褐土	平瓦	5
549	568	7	灰褐土	平瓦	5
550	570	7	灰褐土	平瓦	5
551	593	6	灰褐土	中国製青花皿	5
552	591	6	灰褐土	中国製青花碗	5
553	611	6	灰褐土	中国製青花皿	5
554	592	6	灰褐土	中国製白磁碗	5
555	614	2	灰褐土	中国製青花碗	5
556	600	5	土坑5-2	肥前磁器青磁碗	5
557	599	5	溝5-1	肥前磁器染付碗	5
558	602	7	灰褐土	肥前磁器染付碗	5
559	622	2	灰褐土	肥前磁器染付碗	5

図番号	実測番号	地区	遺構・土層	器種	残存率
560	619	6	溝6-1	中国製青花碗	5
561	606	7	灰褐土	肥前磁器染付碗	5
562	620	7	灰褐土	肥前磁器染付碗	5
563	581	3	灰褐土	肥前磁器広東形碗	5
564	623	3	灰褐土	肥前磁器広東形碗	5
565	583	3	灰褐土	瀬戸・美濃焼磁器染付碗	5
566	598	5	灰褐土	肥前磁器染付碗	5
567	618	6	灰褐土	肥前磁器染付碗	5
568	624	3	灰褐土	肥前磁器染付碗	5
569	582	3	灰褐土	肥前磁器染付碗	5
570	613	2	灰褐土	唐津焼皿	5
571	590	3	灰褐土	唐津焼皿	5
572	610	3	灰褐土	唐津系陶器刷毛目文皿	5
573	595	6	灰褐土	唐津焼皿	5
574	380	1a	灰褐土	唐津焼鉄絵皿	5
575	609	3	灰褐土	唐津系陶器灰釉碗	5
576	588	6	灰褐土	唐津焼碗	5
577	612	2	灰褐土	唐津焼碗	5
578	589	6	灰褐土	瀬戸・美濃焼緑釉碗	5
579	488	6	溝6-1上面	丹波焼徳利	5
580	607	6	地山直上	京焼系灯明受皿	5
581	585	3	溝3-1	京焼系灯明皿	5
582	625	5	耕土	京焼系有脚灯明皿	4
583	621	6	耕土	加工円盤	1
584	617	2	灰褐土	加工円盤	1
585	615	3	灰褐土	堺焼擂鉢	5
586	584	3	灰褐土	堺焼擂鉢	5
587	604	7	灰褐土	唐津系陶器三島手鉢	5
588	605	7	灰褐土	丹波焼甕	5

残存率　1：完形・ほぼ完形　2：石膏補填で完形
3：石膏補填で半完形　4：1／2以上の破片
5：1／2以下の小破片

図　　版

図版1

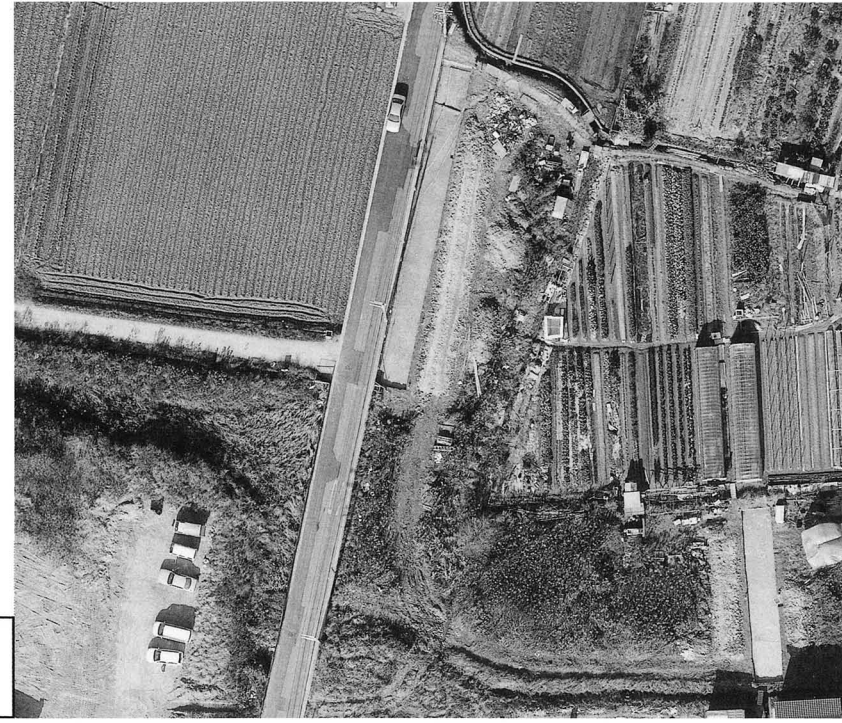
1区・2区

1c～e区

1a区

2区

図版2



3区・4区

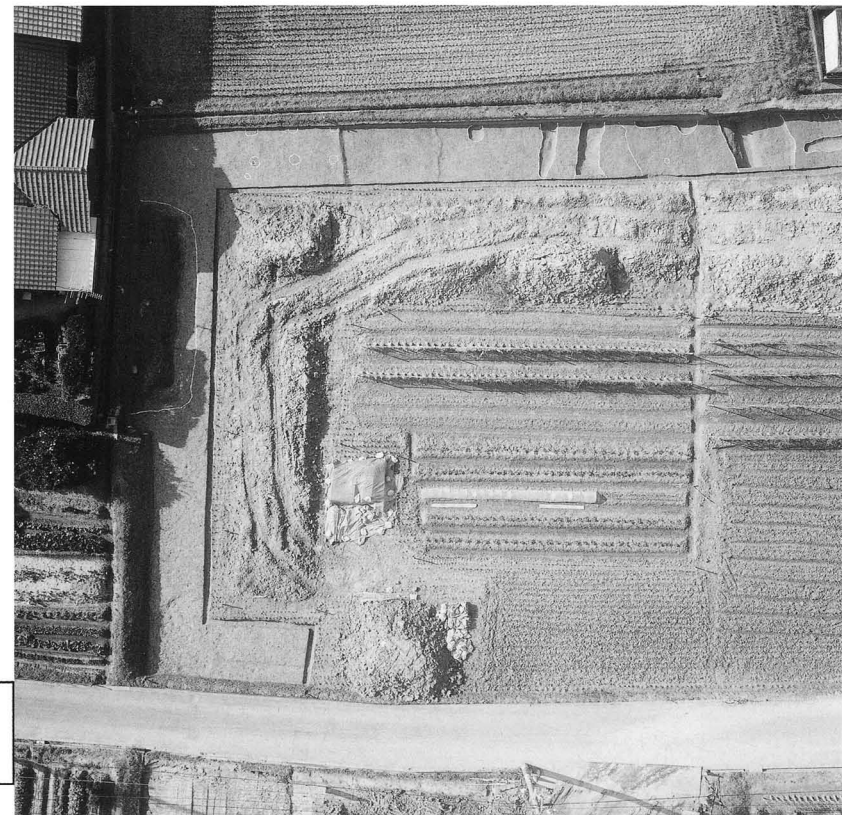
5区

6区

図版３

7区

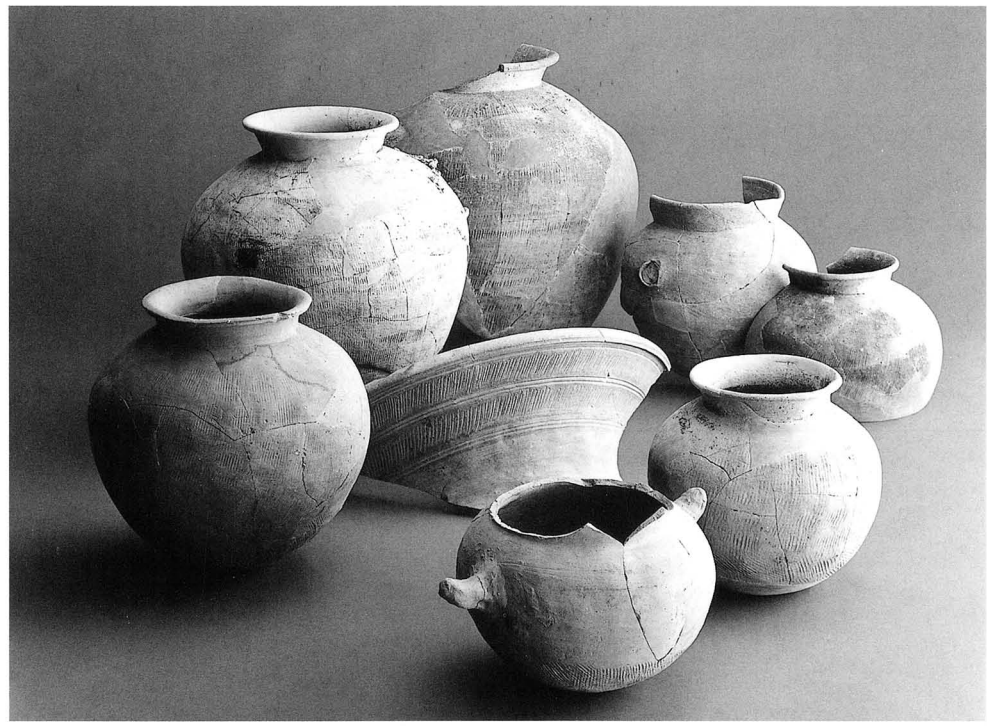
5～7区



8区

図版４

杯など（８区）



甕など（１・２区）

横瓶など（１・２区）

図版５

高坏など（１・２区）

壷など（１・２区）

ハソウなど（１・２区）

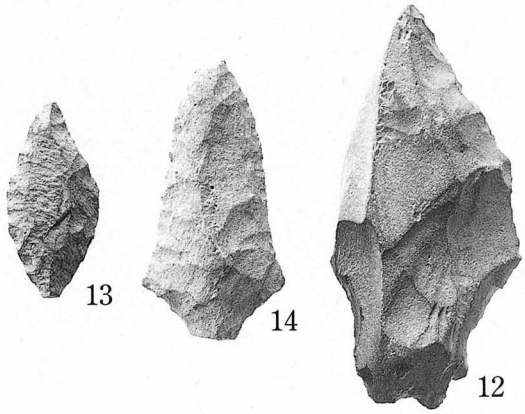
図版６

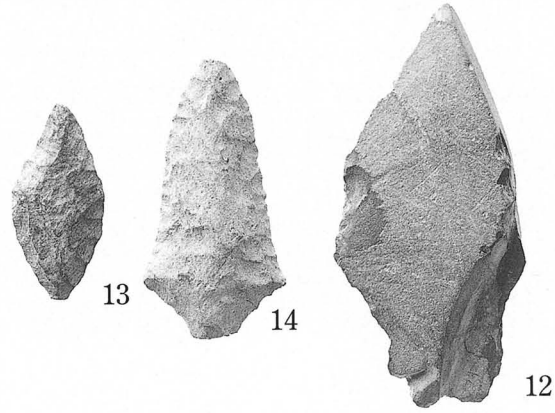
鉢など（１・２区）

乾燥台など（１・２区）

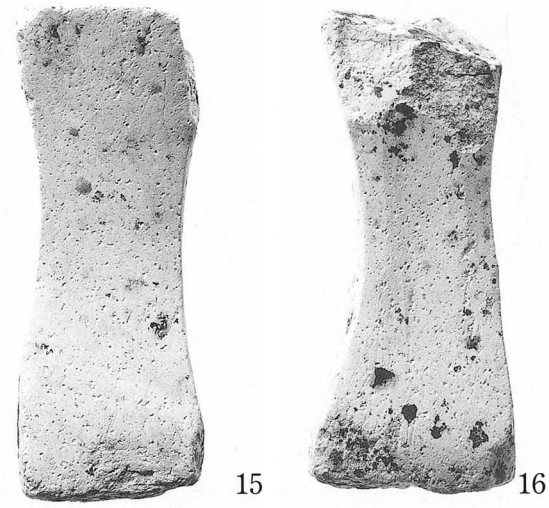
土師器小壷など（１・２区）

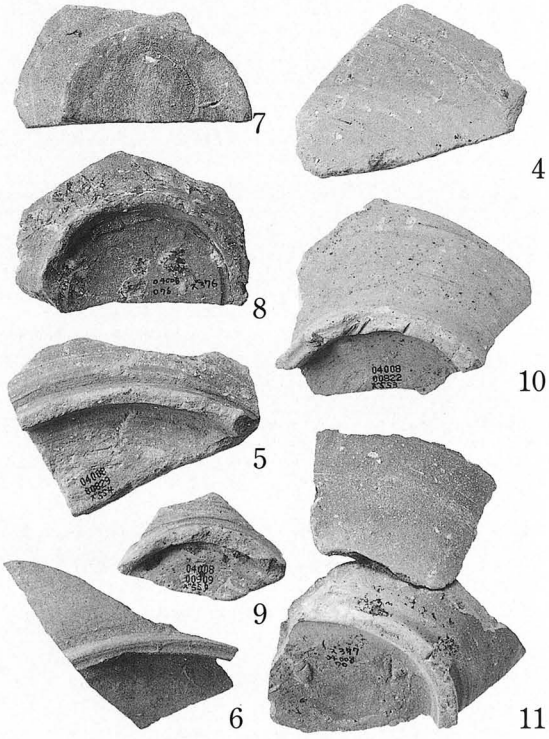
図版7

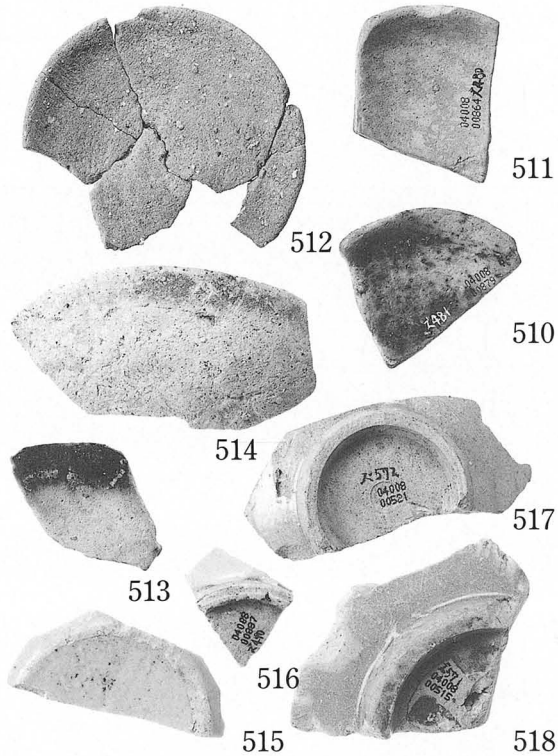

13
14
12

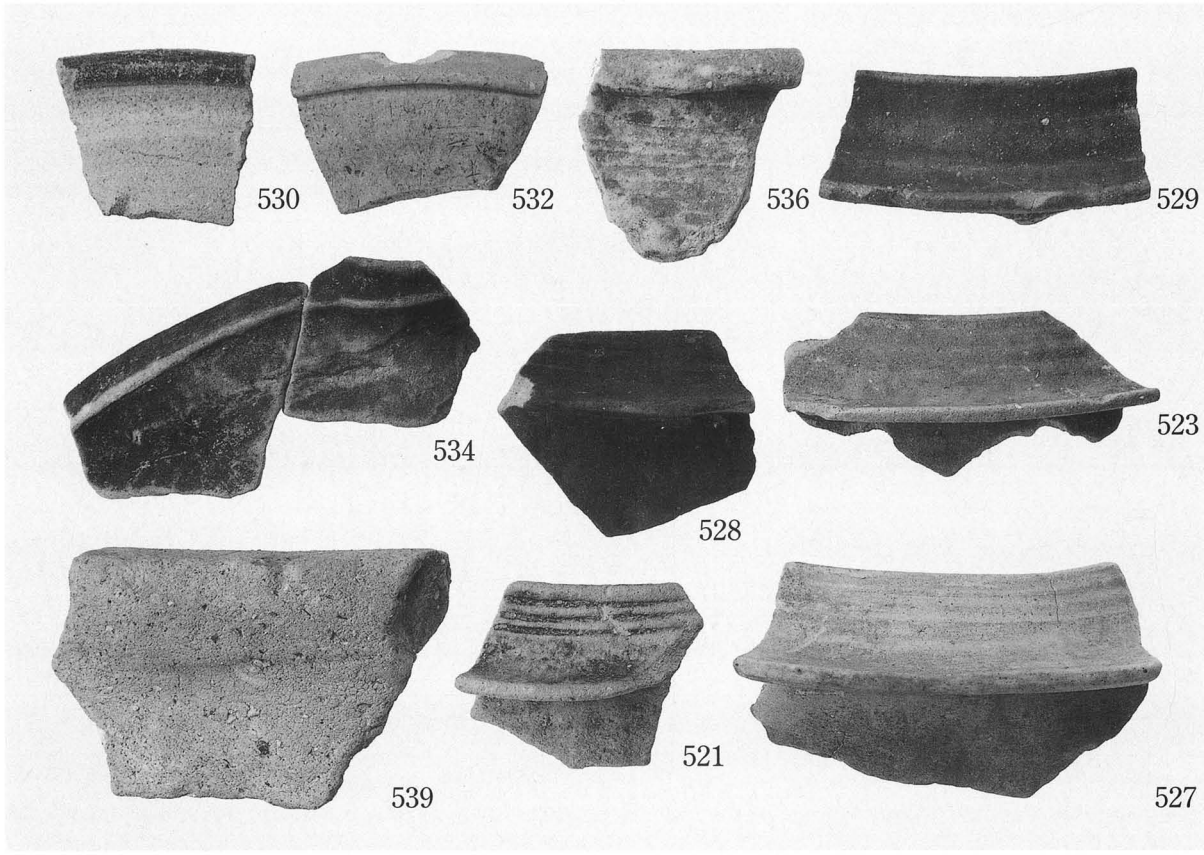

13
14
12

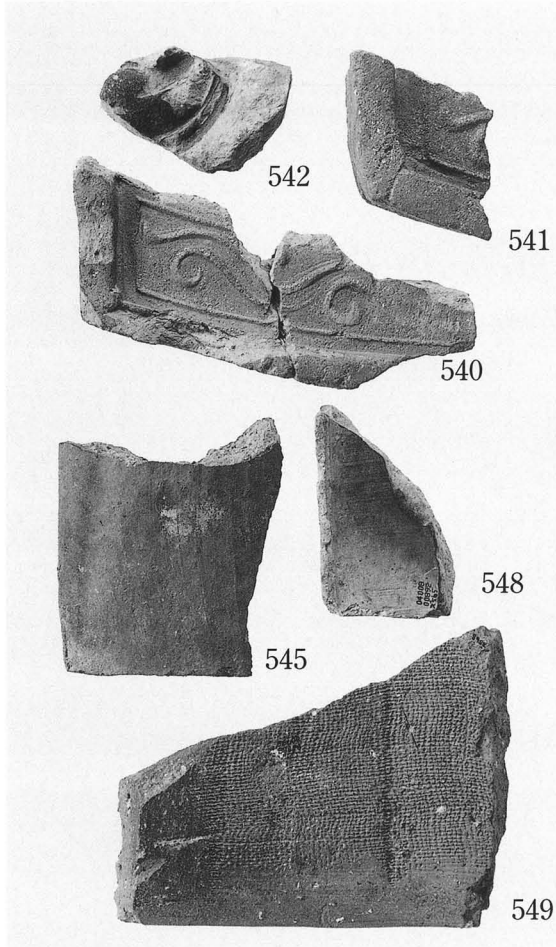
519

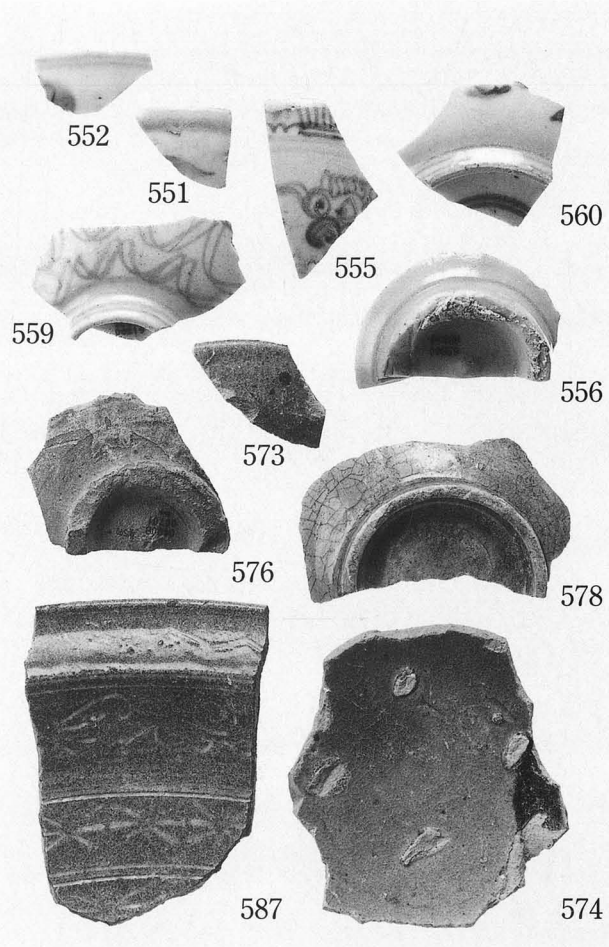

15
16


7
4
8
10
5
9
6
11


511
512
510
514
517
513
516
515
518


530
532
536
529
534
523
528
539
521
527


542
541
540
548
545
549


552
551
560
555
559
556
573
576
578
587
574

報告書抄録

ふりがな	とうきせんづか・とうきいせきはっくつちょうさがいよう・Ⅱ
書名	陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要・Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西川寿勝・渡辺晴香・佐々木健太郎
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL 06-6941-0351(代表)
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
とうきいせき 陶器遺跡	おおさかふさかしとうききた 大阪府堺市陶器北	27201	183	34°31′04″	135°31′20″	2004年6月10日～2005年3月25日まで	1,440m²	府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査
とうきせんづか 陶器千塚	おおさかふさかしとうききた 大阪府堺市陶器北	27201	130	34°31′02″	135°31′15″	2004年6月10日～2005年3月25日まで	860m² 合計 2,300m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
とうきいせき 陶器遺跡	集落	古墳時代後期・室町～江戸時代	溝・区画溝・土坑	須恵器・土師器・陶磁器	須恵器工人関連集落・陶器藩関連遺構?
とうきせんづか 陶器千塚	古墳	古墳時代後期	溝・土坑	須恵器・土師器・陶磁器	須恵器工人関連集落

陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要・Ⅱ

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL　06－6941－0351
発行日　2006年3月31日
印　刷　(株)近畿印刷センター
〒582－0001
大阪府柏原市本郷5丁目6番25号